

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(42)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

長浜金久遺跡

(第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡)

1987年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が、新奄美空港建設に伴って昭和61年度に実施した長浜金久遺跡の発掘調査の記録であり、昭和60年3月に発行した同遺跡の報告書に続くものです。

長浜金久遺跡は、昭和57年度から発掘調査を実施してきており、これまで縄文時代の住居跡、弥生時代の人骨、大量の貝殻や貝製品など、地域的特色を示す遺構・遺物等が多数発見されました。

本書は、南西諸島の先史・古代史の解明に貴重な手がかりを提供するものと考えます。

本書を地域の歴史研究や文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部港湾課・道路建設課、大島支庁、笠利町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和62年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 山 田 克 穂

例 言

1. この報告書は新奄美空港に伴う長浜金久遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿児島県土木部港湾課と道路建設課の依頼で鹿児島県教育委員会が行った。
3. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
4. 本遺跡調査においては下記の方々に指導助言を得た。

文化庁文化財調査官	伊 藤 稔
鹿児島県考古学会々長	河 口 貞 徳

5. 放射性炭素測定については京都産業大学、山田治氏に依頼した。
6. 獣骨の同定および所見については鹿児島大学農学部助教授西中川駿氏に協力を得た。
7. 実測・トレース・レイアウト・写真関係は弥栄・旭が行った。

なお、執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章 第Ⅲ章第1節2-(1), 3 第2節, 2-(1), 4 第3節1, 2-(1), 3
第Ⅳ章2, 第Ⅴ章……………弥栄
第Ⅱ章 第Ⅲ章第1節1, 2-(2), 3 第2節1, 2-(2)3, 4, 第3節2-(2)
第Ⅳ章1……………旭

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織と経過	1
1. 調査の組織	1
2. 調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境及び層序	3
第1節 遺跡の環境と周辺遺跡	3
第2節 遺跡の立地	3
第3節 層 序	3
第Ⅲ章 調査の概要	10
第1節 長浜金久第Ⅲ遺跡の調査	10
1. 遺跡の概要	10
(1) 第1地点・(2) 第2地点・(3) 第3地点	10
2. 出土遺物	15
(1) 土 器	15
(2) 貝製品	21
3. 小 結	25
第2節 長浜金久第Ⅳ遺跡の調査	26
1. 遺跡の概要	26
2. 出土遺物	26
(1) 土器・土製品	26
(2) 石 器	36
3. 貝製品	36
4. 小 結	39
第3節 長浜金久第Ⅴ遺跡の調査	40
1. 遺跡の概要	40
2. 出土遺物	40
(1) 土 器	40
(2) 貝 器	44
3. 小 結	45
第Ⅳ章 自然遺物及び放射性炭素測定	46
1. 貝 類	46
2. 動物骨	48
3. 放射性炭素測定	48
第Ⅴ章 ま と め	49

挿 図 目 次

第1図	長浜金久第1遺跡の位置と周辺遺跡	4
第2図	新奄美空港開発に関係した遺跡の位置と地形	6
第3図	長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡のグリッドと調査地域	7
第4図	長浜金久第Ⅲ遺跡の土層断面図	8
第5図	長浜金久第Ⅳ・Ⅴ遺跡の土層断面図	9
第6図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土状況	11
第7図	長浜金久第Ⅲ遺跡第2地点の出土状況と土層図	12
第8図	長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の建物跡実測図	13
第9図	長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の建物跡内の出土遺物実測図	13
第10図	長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の土坑実測図	14
第11図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土土器1)	18
第12図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土土器2)	19
第13図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土土器3)	20
第14図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の貝製品実測図1)有孔貝・貝輪	21
第15図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の貝製品実測図2)貝製容器	22
第16図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の貝斧実測図1)	23
第17図	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の貝斧実測図2)	24
第18図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土状況図4層・5層	27
第19図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土土器1a)	30
第20図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土土器1b)	31
第21図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土土器2)	32
第22図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土土器3)	33
第23図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土土器4)	34
第24図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土土器5)	35
第25図	長浜金久第Ⅳ遺跡の出土石器実測図	36
第26図	長浜金久第Ⅳ遺跡出土の貝製品実測図(貝鏃)	36
第27図	長浜金久第Ⅳ遺跡出土の貝斧実測図1)	37
第28図	長浜金久第Ⅳ遺跡出土の貝斧実測図2)	38
第29図	長浜金久第Ⅴ遺跡の出土状況図	41
第30図	長浜金久第Ⅴ遺跡の出土土器1)	42
第31図	長浜金久第Ⅴ遺跡の出土土器2)	43
第32図	長浜金久第Ⅴ遺跡の貝斧実測図	44
第33図	砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地	51

第34図	長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡出土土器の土器分類図	52
第35図	長浜金久第Ⅰ遺跡出土の土器分類図	53

表 目 次

第1表	新奄美空港関係の調査	1
第2表	長浜金久遺跡と周辺遺跡一覧	5
第3表	長浜金久第Ⅲ遺跡の土器諸訳一覧(1)	17
第4表	長浜金久第Ⅲ遺跡の土器諸訳一覧(2)	21
第5表	長浜金久第Ⅲ遺跡の貝製容器諸訳一覧	23
第6表	長浜金久第Ⅲ遺跡の貝斧諸訳一覧	23
第7表	長浜金久第Ⅳ遺跡の土器諸訳一覧	29
第8表	長浜金久第Ⅳ遺跡の貝斧諸訳一覧	37
第9表	長浜金久第Ⅴ遺跡の土器諸訳一覧(1)	44
第10表	長浜金久第Ⅴ遺跡の土器諸訳一覧(2)	45
第11表	長浜金久第Ⅴ遺跡の貝斧諸訳一覧	45
第12表	長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の貝類一覧(1)	46
第13表	長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の貝類一覧(2)	47

図 版 目 次

P L - 1	長浜金久遺跡全景	
	長浜金久第Ⅲ・Ⅳ遺跡の調査開始	54
P L - 2	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土状況	
	長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の土壇検出状況	55
P L - 3	長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点建物跡	
	長浜金久第Ⅲ遺跡・免田式土器出土状況	56
P L - 4	長浜金久第Ⅲ遺跡第2地点の調査風景	
	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土状況	57
P L - 5	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物	
	長浜金久第Ⅲ遺跡第1・3地点の出土遺物	58
P L - 6	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物(表)	
	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物(裏)	59
P L - 7	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物	
	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物	60

PL-8	長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物	
	長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の建物跡の出土遺物	61
PL-9	長浜金久第Ⅳ遺跡遺物出土状況	
	長浜金久第Ⅳ遺跡土層断面	62
PL-10	長浜金久第Ⅳ遺跡遺物検出状況	
	長浜金久第Ⅳ遺跡遺物検出状況	63
PL-11	長浜金久第Ⅳ遺跡遺物出土状況	
	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物	64
PL-12	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器表)	
	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器裏)	65
PL-13	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器表)	
	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器裏)	66
PL-14	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器)	
	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器)	67
PL-15	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器)	
	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器)	68
PL-16	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物	
	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (石器)	69
PL-17	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (貝鏃)	
	長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (貝斧)	70
PL-18	長浜金久第Ⅴ遺跡遺物出土状況 (崖部)	
	長浜金久第Ⅴ遺跡遺跡全景	71
PL-19	長浜金久第Ⅴ遺跡遺物出土状況	
	長浜金久第Ⅴ遺跡出土遺物 (土器)	72
PL-20	長浜金久第Ⅴ遺跡出土遺物 (土器)	
	長浜金久第Ⅴ遺跡出土遺物 (貝斧)	73

第I章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は大島郡笠利町万屋・和野地区に新奄美空港の建設を計画し、その建設用地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在するため、県土木部港湾課からその取り扱いについて県教育庁文化課に協議があった。そして、県教育委員会は、埋蔵文化財の発掘調査を受託し、57年度に確認調査を実施し、長浜金久第Ⅰ・Ⅱ遺跡を確認した。58年度は長浜金久第Ⅰ・Ⅱ遺跡の記録保存のための発掘調査を実施した。

しかし、58年度調査に着手すると、遺物の量も多く、ひろがりもみられたので新たに、59年度の調査として、長浜金久第Ⅰ遺跡拡大部の発掘調査をすることになった。長浜金久第Ⅲ遺跡は59年度の発掘調査の時に現県道部と重って発見された。現県道部の部分と長浜金久第Ⅲ遺跡については工事の関係上、61年度に調査を実施した。なお、泉川遺跡は60年度に調査を行っている。

また、長浜金久第Ⅲ遺跡等については南側に付け替え道路を建設する旨60年度に道路建設課より協議があり、61年度に調査することになった。

なお、港湾課関係の調査は昭和61年9月8日から10月4日まで、道路建設課関係の調査は10月6日から10月25日まで実施した。

次の表は新奄美空港関係で調査された遺跡の年次別一覧表である。

第1表 新奄美空港関係の調査

年度	遺跡名	調査期間	調査内容	主管課
57	長浜金久第Ⅰ・第Ⅱ	昭和58年1月24日～2月12日	試掘調査(1次)	空港対策室
58	長浜金久第Ⅰ・第Ⅱ	昭和58年10月11日～12月26日	本調査(2次)	〃
59	長浜金久第Ⅰ・第Ⅲ	昭和59年4月16日～7月14日	第Ⅰは本調査 第Ⅲは試掘調査(3次)	〃
59	トフル墓・下山田遺跡・ケジⅡ	昭和59年10月31日～60年3月26日	本調査	道路建設課
60	ケジⅠ・Ⅲ	昭和60年6月4日～8月14日	本調査	〃
60	泉川	昭和60年9月2日～11月2日	本調査(4次)	空港対策室
61	長浜金久第Ⅲ・第Ⅳ・第Ⅴ	昭和61年9月8日～10月25日	本調査(5次)	港湾課 空港対策室 道路建設課

第2節 調査の組織と経過

1. 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	山 田 克 穂
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	桑 原 一 廣
	〃	課 長 補 佐	川 畑 栄 造
	〃	主 幹	中 村 文 夫
調査企画	〃	主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	立 園 多 賀 生
調査者	〃	文化財研究員	旭 慶 男
	〃	主 査	弥 栄 久 志

事務担当 鹿児島県教育庁文化課 企画助成係長 濱松 巖
主査 京田 秀允
主事 川畑 由紀子

2. 調査の経過 (日誌抄)

9月8日(月)～9月13日(土)

樹木の伐採・抜根, 焼き払い。グリッド設定。D～I-4区, C～F-6区, C-5～10区, A～C-10区に2m幅のトレンチを設け掘下げ。C-7～9区に土壌6基検出。写真撮影・実測。トレンチの土層断面図作成。D-4区4層より貝類出土。バックホー2.5日使用。

9月16日(火)～9月20日(土)

B～K-3～10区の掘下げ。B～D-3～5区4層から貝類・土器などの遺物が出土し, 第Ⅲ遺跡第1地点とする。E・F-6・7区に略方形の建物跡が検出され, C-7～9区で検出された土壌と合わせて第Ⅲ遺跡第3地点とする。G・K-3・4区4・5層から貝類・土器などの遺物が出土し, 第Ⅳ遺跡とする。建物跡遺構の検出, 写真撮影, 実測, 遺物取り上げ。I-2区5層上面から磨製貝鏃出土。バックホー4.5日使用。

9月24日(水)～9月27日(土)

A～D-11～14区の湿地帯掘り下げ。砂泥層から少量出土し, 第Ⅲ遺跡第2地点とする。第Ⅲ遺跡第1地点・第Ⅳ遺跡掘下げ。第Ⅲ遺跡第1地点B-4区4層から有孔貝製品出土。9月26・27日鹿児島県考古学会々長河口貞徳氏現地指導のため来跡。バックホー3日使用。

9月29日(月)～10月3日(金)

第Ⅲ遺跡第2地点出土遺物実測, 取り上げ。土層断面図作成。第Ⅳ遺跡・第Ⅲ遺跡第1地点出土遺物実測, 取り上げ。コンタ図作成。第Ⅴ遺跡G～J-1・2区(現県道下)の掘下げ。バックホー5日使用。

10月6日(月)～10月11日(土)

第Ⅴ遺跡G～J-1・2区の掘下げ。出土遺物実測, 取り上げ。第Ⅲ遺跡第1地点A'～D-2・3区(現県道下)の掘下げ。10月8・9日文化庁伊藤稔調査官現地指導のため来跡。

10月13日(月)～10月17日(金)

第Ⅳ遺跡出土遺物実測, 取り上げ。コンタ図作成。東壁土層断面図作成。第Ⅲ遺跡第1地点A'～D-2・3区出土遺物の実測, 取り上げ。A-3区4層より免田式土器出土。

10月20日(月)～10月25日(土)

昭和58年度調査の長浜金久第Ⅱ遺跡の南側, 現県道下に貝類・土器などの遺物出土し, 第Ⅴ遺跡とする第Ⅳ遺跡の掘り下げ, 出土遺物実測, 取り上げ。10月25日で調査終了。

10月27日以降収蔵庫にて整理作業, 報告書作成。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境及び層序

第1節 遺跡の環境と周辺の遺跡

長浜金久遺跡は、大島郡笠利町和野長浜金久に所在する。本遺跡のある笠利町は、奄美大島の最北端部に位置し、南北約15km、東西約4.5kmの細長い半島である。この半島の中央部には、高岳（183.6m）、大刈山（180.7m）、淀山（175m）等が南北に走り東西の海岸地帯を分断している。半島の西海岸は沈降して溺れ谷の地貌を呈しているが、東側は逆に隆起して緩かな丘陵状の台地を形成している。東海岸では海岸線にそって砂丘が発達し、ほとんどの遺跡がこの砂丘上に集中している。東海岸に発達した砂丘はさらに洪積台地の裾部に形成された旧期砂丘と、現海岸線を形成する新砂丘とに区分されている。内陸部の洪積台地の裾野に形成された旧砂丘上には、宇宿貝塚、宇宿高叉遺跡、宇宿小学校遺跡、下山田遺跡、ケジ遺跡、長浜第Ⅱ遺跡などの縄文時代の遺跡が立地し、海岸側の新砂丘上には長浜金久第Ⅰ遺跡、泉川遺跡など古墳時代末から奈良・平安時代にかけての比較的新しい遺跡が立地している。また、この旧砂丘と新砂丘の間には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡があり、砂丘の形成とともに生活域が変化しているようすを窺い知ることができる。

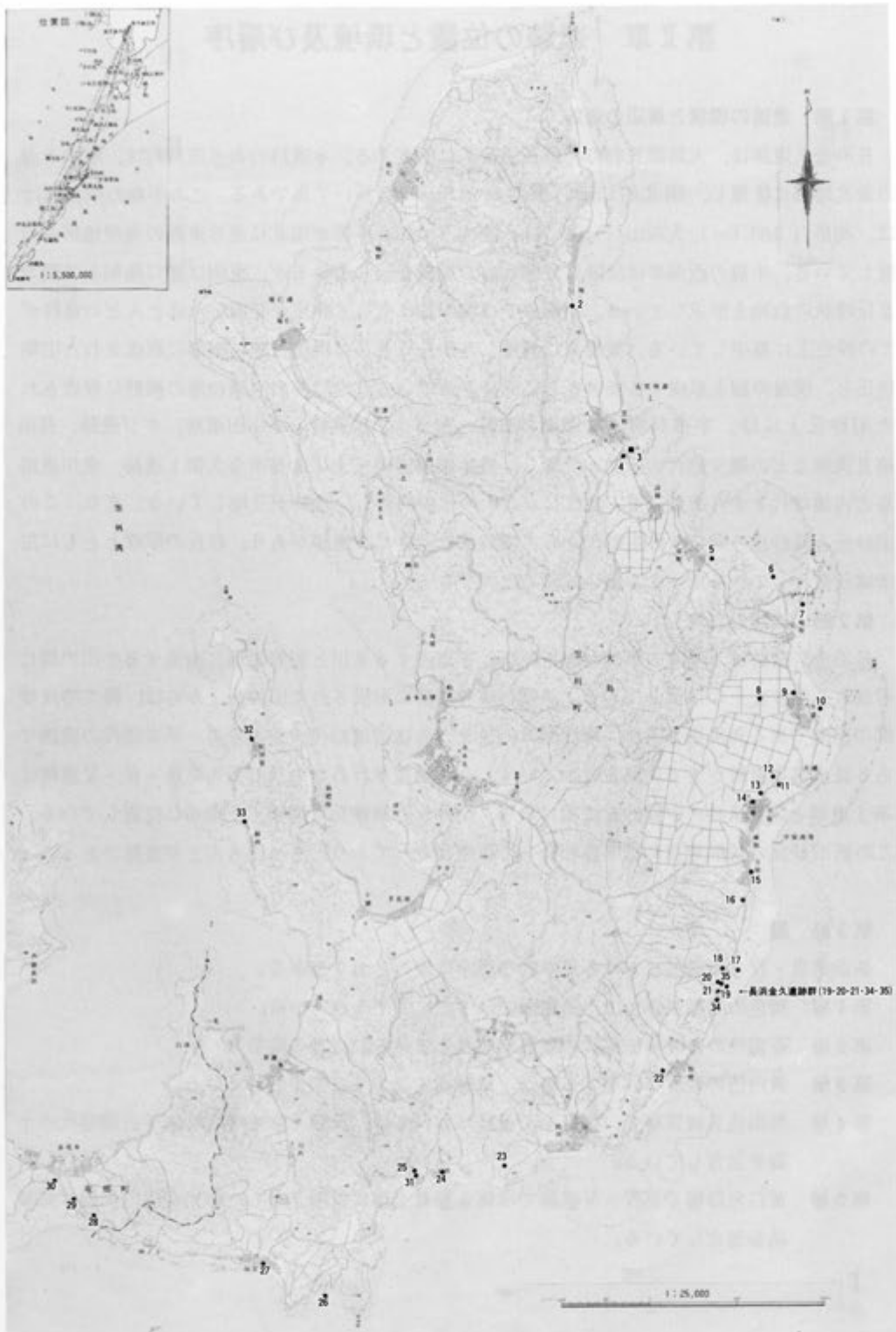
第2節 遺跡の立地

長浜金久遺跡は、後背の洪積台地を開析して東流する泉川と和野集落に南流する小川の間形成された砂丘上に位置している。洪積台地の裾部に形成された旧砂丘上からは、縄文時代後期の遺跡である長浜第Ⅱ遺跡、海岸側の新砂丘からは古墳時代末から奈良・平安時代の遺跡である長浜第Ⅰ遺跡がすでに調査されている。今回調査が行われた長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡は、第Ⅰ遺跡と第Ⅱ遺跡の中間的な位置にあり、旧砂丘と新砂丘が接触する地点に位置している。この新旧砂丘の接触地点には県道和野一万屋線が走っており、そのほとんどが遺跡である。

第3節 層 序

長浜第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡における基本的な層序は次のとおりである。

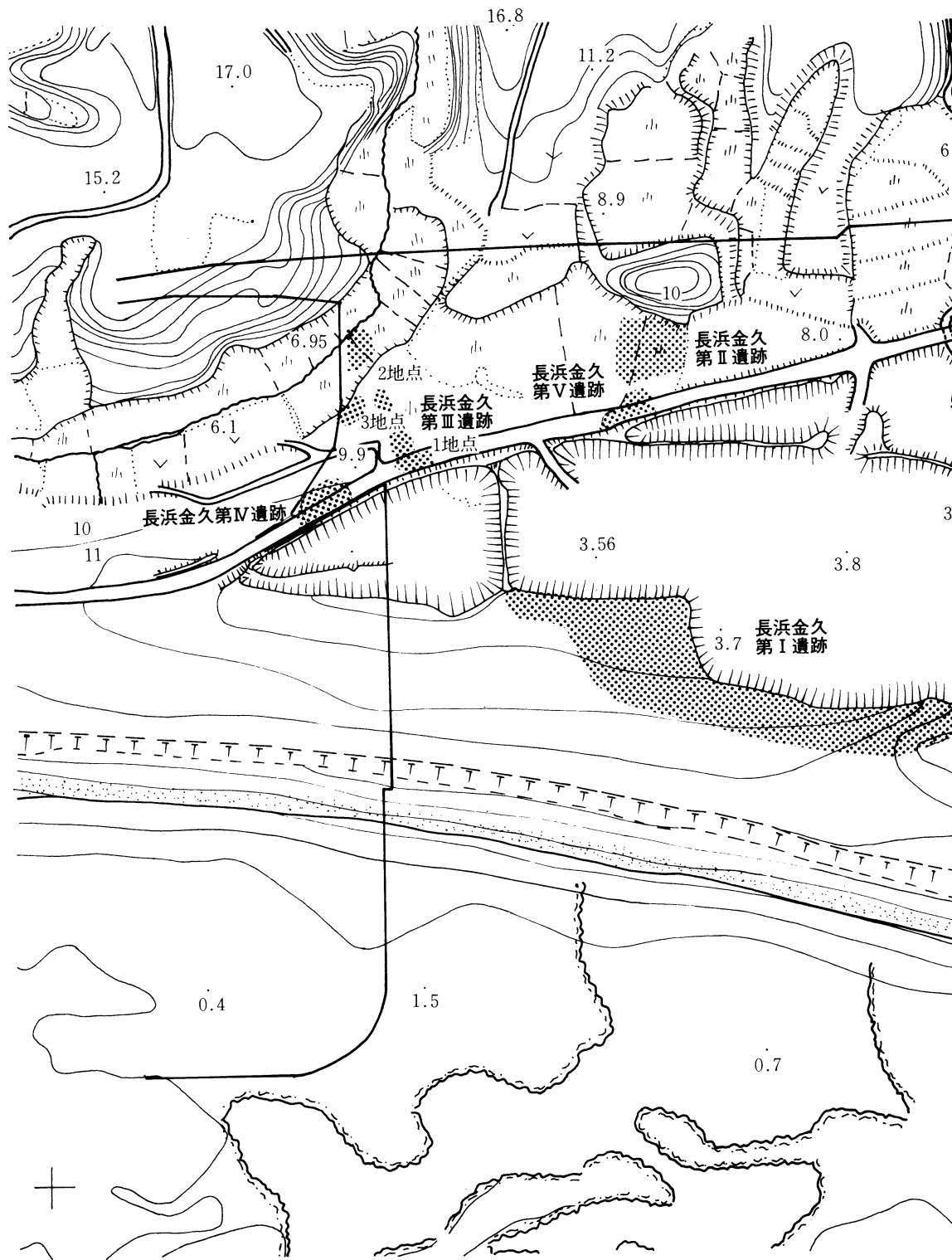
- 第1層 褐色の腐植耕作土で、道路面ではすでに削平されている。
- 第2層 茶褐色の砂質層で蘇鉄の樹根が繁茂している。近世の陶器等
- 第3層 黄白色の新鮮な砂層であるが、道路面ではすでに削平されている。
- 第4層 黒褐色有機質層で、第Ⅲ・Ⅴ遺跡においては、貝類・弥生時代終末～古墳時代の土器を包含している。
- 第5層 黄白色砂層で第Ⅳ・Ⅴ遺跡では第5層最上部に貝類とともに弥生時代の土器・貝製品を包含している。



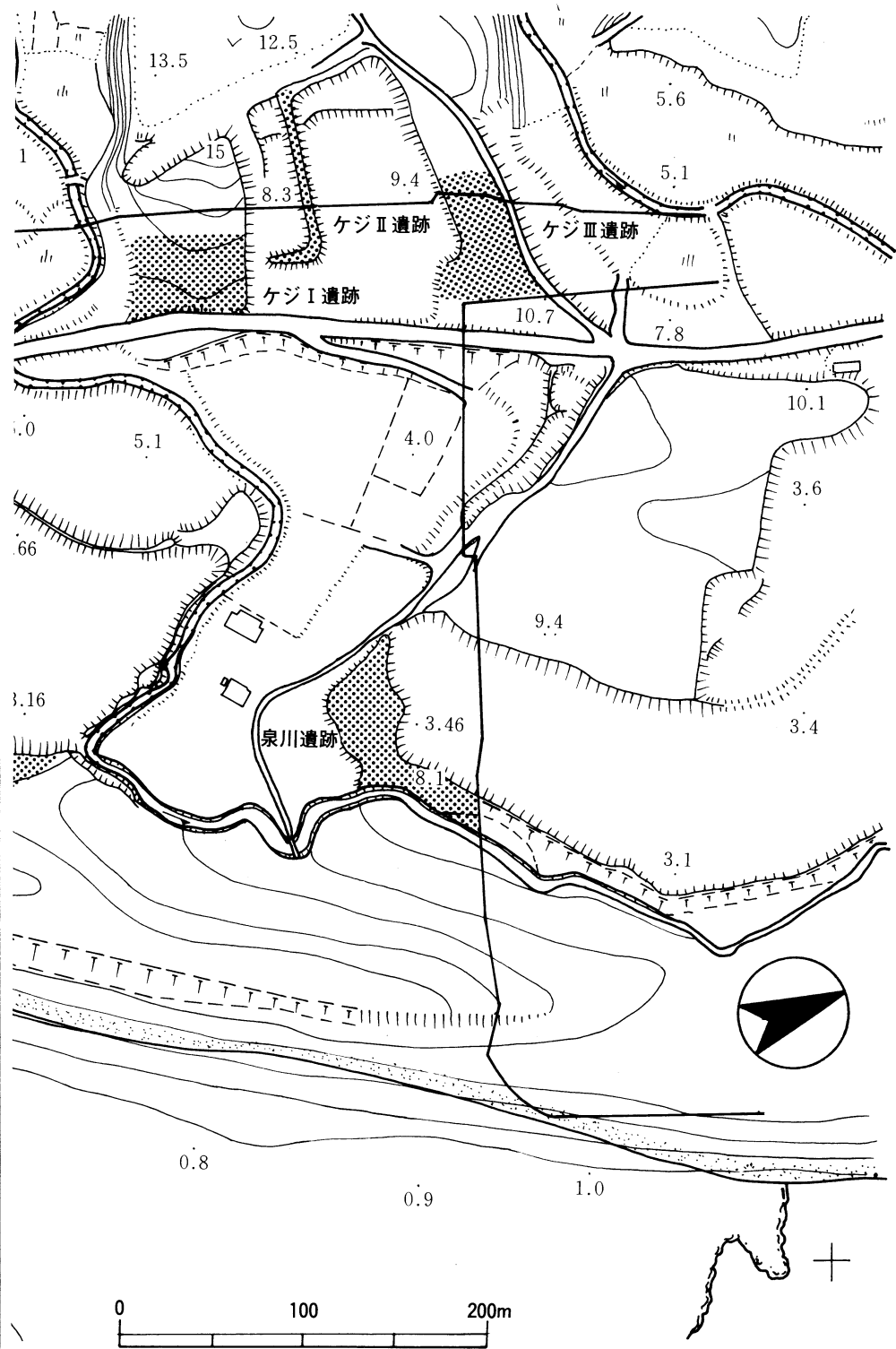
第1図 長浜金久遺跡の位置と周辺遺跡

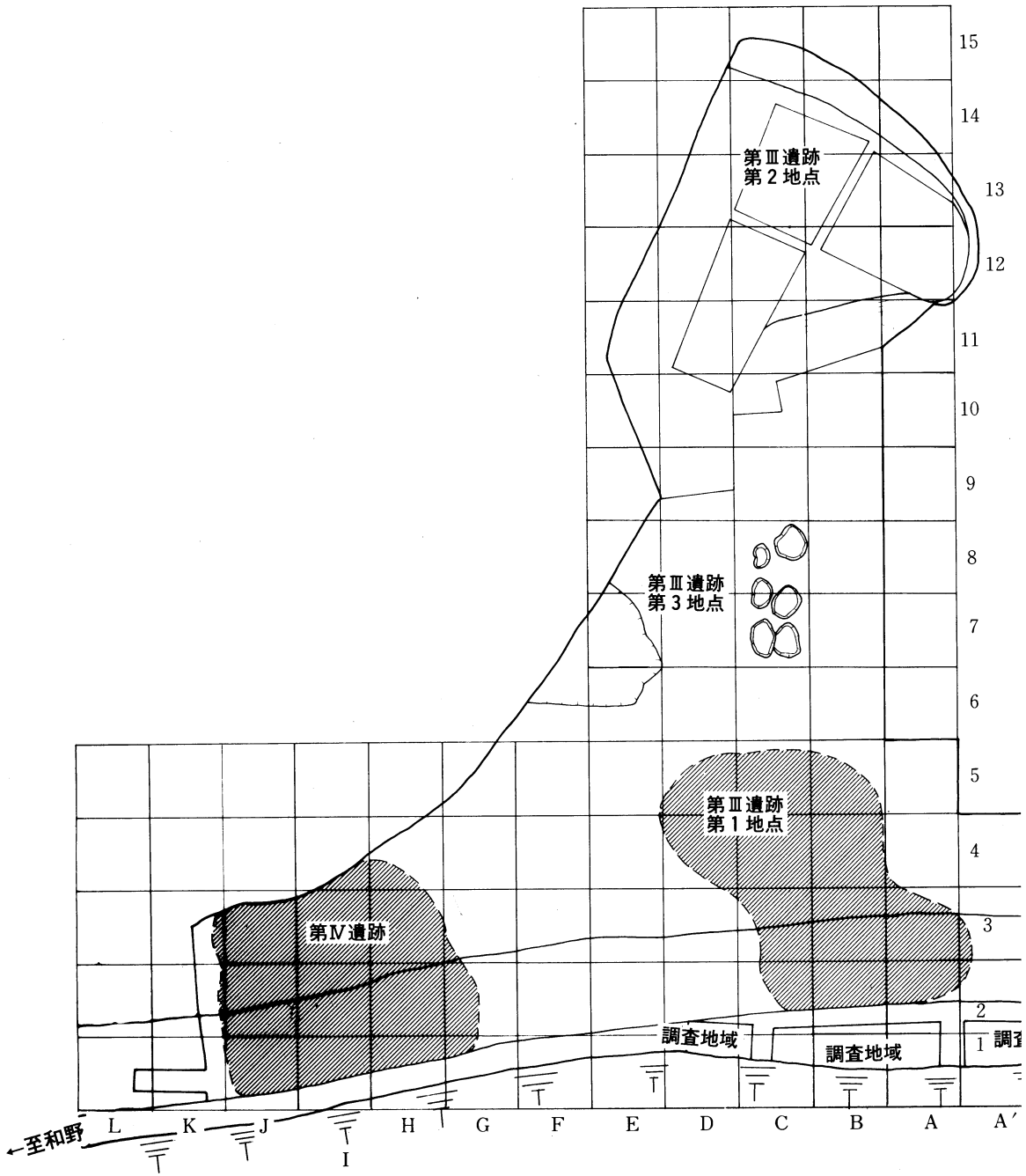
第1表 長浜金久遺跡郡と周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時期	備考
1	用長浜遺跡	用子長浜	古墳	石器, 貝殻, 兼久式
2	用遺跡	用		
3	辺留城遺跡	笠利字辺留城		青磁, 類須恵器
4	辺留窪遺跡	辺留窪	古墳	石器, 兼久式, 青磁
5	コロビ遺跡	須野コロビ		
6	あやまる第二貝塚	須野字大道	弥生	石器, 弥生系土器
7	あやまる第一貝塚	須野字崎原		類須恵器
8	マツノト遺跡	字松ノト		貝殻, 兼久式
9	喜子川遺跡	喜子川	縄文	瓜形文
10	土盛遺跡	土盛		兼久式
11	宇宿港遺跡	宇宿字港	弥生	弥生式, 貝殻, 人骨
12	宇宿貝塚	宇宿字大道	縄文・弥生	宇宿下層式, 宇宿上層式
13	宇宿高又遺跡	宇宿字高又		条痕文, 曾畑
14	宇宿小学校遺跡	宇宿	縄文	宇宿下層式
15	万屋遺跡	万屋		貝殻, 兼久式
16	下山田遺跡	万屋字下山田	縄文	宇宿下層式, 面縄前庭式
17	泉川遺跡	万屋字長浜	奈良・平安	貝殻, 兼久式
18	ケジ遺跡 (ケジⅠ ⅡⅢ遺 跡含む)	万屋字ケジ	縄文	宇宿下層式, 条痕文
19	長浜金久第Ⅰ遺跡	和野字長浜	奈良・平安	兼久式, 石器, 貝殻, 人骨
20	長浜金久第Ⅱ遺跡	〃 〃		嘉徳式 〃 〃
21	長浜金久第Ⅲ遺跡	〃 〃	弥生～古墳	土器, 石器, 貝殻, 人骨
34	〃 Ⅳ 〃		弥生	
35	〃 Ⅴ 〃		弥生	
22	ナピロ川遺跡	和野字ナピロ川		兼久式, 石器
23	立神遺跡	節田		兼久式, 石器, 貝殻, 人骨
24	土浜遺跡	土浜	縄文	兼久式, 石器, 貝殻, 人骨
25	イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴	土浜	縄文	瓜形文, 弥生系土器
26	明神崎遺跡	用安字入瀬	弥生	弥生系土器, 貝殻
27	用安遺跡	用安		
28	赤尾木遺跡	赤尾木		
29	ウフタ遺跡	赤尾木ウフタ	縄文・弥生	条痕文, 面縄前庭式, 嘉徳Ⅱ式, 面縄西洞式, 夜臼式, 石斧, 石鉄
30	赤尾木保育所遺跡	赤尾木		
31	土浜ヤーヤ	土浜	縄文	
32	サウチ遺跡	喜瀬字サウチ	弥生	弥生系土器
33	鯨浜遺跡	鯨浜		類須恵器

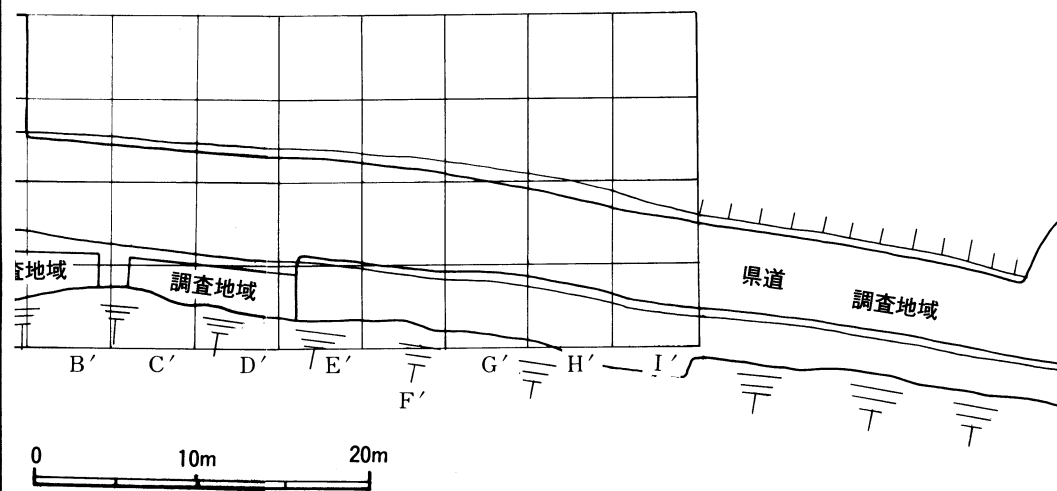


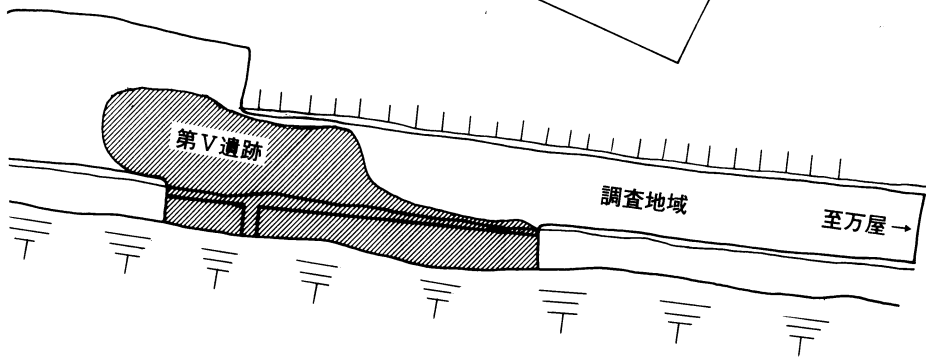
第2図 新奄美空港開発区域内の遺跡の位置と地形

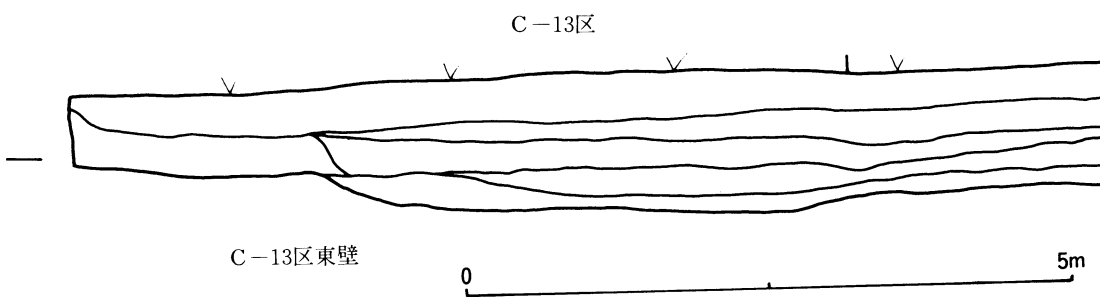
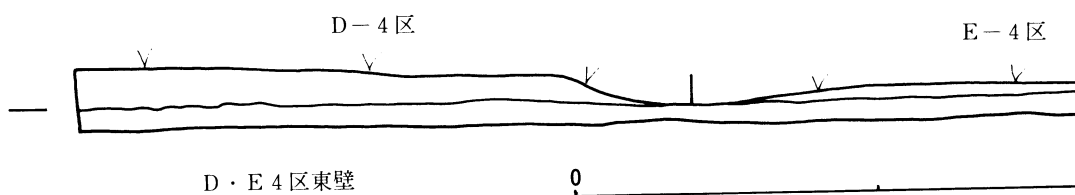
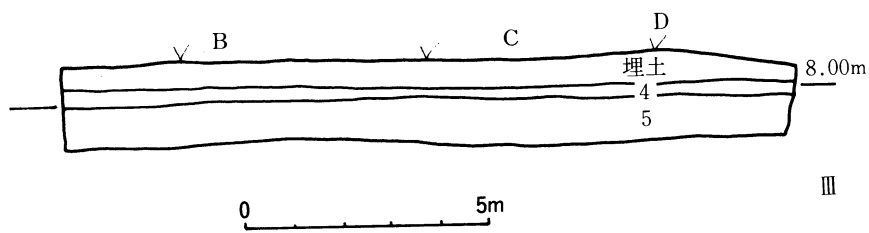
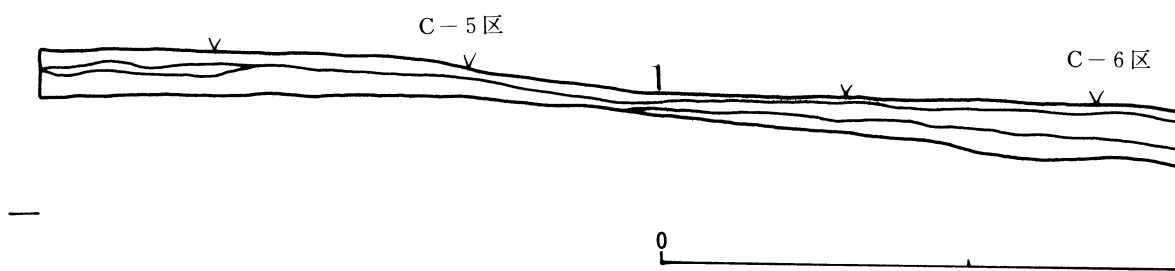




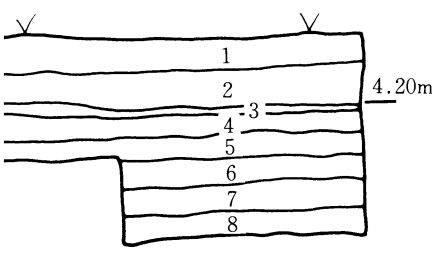
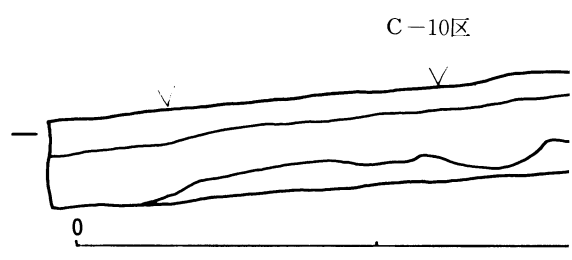
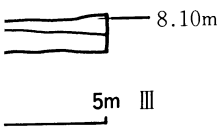
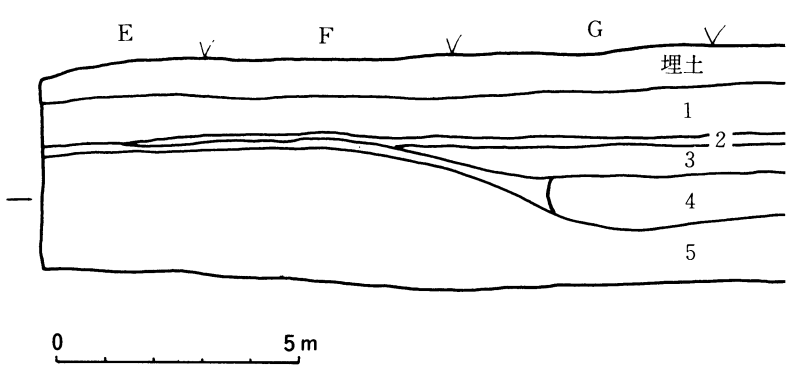
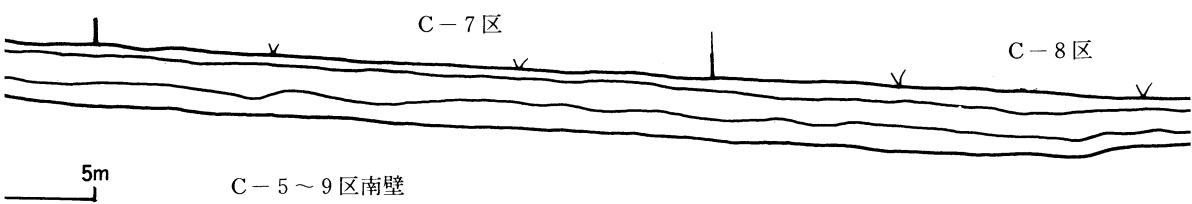
第3図 長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡のグリッド配置図と調査地域



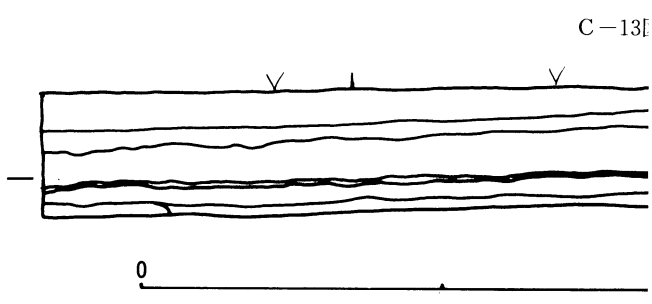


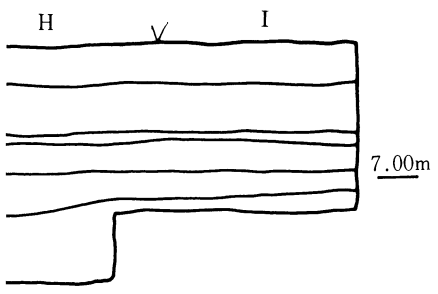
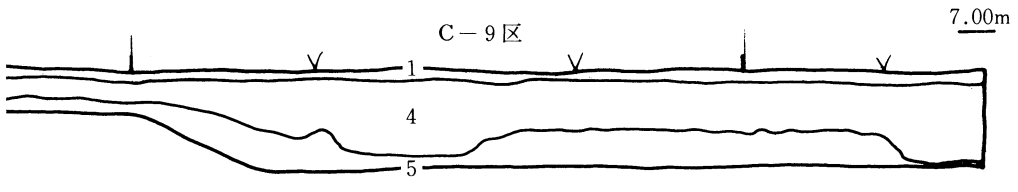


第4図 長浜金久第Ⅲ遺跡の土層断面図

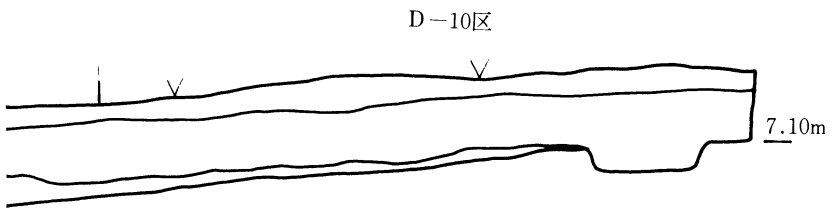


第Ⅲ遺跡第2地点

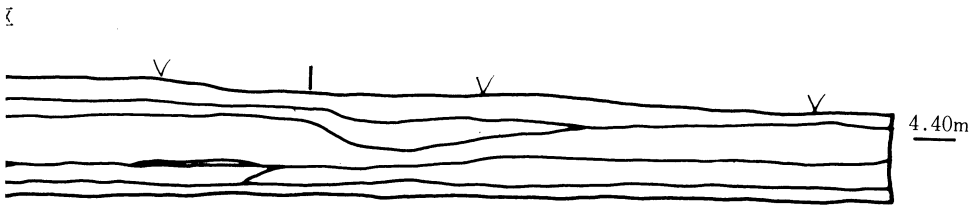




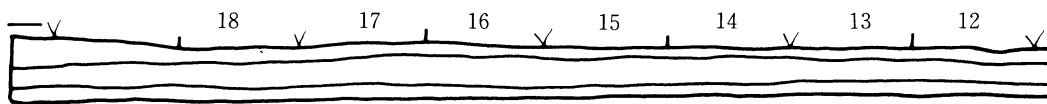
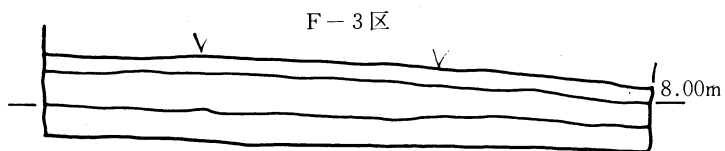
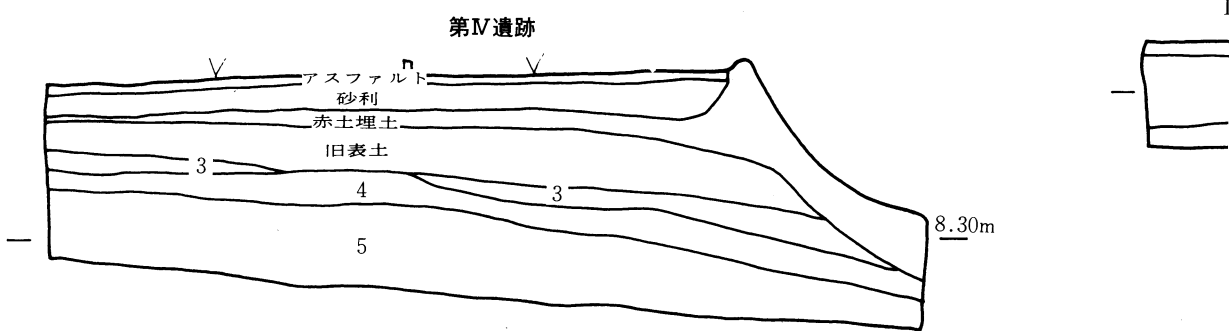
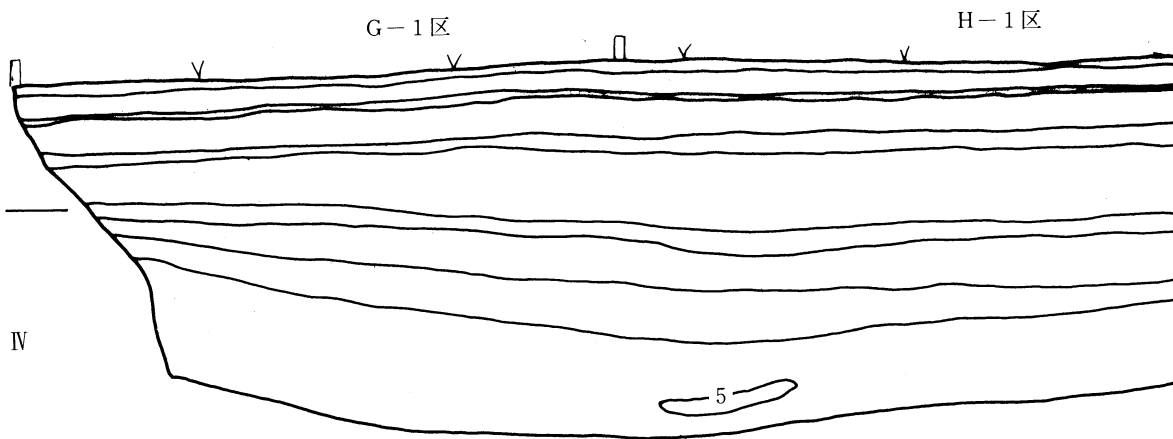
第IV遺跡 区~I 3区東壁



5m C·D-10区西壁



5m C-13区北壁

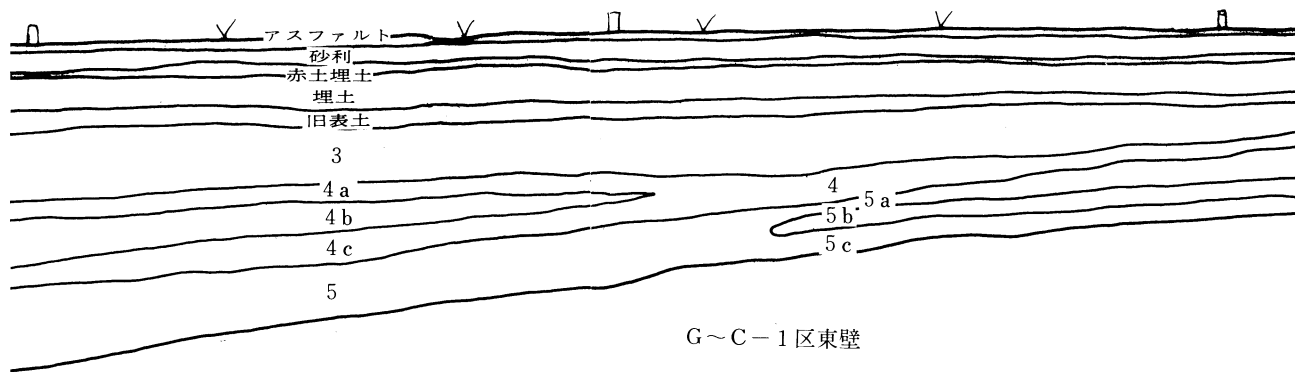


第5図 長浜金久第IV・V遺跡の土層断面図

第IV遺跡

I-1区

J-1区

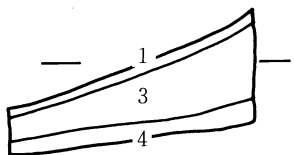
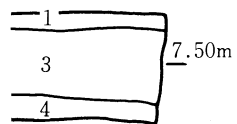


G~C-1区東壁

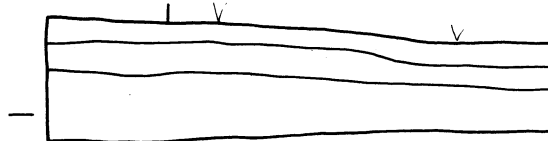
第IV遺跡

- 3 東壁

I-3 北壁

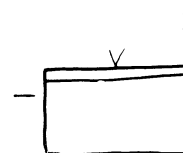
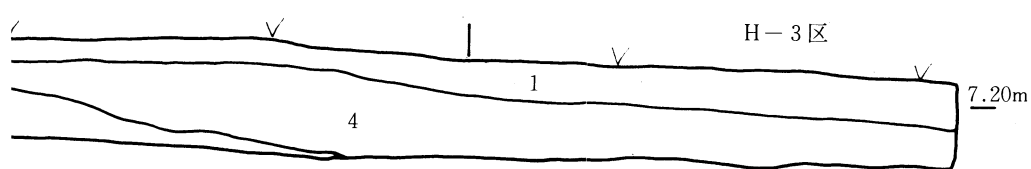


F-4区

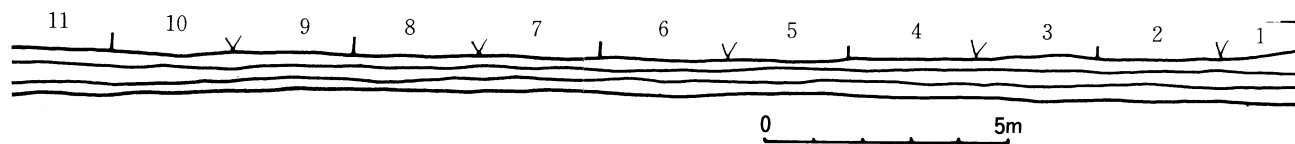


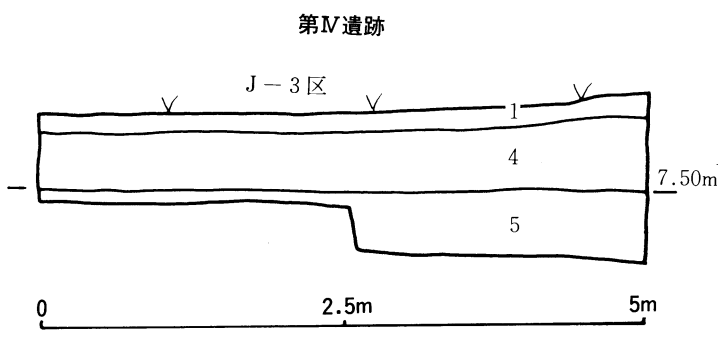
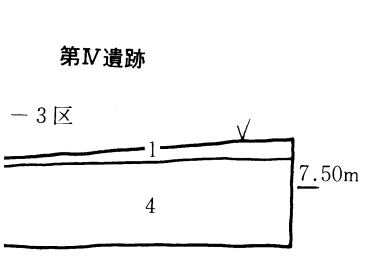
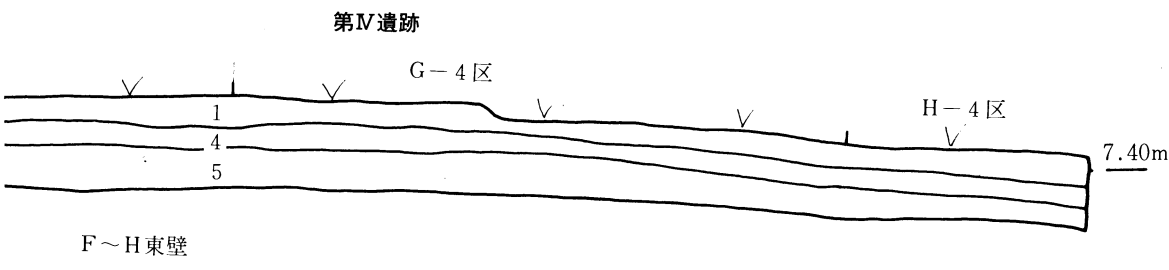
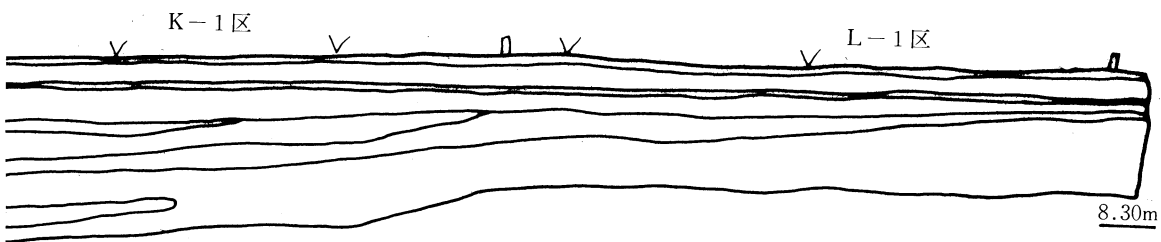
G-3区

H-3区



第V遺跡





177

第三章 調査の概要

第1節 長浜金久第Ⅲ遺跡の調査

1. 遺跡の概要

本遺跡は昭和58・59年に調査が行われた長浜金久第Ⅰ遺跡の南西約100m、第Ⅱ遺跡の南約100mにあり、南北にのびる砂丘の後面に位置している。ここは59年度に確認調査が行われ、県道(和野一万屋線)下にも遺跡が広がる可能性が考えられていたところである。砂丘の後背地は、洪積世の台地との間に小川が南北に流れ、狭い湿地帯を形成している。

調査は、後述の第Ⅳ遺跡もあわせて5m×5mのグリッドを組み北東隅を基点として北から南へA・B・C……L、東から西へ1・2・3……15区と設定して行った。第Ⅲ遺跡においては、砂丘の東側及び県道下(A～D・3～5区)に第4層黒色腐植土層からマガキ貝を主体とする貝類とともに弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が出土し、長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点と設定した。また砂丘が洪積世台地と接する後背地には、古墳時代末から奈良時代にかけての遺物の流れ込みがみられ、第2地点とした。これら第1地点と第2地点の間の砂丘後面標高約7m地点(E・F-6・7区、C-7・8区)に近世の建物跡・土壇が検出され、第3地点とした。以下、各地点ごとにその概要を記す。

(1) 第1地点

昭和59年の確認調査で包含層が確認されていた部分及び県道の下にあたる。A～D-3～5区の約250㎡の範囲から第4層黒色腐植土層からマガキガイ・イソハマグリを主体とする貝類とともに土器・貝製品などの遺物が出土した。本来の遺物包含層はさらに東側(海岸側)にのびていたものと思われるが砂採集のためにすでに消失していた。第6区は貝類及び遺物の出土状況であるが、貝及び遺物の集中などはみられなかった。

(2) 第2地点

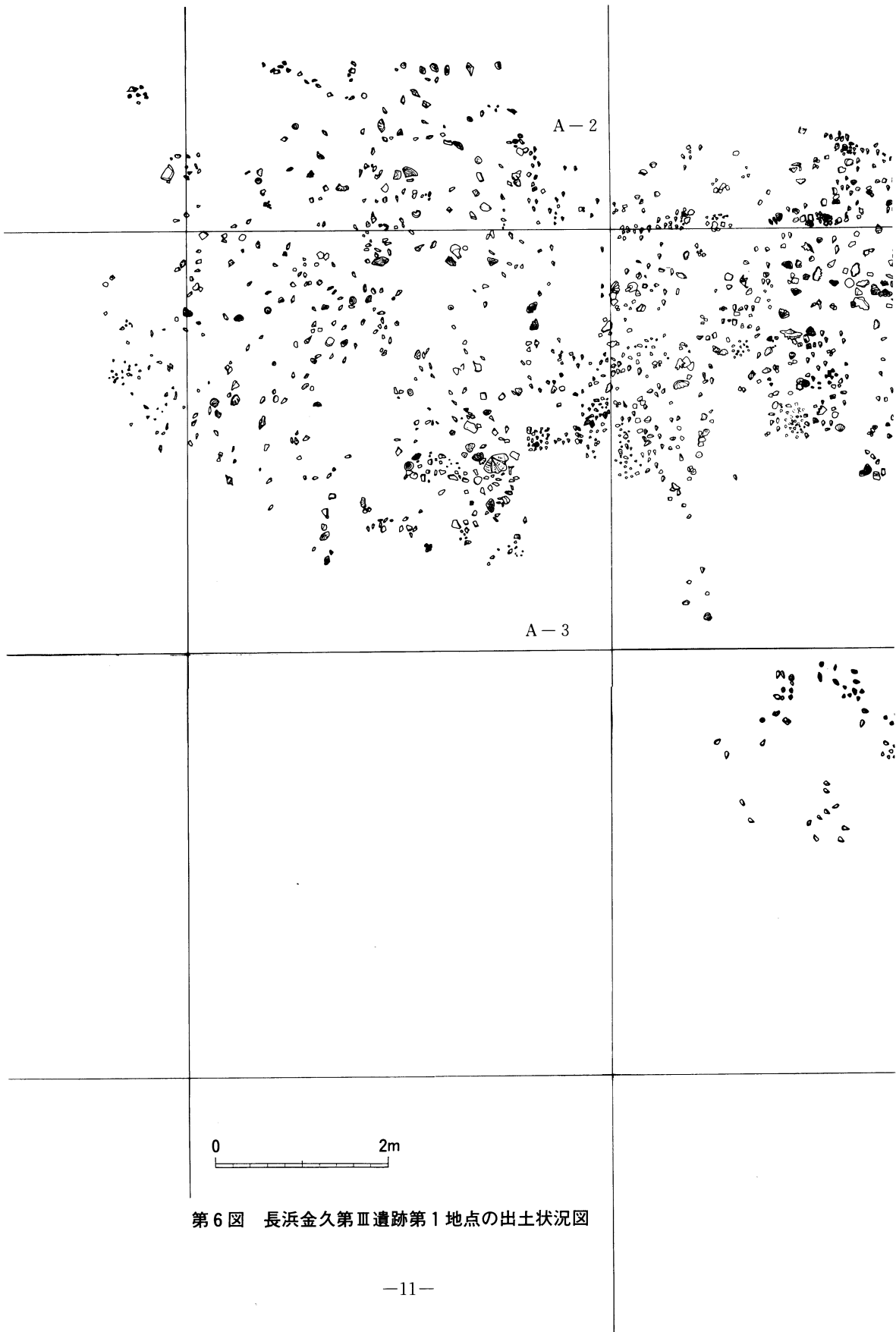
砂丘西縁と舌状にはり出した洪積世台地が接するところにできた狭い後背湿地で、小川が南流している。標高約5mを測る。A～D・10～14区の約170㎡を調査した。層序は第7区のように8層まで確認できたが、いずれも流れ込みによる堆積層である。第5層より古墳時代末～奈良時代と思われる兼久式土器とともに木片が出土した。土器はいずれも小片で磨滅しているものがほとんどである。遺物を包含する第5層は砂を多く含むことから、砂丘からの流れ込みによる堆積と考えられる。出土遺物の土器は52～54である。

(3) 第3地点

第1地点と第2地点のほぼ中間に位置し標高約7mを測る。第2層の茶褐色砂層から第3層の黄褐色砂層にほりこまれた状況でE・F-6・7区に柱穴をもつ建物跡1基、C-7・8区に土壇6基が検出された。

遺構

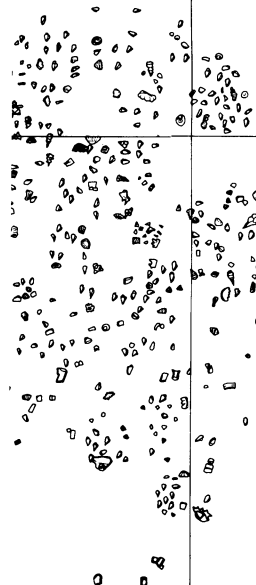
○建物跡(第8区)



第6図 長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土状況図

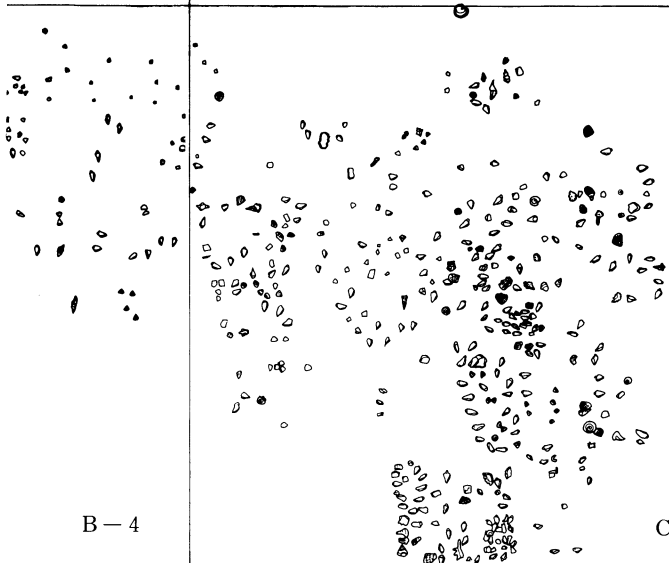
B-2

C-2

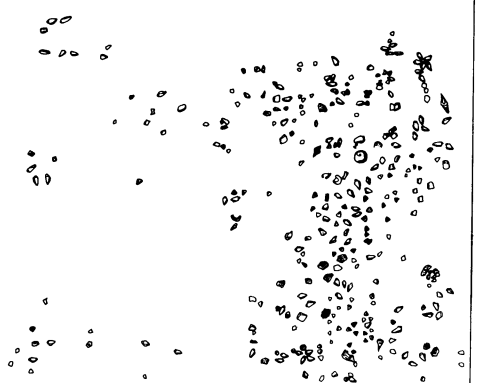


B-3

C-3



D-4



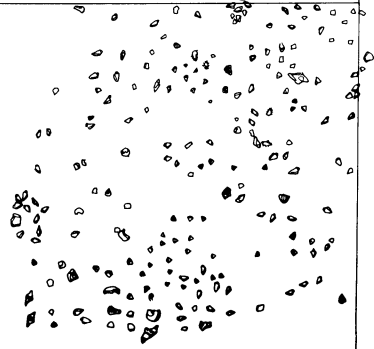
B-4

C-4

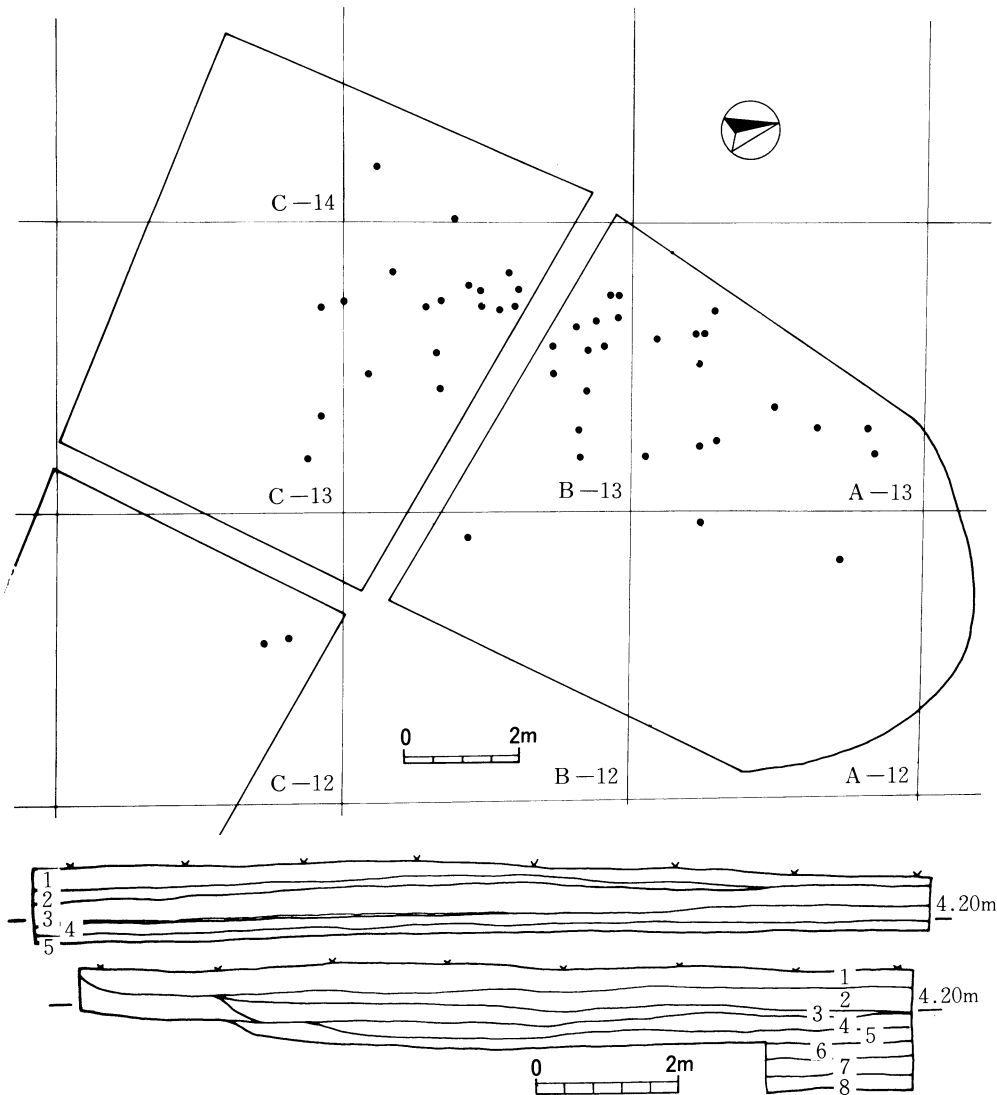
B-5

C-5

D-5



E・F-6・7区に検出されたもので、南側は調査区域外の為全体を明らかにすることはできなかったが、略方形の竪穴式の建物跡と考えられる。建物内の西隅近くには径約70~80cmの



第7図 長浜金久第Ⅲ遺跡第2地点の出土状況図と土層図

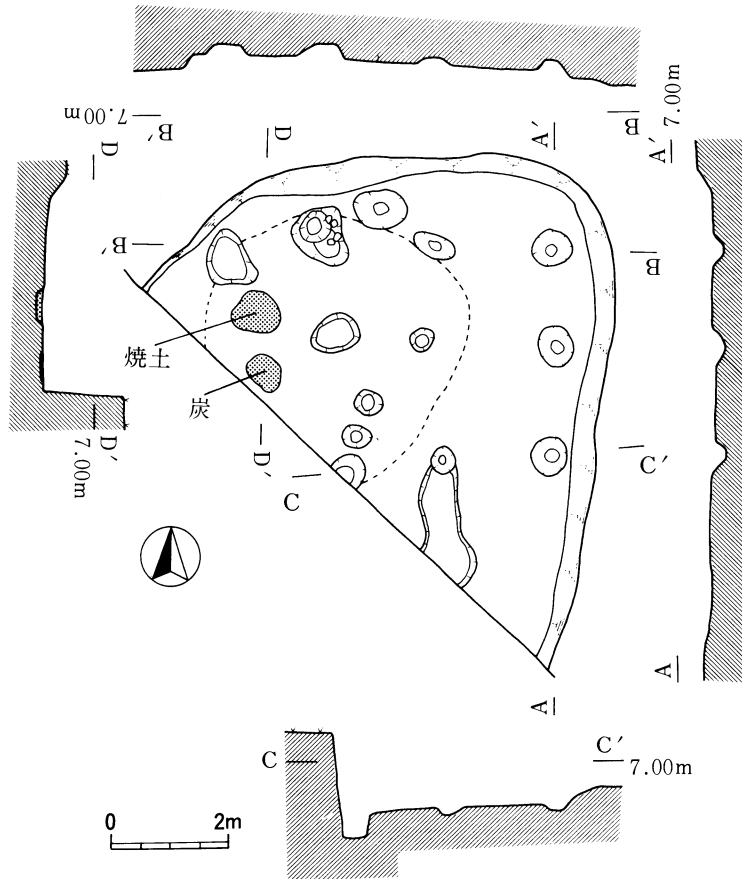
焼土と炭が検出された。また建物の床面近くからは、近世の陶磁器が出土しており、この時期の建物跡と考えられる。

○土壇 (第10図)

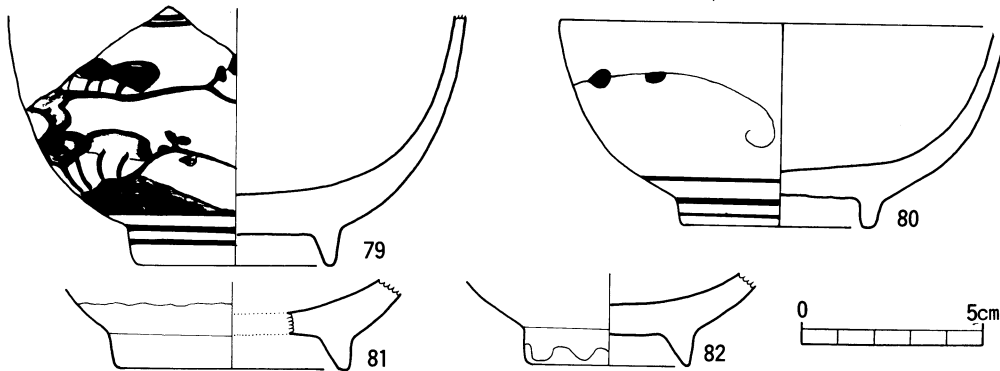
C-7・8区に径約1.5m~2.5mの土壇が6基集中して検出された。土壇内からは時期・性格等を決定づける遺物の出土はないが、埋土の状況からE・F-6・7区の建物跡とほぼ同時期の土壇と考えられる。

出土遺物 (第9図79~82)

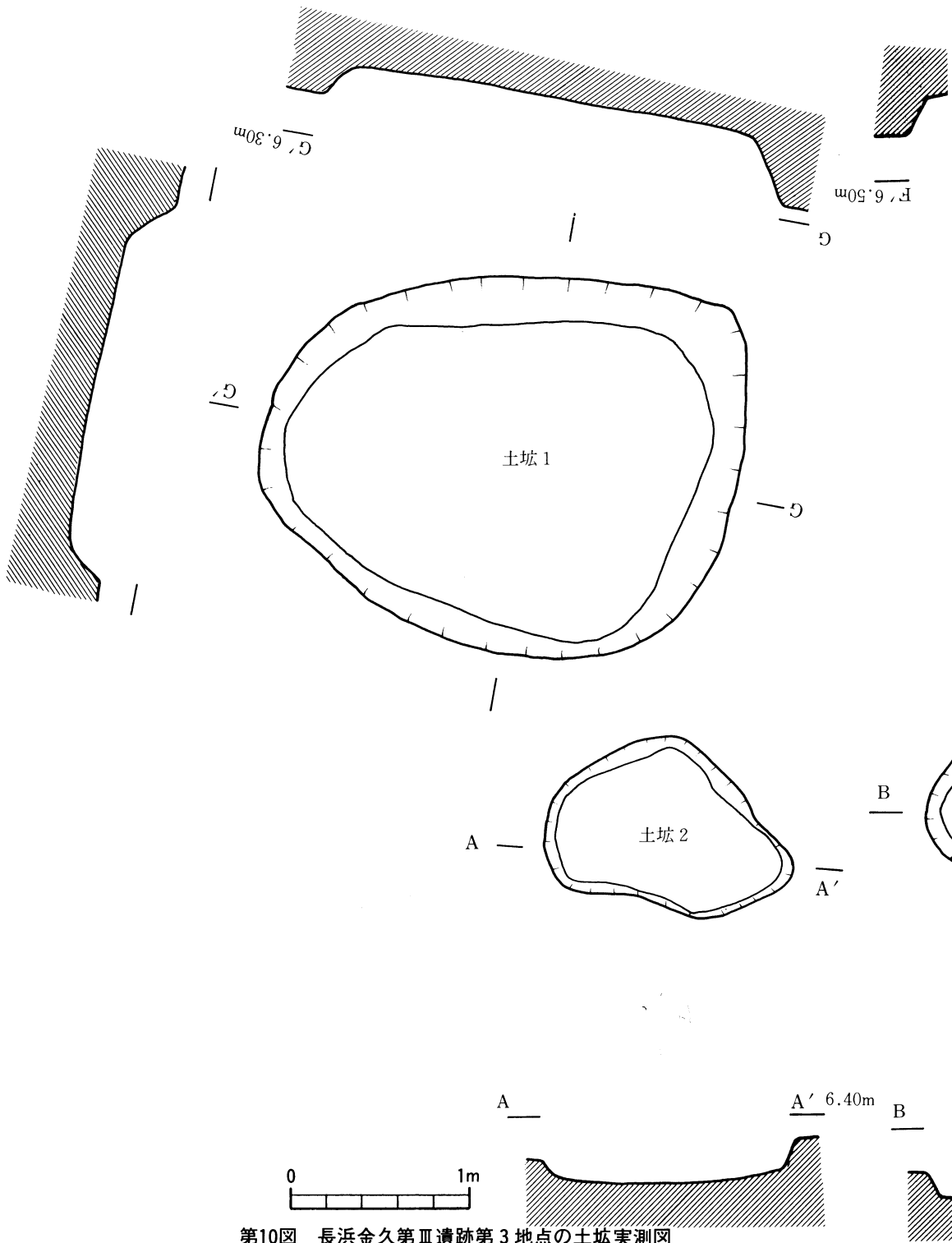
E・F-6・7区の建物跡の床面近くから近世の陶磁器片が出土している。79・80は磁器染付碗で素地は灰色を帯びた白色を呈し、釉は青白色で見込み底には重ね焼き痕がある。81・82はいずれも陶器の底部等で見込み底に重ね焼き痕がみられる。



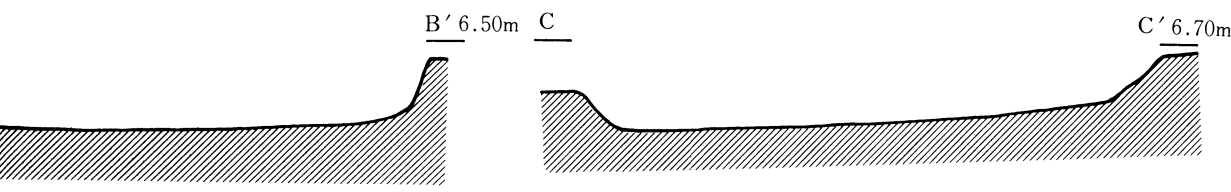
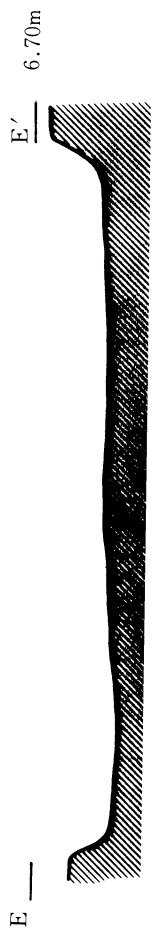
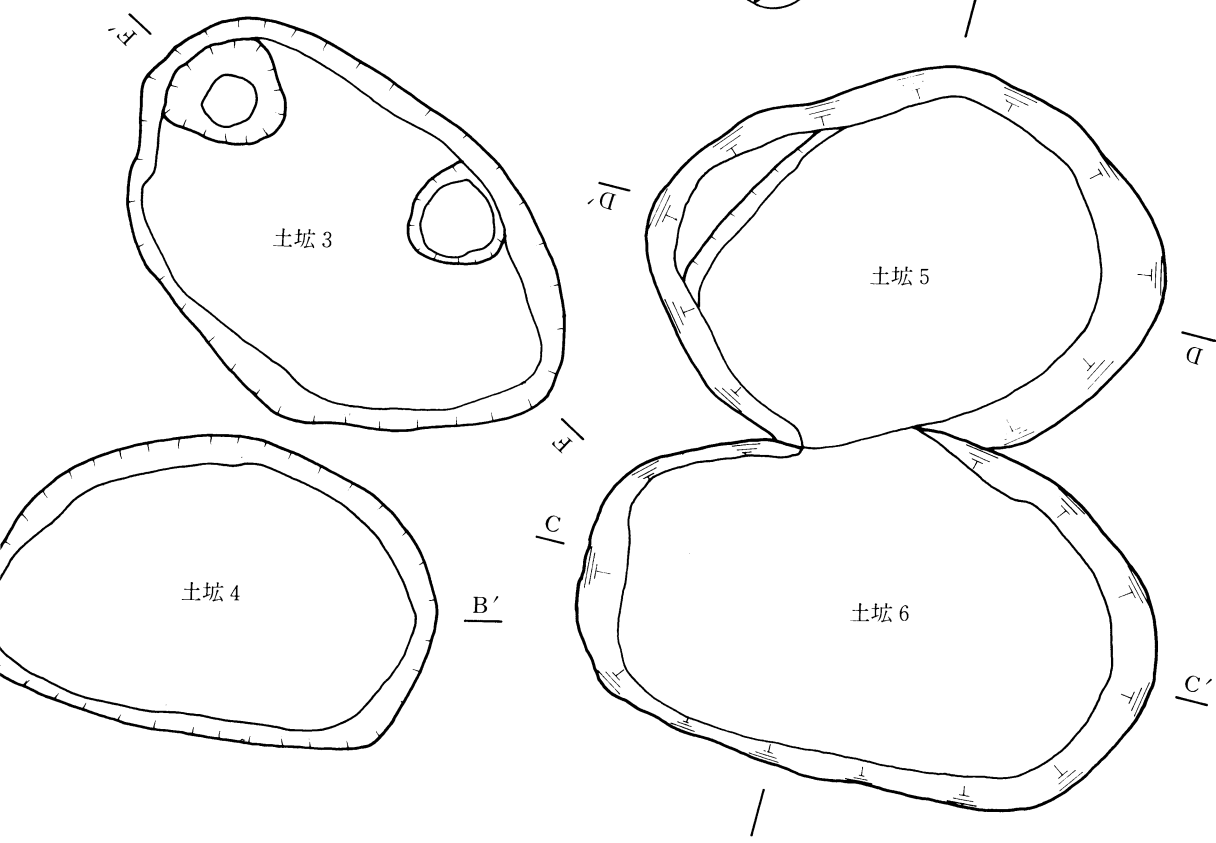
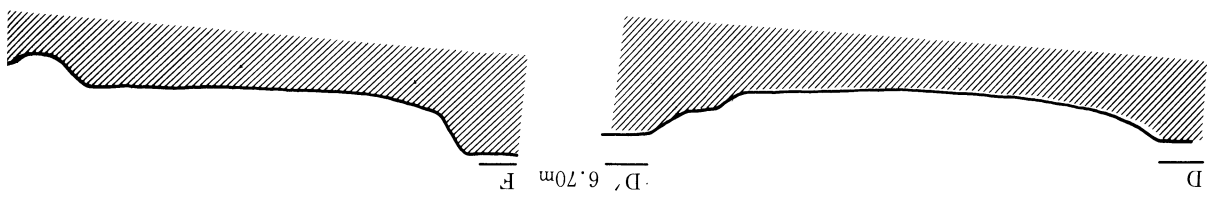
第8図 長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点建物跡



第9図 長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点建物跡内の出土遺物



第10図 長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の土塚実測図



2. 第1地点の出土遺物

(1) 土器 I類 (1～51・58)

1は口径25.5cmの甕形土器で口縁部が外反し、一条の三角断面突帯を施している。器面は手ナデの跡が残っており、とくに三角断面突帯には指圧痕が残っている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は多量の石灰質粒を含んでいる。この石灰質粒は塩酸と反応し、白色から推定してサンゴの粒や、貝殻の粒と考えられる。2は口縁部がやや外反し、三角断面突帯が貼り付けてある甕形の土器である。赤褐色を呈し、薄手で焼成は良い。胎土は砂の粒が小さく、白色の粒子も混入している。口唇部の断面は平坦である。3は口縁部が「く」字状になり口唇部は若干内湾している。外面には縦に三角断面突帯を貼り付けている。色調は赤褐色で胎土は石灰質粒を含んでいる。4は半円断面の貼付突帯をもつものである。色調は赤褐色で胎土は石灰質粒や雲母を含んでいる。器面調整はヘラで丁寧に仕上げている。5は三角断面の貼付突帯を円形に貼り付けている土器で器面調整は荒い。色調は外面が赤褐色で内面が黒色を呈す。胎土は石灰質粒や雲母が混っている。1～5はいずれも甕形土器で6は壺形土器である。6は三角断面突帯が2条貼り付けてあるもので、壺形土器の肩部である。赤褐色を呈し、白色粒や長石等を含む。焼成は良い。7・8は同一個体と思われる。口縁部が外反し、頸部の内側に稜がつく。肩部には2条の突帯が付き、頸部には2本の平行沈線が孤状に施されている。また口縁部内面には2条の平行沈線を斜に施している。器面調整はやや荒い。胎土は長石・石英・石灰質粒等が混っている。9は肩部に刻目突帯を施した土器で施文具は竹管と思われる。器面には沈線がみられる。色調は暗茶褐色を呈し、石英・長石・石灰質粒を含む。10は頸部に一条の貼付突帯をつけ、口縁部に孤状の沈線が施されている。石英・長石を含み、焼成・器面調整は丁寧である。色調は茶褐色を呈している。以上が突帯をもつ土器群である。

11は口縁部が「く」字状に折れて外反する甕形土器である。器面には2条の平行沈線を波状に、その下に連点と1条の沈線が施されている。色調は黒褐色を呈し、焼成は良く、石英・長石・石灰質粒を胎土に含んでいる。内側にも沈線が2条みえる。12は口縁部が「く」字状に外反する甕形土器である。文様は上部から「S」字状、孤状の2条の平行沈線が横位に施されている。また内面にも2条の平行沈線を斜位に描いている。色調は淡赤茶褐色を呈す。胎土は石英・長石・石灰質粒・雲母が含まれ、焼成も良い。13は甕形土器の口縁部である。文様は孤状の沈線を上・下に施されている。焼成は良い。胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒が混入している。14は口縁部が外反する甕形土器である。文様は外面に2条の平行沈線で孤状と波状、内側に波状文の文様が施されている。色調は茶褐色、胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒を含んでいる。15は14と同一個体と思われ、文様は波状文の下に横位の平行沈線文がみられる。16は赤茶褐色を呈し、胎土は石英・長石・石灰質粒がみられ、焼成は良い。文様は波状の平行沈線文がみられる。17は甕の口縁部である。茶褐色を呈し、薄手の土器で、胎土は石英・雲母・石灰質粒がみられる。焼成は良い。文様は2条の平行沈線で波状をえがいている。18も薄手の甕形土器である。文様は2条の平行沈線で波状に施され、雲母・石英・長石・石灰質粒がみられる。

19は厚手の土器で明茶褐色を呈し、2条の平行沈線が施してある。胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒が含まれている。焼成は良い。20は甕形土器の頸部で孤状・波状の沈線が施されている。焼成は良く、雲母・長石・石英・石灰質粒を含んでいる。内側には稜線がある。色調は茶褐色を呈す。21は器面に波状の沈線上を施す甕の口頸部で内側にも波状文を呈している。色調は茶褐色で胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒を含んでいる。焼成は良い。22は波状の沈線が器面に施され、茶褐色の色調を呈する焼成の良い甕形土器の頸部である。胎土は長石・石英・雲母・石灰質粒等を含んでいる。内側には稜線がみられる。23は甕形土器の頸部で内側に若干稜がみられる。外面は沈線が施されているが内面の調整は良くない。焼成も良い方ではなく、内側にはひびがみられる。色調は外面が明茶褐色で内面が暗茶褐色を呈す。24は茶褐色を呈し、胎土は雲母・長石・石英を含む焼成の良くない土器片である。文様は波状沈線がある。25は茶褐色を呈し、波状と横位の沈線文がある。胎土・焼成は20に類似している。以上11～25までが波状沈線を施す土器群であり、いずれも甕形土器である。

26は口唇部が外に張り出し、肩部は断面三角状突帯を付け、その上を研磨して稜をつけている。焼成も良く、器面調整も良い。色調は茶褐色を呈し、胎土は雲母・石英・長石・石灰質粒や、貝殻もみられる。27も26と同様で口唇部の張り出しがある。28も26と同様で口唇部から肩部までの長さが短い。この3点は器形から鉢形土器と考えられる。

29は口縁部が「逆L字状」字に折れ、内側にははっきりした稜線があり、外面は無文の土器である。内面には沈線がみられるが文様であるか不明である。焼成は良く、色調は茶褐色を呈す。器面調整は荒い。30は29と同じ器形で赤褐色を呈す。31も30と同様である。32は器形は29と同じであるが口縁内面に細長い刻目が施されている。色調は赤褐色で焼成は良い。33は口径38cmの土器で若干内行する器形である。外面は暗茶褐色で内面は赤茶褐色を呈す。34は「く」字状に折れる器形の土器で口縁部である。外面は黒色で内面は茶褐色の色調を呈している。35は34の器形の土器で色調が赤茶褐色である。36は11～25の類に属し、器面は黒褐色を呈している。37は胎土・焼成の悪い土器で口縁部が若干外反する土器である。38も37と同じである。39は口縁部が「く」字状になり、明茶褐色を呈し、内側にヘラナデの跡が残る土器である。以上は口縁部が「逆L」字になるタイプと「く」字になるタイプで外面が無文になる類である(30をのぞく)。これらの胎土はすべて雲母・長石・石灰質粒を含んでいる。41・41・42・44は口唇部が一部不明であるが、これらの類と同一であろう。この類は甕形土器に属すると思われる。

43は口唇部が不明であるが口縁部である。頸部は内曲し、口唇部近くで直行する。焼成は良いが粘土の接合が悪い。胎土は石英・雲母・長石・石灰質粒を含み、色調は淡茶褐色を呈している。

45～51は底部である。この中では49・50が壺の底部と思われる。45は甕の底部の脚部である。色調は茶褐色で焼成は良い。46の底部は浅い脚台をつけたもので、器面調整は荒い。色調は茶褐色を呈す。47の底部は茶褐色を呈し、胎土には小礫の混入が多く、上げ底である。48は甕形土器の脚台で、色調は茶褐色を呈し器面調整は良い。49は平底である。茶褐色を呈し、焼成は

良い。胴部へ立ち上るところは薄くなり、胎土も粒子の小さい粘土を使っている。50も平底である。明茶褐色を呈し、焼成は普通である。胎土には小礫が混入している。53は浅い脚の一部である。器面調整は良く、茶褐色を呈している。以上が底部である。これらの胎土は長石・雲母・石英・石灰質粒が混入している。

58は壺の一部と思われる。やや厚手で茶褐色を呈し、器面調整は良い。胎土は長石・石英・雲母・石灰質粒を含んでいる。

Ⅱ類 (52～54)

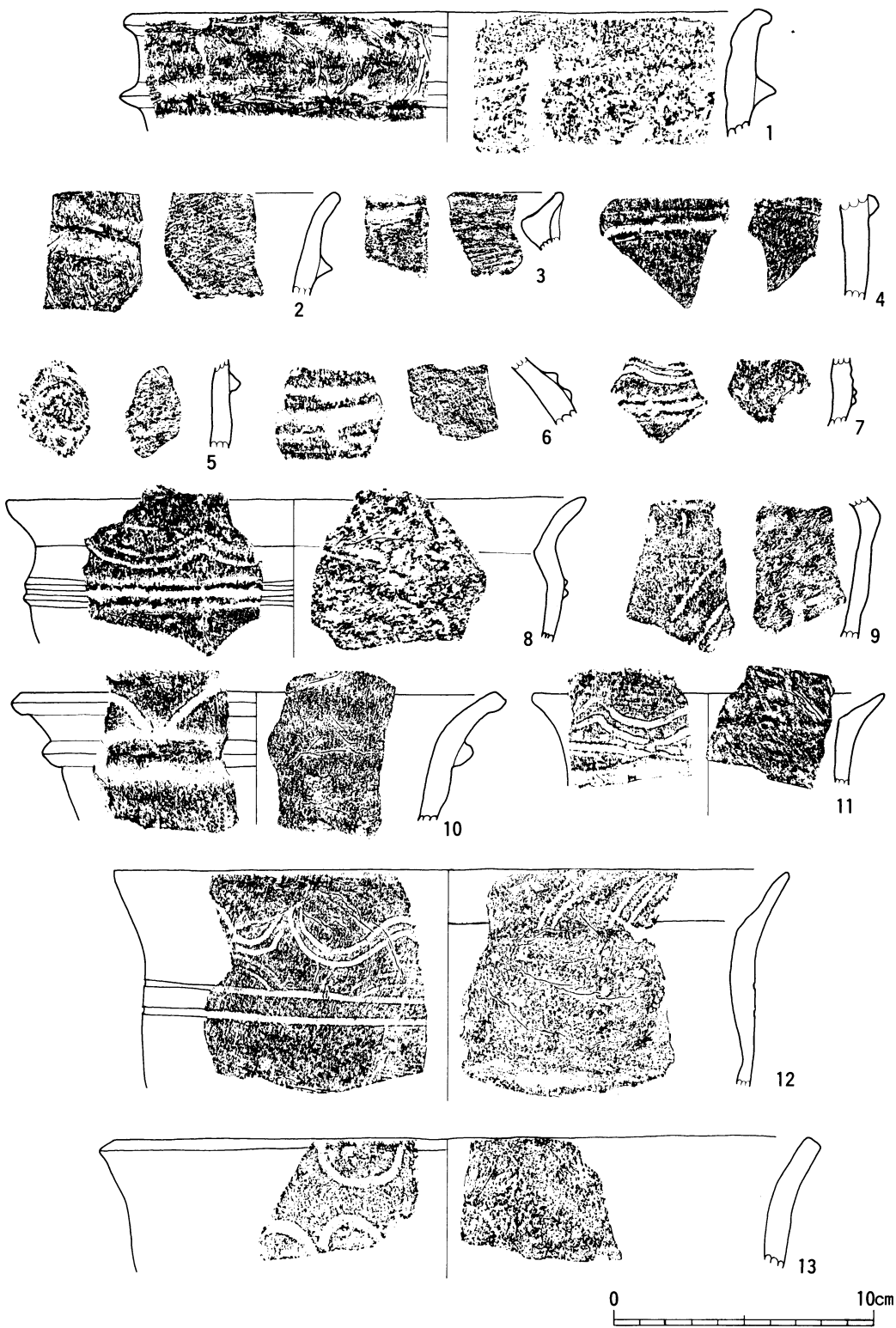
52は薄手の土器で淡黄茶褐色を呈し、刻目のある突帯を施している。器面調整は良く、焼成も普通である。53は底部である。底面に木葉痕があり、器面はローリングを受けている。54は底部で平底である。底面は木葉痕があり、張り出しがある。これらの土器は胎土が良く、粒子の小さい粘土を使用し、雲母・長石類の他石灰質粒の小さなものが混入している。

Ⅲ類 (55・56・57)

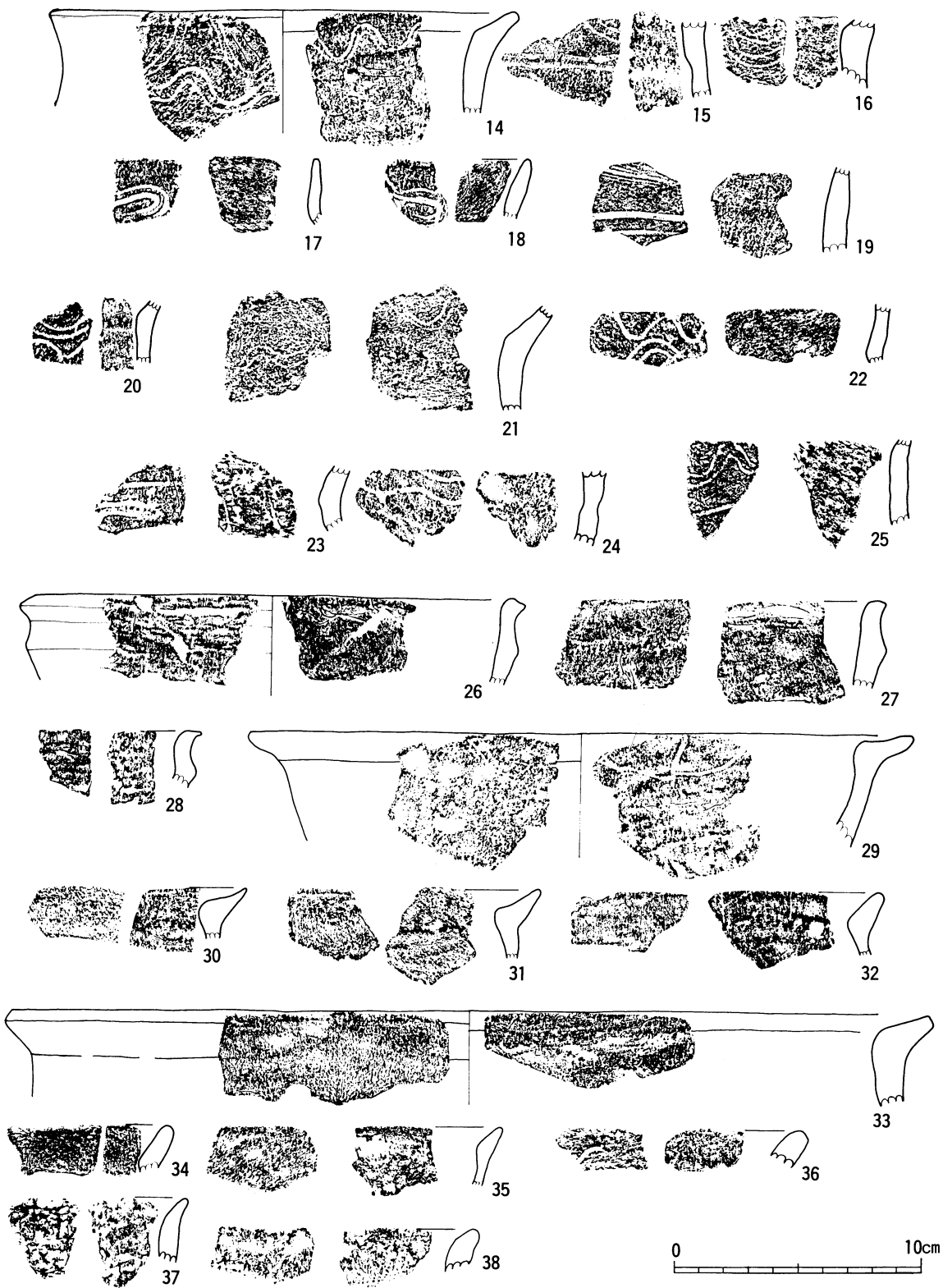
この類は特殊なものである。55は壺の口縁部である。口唇部はやや肥厚し外反する。外器面はハケナデ痕が上下にみられる。色調は淡灰茶褐色で焼成は良い。胎土は雲母が多く、長石・石英等が混っている。56は突帯の部分である。幅の広い刻目を入れている。色調は淡灰茶褐色が外面で内面は黒色である。胎土は粘土粒が小さく、長石・石英・雲母（多い）がみられる。器面調整は良い、57は胴部である。上部には沈線を孤状に11本重ねた重孤文と頸部近くに2条の沈線がある。器形は胴部の中心が角張る。外面の色調は淡黄灰褐色で、内面の色調は黒色である。器面調整はともに良い。胎土は雲母が多く、長石・石英が混っている。粘土の粒子は小粒である。

第3表 長浜金久第Ⅲ遺跡の土器諸訳一覧(1)

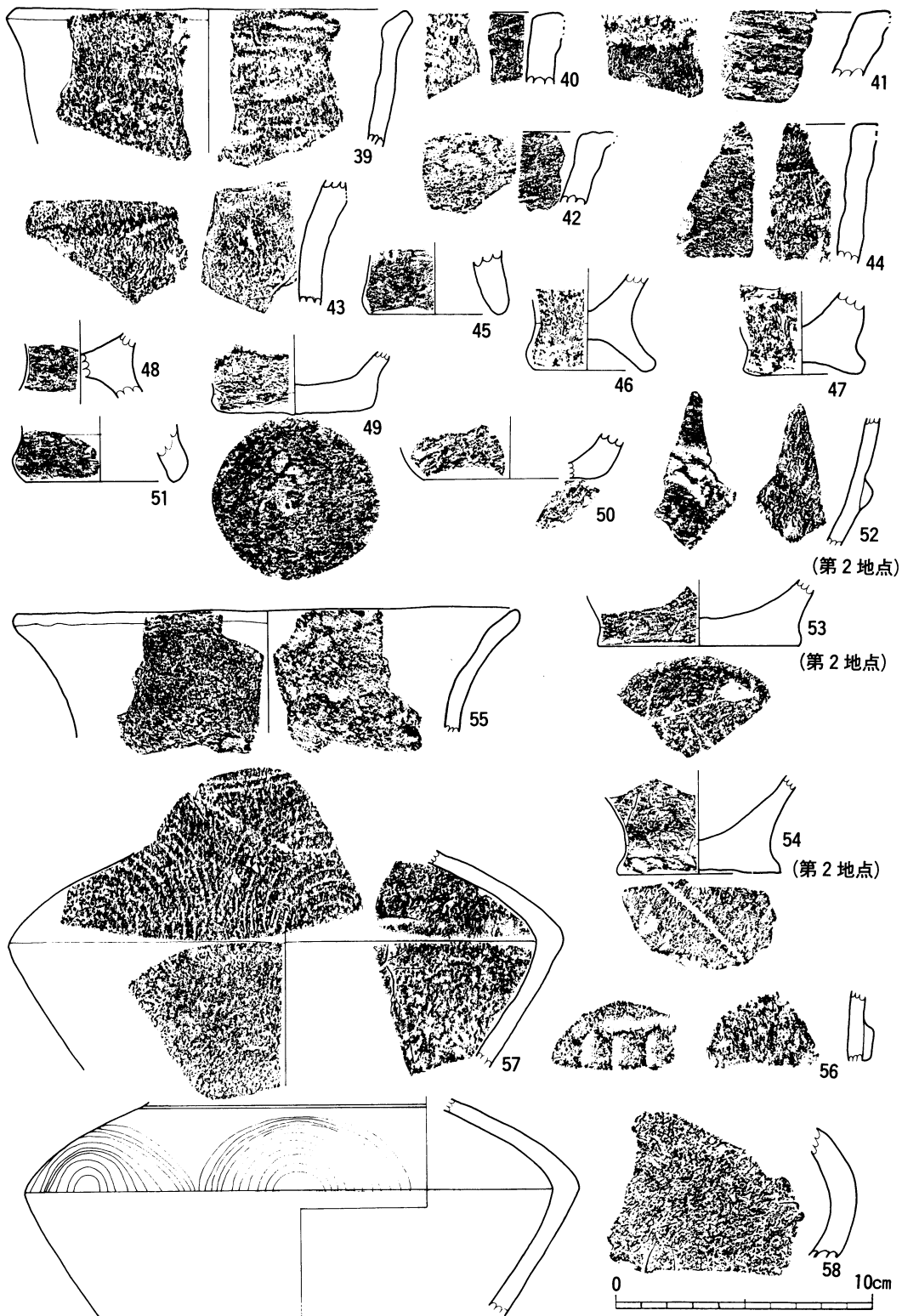
No	区	層	備考	No	区	層	備考	No	区	層	備考
1	A 3	4	口縁	15	D 4	4		29	B 3	4	口縁
2	B 3	4	〃	16	D 4	4		30	A 3	4	〃
3	A 2	4	〃	17	C 4	4	口縁	31	B 3	4	〃
4	C 3	4		18	C 4	4	〃	32	A 3	4	〃
5	C 4	4		19	B 3	4		33	B 3	4	〃
6	A 2	4		20	D 4	4		34	A 3	4	〃
7	D 4	4	口縁	21	B 3	4		35	4	4	〃
8	C 4	4		22	D 4	4		36	C 13		〃
9	道路東	1		23	B 4	4		37	A 3	4	〃
10	B 3	4		24	A 3	4		38	A 3	4	〃
11	A 3	4	口縁	25	B 3	4		39	B 3	4	〃
12	B 3	4	〃	26	A 3	4	口縁	40	D 4	4	〃
13	B 3	4	〃	27	A 3	4	〃	41	B 3	4	〃
14	B 3	4	〃	28			〃	42	D 4	4	〃



第11図 長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土土器(1)



第12図 長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土土器（2）



第13図 長浜金久第Ⅲ遺跡第1・第2地点の出土土器(3)

第4表 長浜金久第Ⅲ遺跡土器諸訳一覧(2)

No.	区	層	備考	No.	区	層	備考	No.	区	層	備考
43	D 4	4		49	A 3	4	底	55	D 4	4	口縁
44	D 5	4	口縁	50	C 4	4	〃	56	B 3	4	
45	C 4	4	底	51	B 4	4	〃	57	A 3	4	
46	D 4	4	底	52	B 3	4		58	B 3	4	
47	B 3	4	底	53	C 13		底				
48	C 4	4	底	54	B 3	4	〃				

(2) 貝製品

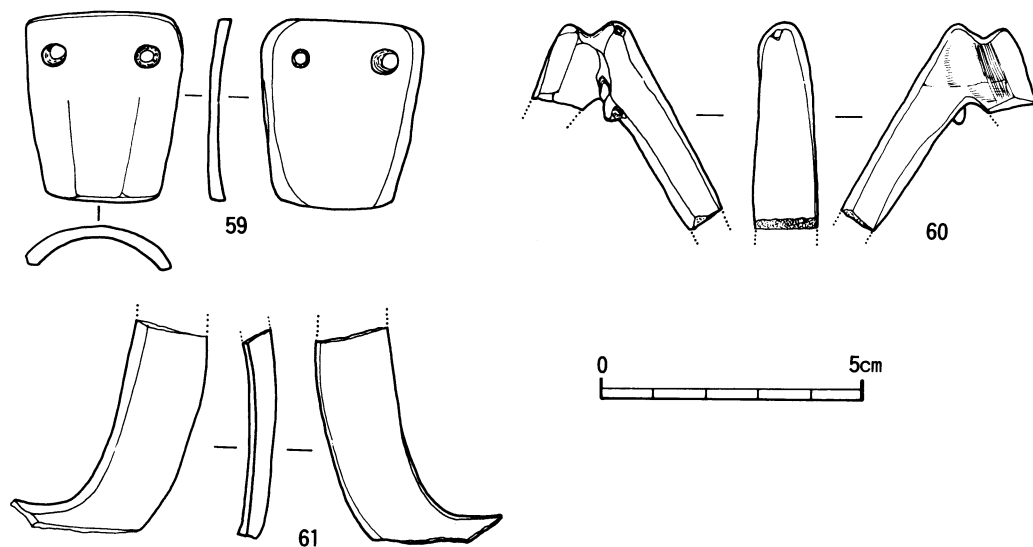
第4層黒褐色腐植土層から貝製品として有孔貝製品、貝輪、ヤコウ貝製容器、ヤコウ貝の蓋を利用した貝斧などが出土した。

〈有孔貝製品〉(第14図59)

イモガイ科と思われる貝の体層を切り取り、丁寧な研磨によって略方形に整形し、上端2ヶ所に内外から穿孔を施したものである。B-4区より出土したもので長さ3.6cm、最大巾3.1cm最大厚0.2cm、重さ6.65gを測る。内外ともに文様などはみられないが、貝札的意味あいをもつ垂飾品とも考えられる。

〈貝輪〉(第14図60・61)

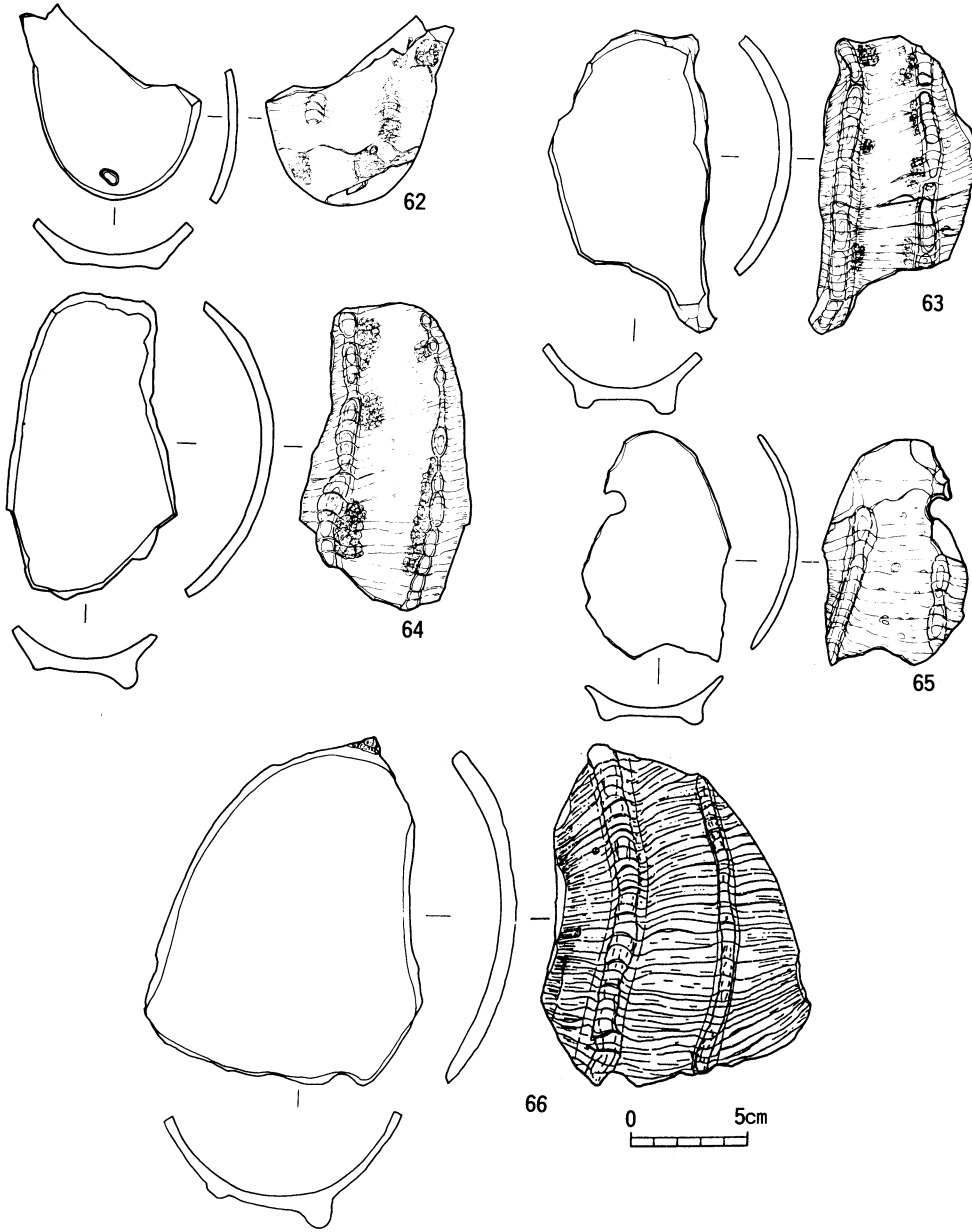
D-4区よりゴホウラ製と思われる貝輪が2点出土した。いずれも破片であるが全面に丁寧な研磨が施され、60には外面にV字形の抉りがみられる。



第14図 長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の貝製品実測図(1) 有孔貝製品・貝輪

〈貝製容器(貝匙)〉 (第15図62~66)

ヤコウガイの体層部を切りとり整形したもので、いずれも結節部を2条残し、内面はゆるやかにわん曲している。縁辺部は部分的に研磨が施されているが、内外面ともに特別な加工はみられず外皮を残している。62は周縁部を丁寧に研磨しており、63では結節部を利用して把手状の加工が施されている。その形状から62・63は貝匙としての用途も考えられる。



第15図 長浜金久第Ⅲ遺跡の貝製品 実測図(2) 貝製容器

第5表 長浜金久第Ⅲ遺跡貝製容器諸訳一覧

番号	出土区	最大身最大幅cm	深さcm	厚味cm	重量g	番号	出土区	最大身最大幅cm	深さcm	厚さcm	重量g
62	A-3	7.8×6.7	1.1	0.5	34.05	63	B-2	12.1×6.6	1.6	0.5	91.0
64	C-3	12.6×7.0	2.6	0.5	95.35	65	A-3	9.2×5.6	1.4	0.4	31.6
66	A-3	14.0×11.3	3.4	0.6	166.8						

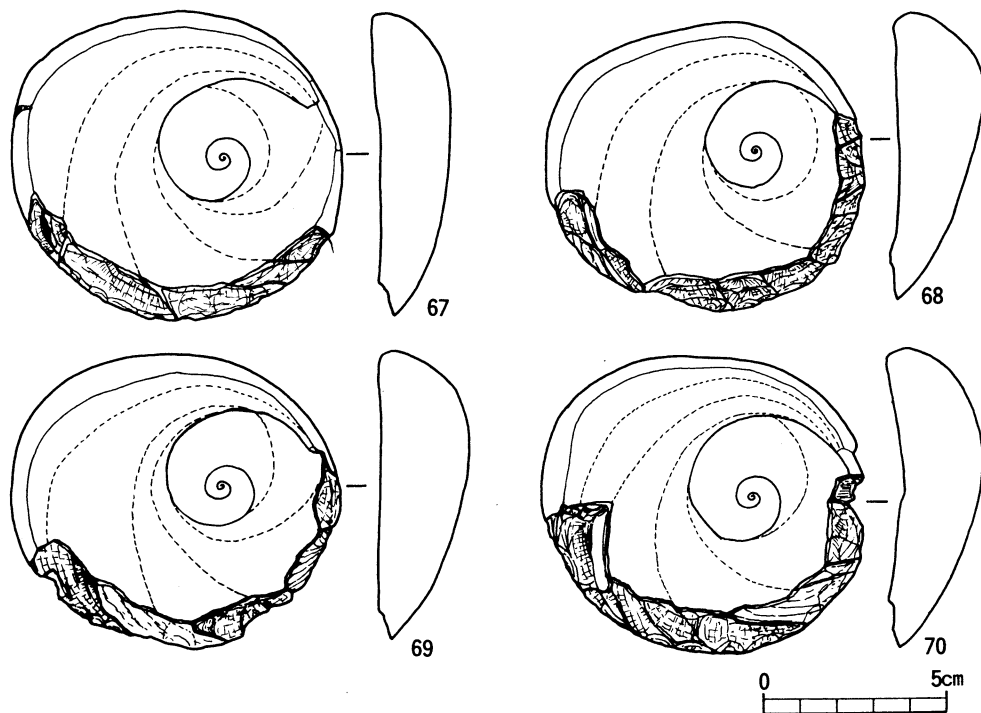
〈貝 斧〉 (第16図67~78) (螺蓋製貝斧・螺蓋利器などの呼称がある。)

ヤコウガイの蓋を利用し、蓋のうすい部分に剝離痕があるもので、ほとんどが縁辺のほぼ半円ぐらいに剝離がみられる。

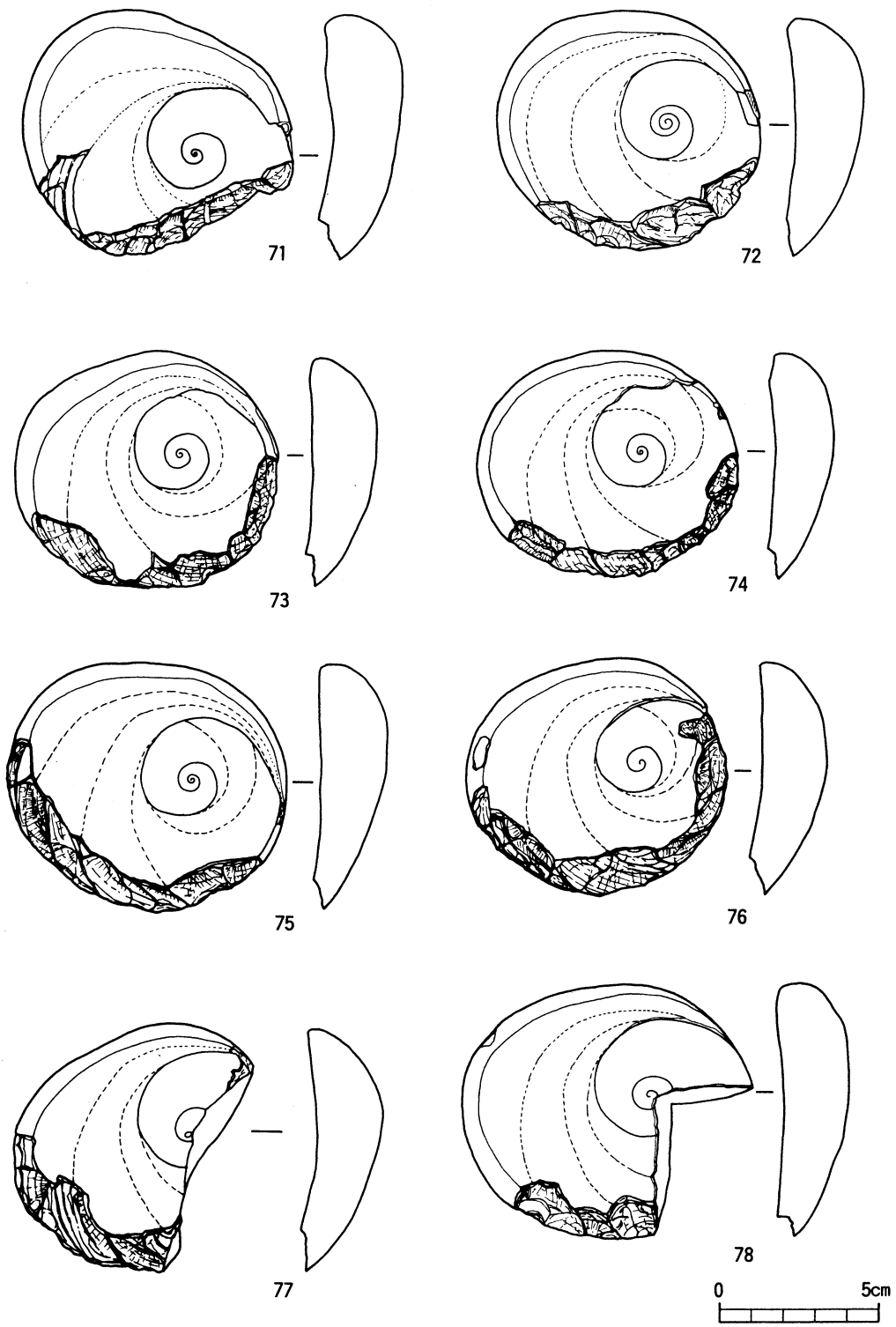
第6表 長浜金久第Ⅲ遺跡貝斧諸訳一覧

() は推定値

番号	出土区	大きさcm	厚さcm	重量g	番号	出土区	大きさcm	厚さcm	重量g
67	B-3	7.7×8.2	2.2	191.45	68	B-2	7.4×8.0	2.1	173.5
69	A-3	7.3×8.2	2.1	161.9	70	D-4	7.0×7.9	1.9	144.6
71	B-2	8.2×8.9	2.0	204.75	72	B-3	7.9×8.4	2.4	200
73	B-4	8.0×8.9	2.4	204.7	74	A-3	8.0×8.4	2.2	203.6
75	B-3	7.9×8.6	2.0	197.5	76	B-3	7.3×7.9	2.0	158.5
77	D-4	7.7×(8.0)	2.1	148.8	78	C-4	7.9×9.0	2.1	190.75



第16図 長浜金久第Ⅲ遺跡の貝斧実測図 (1)



第17図 長浜金久第三遺跡の貝斧実測図(2)

3. 小 結

発掘調査の結果、昭和59年の確認範囲及びその東側の県道下約 250m²の範囲に弥生時代終末～古墳時代にかけての生活跡（第1地点）、後背湿地（第2地点）との間に近世の建物跡及び土址（第3地点）が確認された。

第1地点においては、マガキ貝、イソハマグリを主体とする貝類の中に土器片、貝製品が混在している状態で、遺物の集中などはみられなかった。出土する土器は、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類に分けられた。この中でⅢ類の55・56は口縁部と胴部であるが、南九州の成川式土器に類似している。また、57は免田式土器の壺の胴部に類似しているので、この遺跡の4層の土器類は、弥生後期末から古墳時代にかけての遺跡であることが考えられる。Ⅰ類は免田式・成川式に共件し、この遺跡の主体をなす土器である。Ⅱ類は長浜金久第Ⅰ遺跡で見られるような兼久式に類似している。貝製品として、有孔貝製品、ゴホウラ製貝輪、貝製容器、貝斧などがあげられる。

有孔貝製品としたものは、イモガイ科と思われる貝の体層を研磨整形したもので貝札と思われるが、穿孔の他に線刻などの文様はみられない。形状は、アヤマル第2貝塚第7トレンチ出土の貝札^①、喜念貝塚出土のもの^②に類似している。

第2地点においては、弥生時代の水田耕作の可能性を考慮して調査を行ったが、第5層に兼久式の土器等（いずれも砂丘からの流れ込み）が出土しただけで、水田耕作等を示す資料は得られなかった。

第3地点においては、近世の建物跡が検出されたが、半分が調査区域外にのびるため全様を明らかにすることはできなかったが、ほぼ2間×3間の略方形の建物になるものと考えられる。この中の土器は江戸時代にみられるような染付等が出土している。

① 池畑耕一・牛ノ浜修他「あやまる第2貝塚」笠利町文化財報告書（7）1984

② 牛ノ浜修・井ノ上秀文「ヨロキ洞穴」伊仙町埋蔵文化財報告書（6）1986

第2節 長浜金久第Ⅳ遺跡の調査

1. 遺跡の概要

第Ⅲ遺跡の南方約20mの標高約5.5m～7.5mの南から北側にはり出した砂丘の末端部に位置し、第Ⅲ遺跡とは小さな谷地形を隔てて対峙している。確認できた遺跡の範囲はG～J-1～3区の約220㎡であるが、本来の遺跡の範囲はさらに東側にのびていたものと考えられる。第4層直下の第5層上面から多量の貝類とともに弥生時代中期中葉～後期の土器、石器、貝製品が出土した。

2. 出土遺物

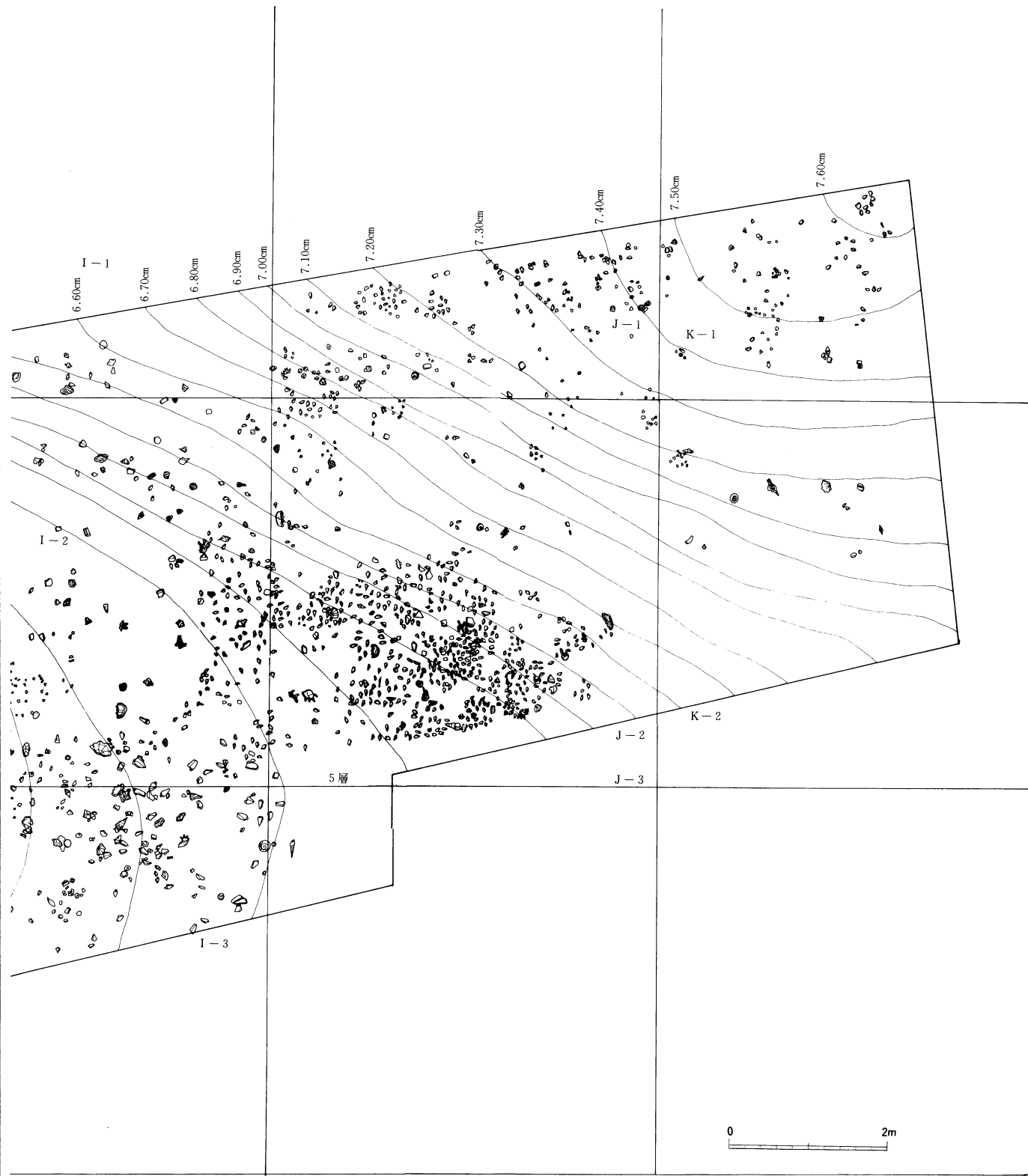
(1) 土器・土製品

I類からⅣ類まで分けられた。I類は1～24、Ⅱ類は25・26、Ⅲ類は27・28、Ⅳ類は29～34そして35は土製品である。

1から23までが甕形土器で24・25が壺形土器である。1は口縁部が「く」字状に外反する器形で、内面には頸部に突帯を施して外面には横位と縦位に2条の突帯を施し、頸部に刺突列点をつけている。また内面には、外面に刺突連点を施したために内側に粘土がふくれ上った跡がみられる。口径は24.5cmで突帯は貼り付け突帯である。器面調整は外面がハケ目調整で突帯から上が丁寧で横位に、下位は縦位と斜位に施し、上位ほど丁寧でない。内面は横ナデ調整で丁寧である。色調は外面の上位が黒褐色で下位が茶褐色、内面が茶褐色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒が混入している。焼成は良い。2は胴部が張り頸部がしまり、口頸部が、「く」字状に折れ曲る器形をしている。外面には頸部下に4条の三角突帯を横位に貼り付け、口縁部には格子状に沈線を描き、三条の三角突帯が縦位に施されている。器面調整は丁寧なナデ調整である。内面は三本の沈線を向斜位に描き、三条の三角突帯が縦位に施されている。また頸部で口縁部の肥厚の段差がみられる。器面調整は丁寧である。胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒があり、焼成は良い。口径は32cmである。3は口縁部が頸部から「く」字状に外反し、若干胴部がふくらむ器形をしている。口径は31cmである。外面には横位の三条の三角突帯と縦位の三条の三角突帯を施し、1と同じ様な刺突が縦位突帯の下位横にみられる。また補修孔もみられる。内面には、縦位の沈線があり、頸部には若干の稜がつく。胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒が含まれ、焼成は良い。器面調整も良い。色調は茶褐色である。4から15は口縁部の上位が内湾し、頸部の内側は「く」字状に張り出す器形である。4は内側に2本の沈線を「ハ」字形に施文している。色調は茶褐色で口唇部は黒褐色を呈す。焼成は良く器面調整は良い。口径は30.5cmである。5は色調が明茶褐色で器面調整、焼成ともに良いが器形がいびつである。内面には沈線を施している。6は暗茶褐色を呈し、焼成・器面調整ともによい。内側に沈線がみられる。7は明茶褐色を呈し、器面調整・焼成は良い。頸部で口縁との接合部で段差がつき内側の綾をつくっている。口径は32cmである。8は暗茶褐色で、器面調整・焼成ともに良い。頸部で接合部の段差がみられる。口径は27cmである。9は茶褐色で、器面調整・焼成ともに良い。口径は23cmである。11は茶褐色を呈し、器面調整・焼成は良いが胎土に礫が



第18図 長浜金久第IV遺跡の出土状況図 4層・5層



多く混入している。浅い器形を呈し、口縁が広く拡がり、口径は33cmである。12は口縁部が受け口のように内湾し、頸部は口縁部の接合面で張り出している。色調は茶褐色を呈し、焼成・器面調整ともに良い。口径は32cmである。13は茶褐色を呈し、焼成・器面調整はともに良い。口縁部との接合面は頸部で段差をつけ内側に張り出し状の稜をつけている。口径は27cmである。14は茶褐色を呈し、焼成・器面調整は良いが、胎土は礫を多く含んでいる。口径は29cmである。15は茶褐色を呈し、焼成・器面調整は良い方であるが、外面が若干良くない。口径は17cmである。以上が口縁部である。胎土は長石・石英・雲母・石灰質粒等が含まれている。16は茶褐色を呈し、二条の突帯をもつ甕形土器の胴部である。焼成・器面調整は良く、頸部近くに刺突孔がみられる。胎土は前と同様である。17は口唇部は平坦で口径20cm、底部までの高さ21cmの甕形土器である。口唇部は断面三角形を呈し、胴部が若干張る。肩部には低く幅の広い突帯を貼り付けている。器面調整は良くヘラ研磨調整である。胎土は礫を含み、石英・長石・雲母・石灰質粒もある。器壁は厚く、重量感がある。色調は茶褐色である。なお、ヘラ研磨は胴部より下は縦位、上は横位である。25は口径22cmで口縁部がL字状に折れ、胴部はふくらみ、器壁が厚い器形をしている。口唇部には2個1対の突起を付け、胴部には突起と三角突帯を貼り付け、縦位の沈線が施されている。貼付突帯は一部で曲り、切れている。その切れ間には貼り付けの突起が施されている。器面調整はヘラ研磨が下部にみられ、全体的に良い。焼成も良い。胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒が含まれている。色調は茶褐色を呈す。この土器は、いわゆる外耳土器の類である。18～23は底部である。その内22・23が壺形土器で、他は甕形土器である。18は底面が同心円状になり、2重の底面線がみられる。色調は茶褐色である。19は中央部が若干上げ底で張り出しがある。内面は黒色で外面は茶褐色である。20は若干上げ底で、内面は黒色、外面は茶褐色を呈す。21は平底で内面は黒色、外面は茶褐色を呈す。22は丸底で茶褐色を呈す。23は丸底で黒褐色を呈す。これら底部の胎土は石英・長石・雲母・石灰質粒を含んでいる。全体的に焼成は良い。

25・26はⅡ類の土器である。この土器は同一個体と思われる。色調は外面が白茶褐色で内面が黒褐色を呈す。壺形土器の口縁部～頸部にかけての部分で口縁上部は外反する。頸部から肩部に移る部分が26である。器面調整はハケ目調整痕が縦位にみられ、8mm前後の円孔も施されている。胎土は細い粘土を使用し、雲母・石英・若干の鉄分も含まれている。この土器は奄美大島地方で製作されたものとは考えにくく、移入土器と考えた方が良い。

27・28はⅢ類の土器である。27は甕形土器の頸部から胴部にかけてである。胎土・焼成はⅠ類と異なり、薄手がかたい。色調は暗茶褐色で焼成は良い。器面調整は横ナデで文様は2本沈線を平行に施されている。胎土は長石・石英・雲母・石灰質粒が含まれている。色調・胎土焼成や器形からみると長浜金久第Ⅲ遺跡より出土した土器に類似している。28は底部である。平底で木葉痕もみられる。色調は27と同じで胎土も類似し、同一個体の可能性が強い。

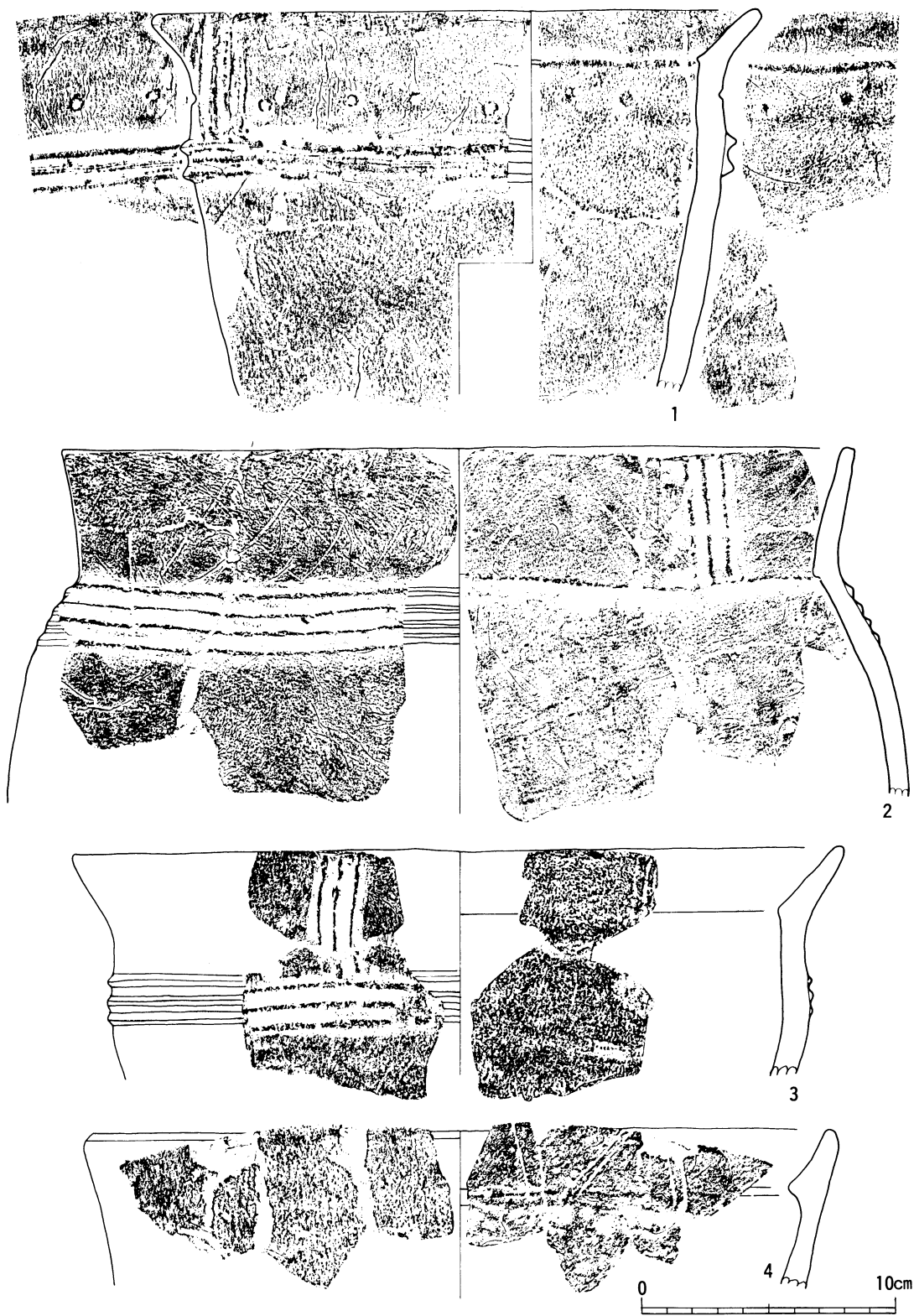
29～34はⅣ類である。29・33・34は甕形土器で30・31・32は壺形土器である。29は口縁部でやや外反する器形をもつ。1本の突帯と沈線がみられる。焼成は良く、胎土は石英・長石・石

灰質粒が含まれている。器面調整は簡単なヘラナデ調整である。色調は明茶褐色を呈す。30は壺形土器の頸部である。1条の突帯に刻目を入れたもので、突帯の剥げた部分にハケ目痕が良くのこっている。外の器面調整は縦のヘラ調整で、内側は手ナデの縦調整である。色調は暗茶褐色で焼成は良い。胎土は細い粘土を使用し、石英・長石・雲母が含まれている。31は30の同一個体の可能性が強いが、色調が若干茶褐色に近い。その他は同じ様である。32は壺形土器の口縁部で口縁が外反する土器である。外面には1本の突帯を貼り付けているが、いびつである。胎土は質が良く細い粘土を使用し、石英・長石・雲母等がみられる。色調は暗茶褐色を呈す。33・34は甕形土器の底部である。底面に木葉痕があり、平底である。茶褐色ないし、暗茶褐色(33)を呈し、胎土の質は良く、雲母・長石・石英を含んでいる。

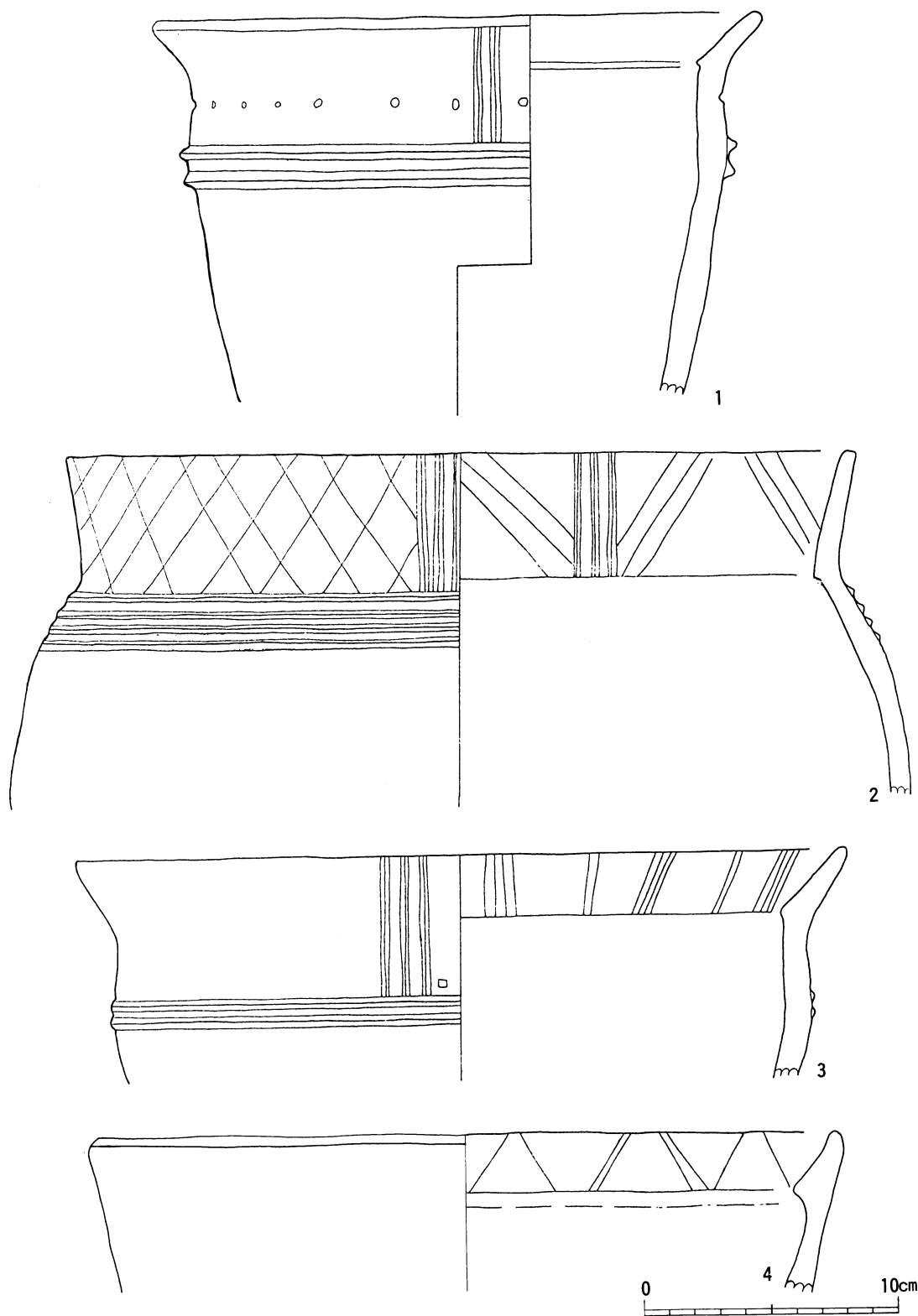
30は土製品で周囲を磨り切って、5角形をつくり、中央部に6mm前後の円孔を通していている。土器片はⅣ類の土器片を使用している。

第7表 長浜金久第Ⅳ遺跡土器諸訳一覧

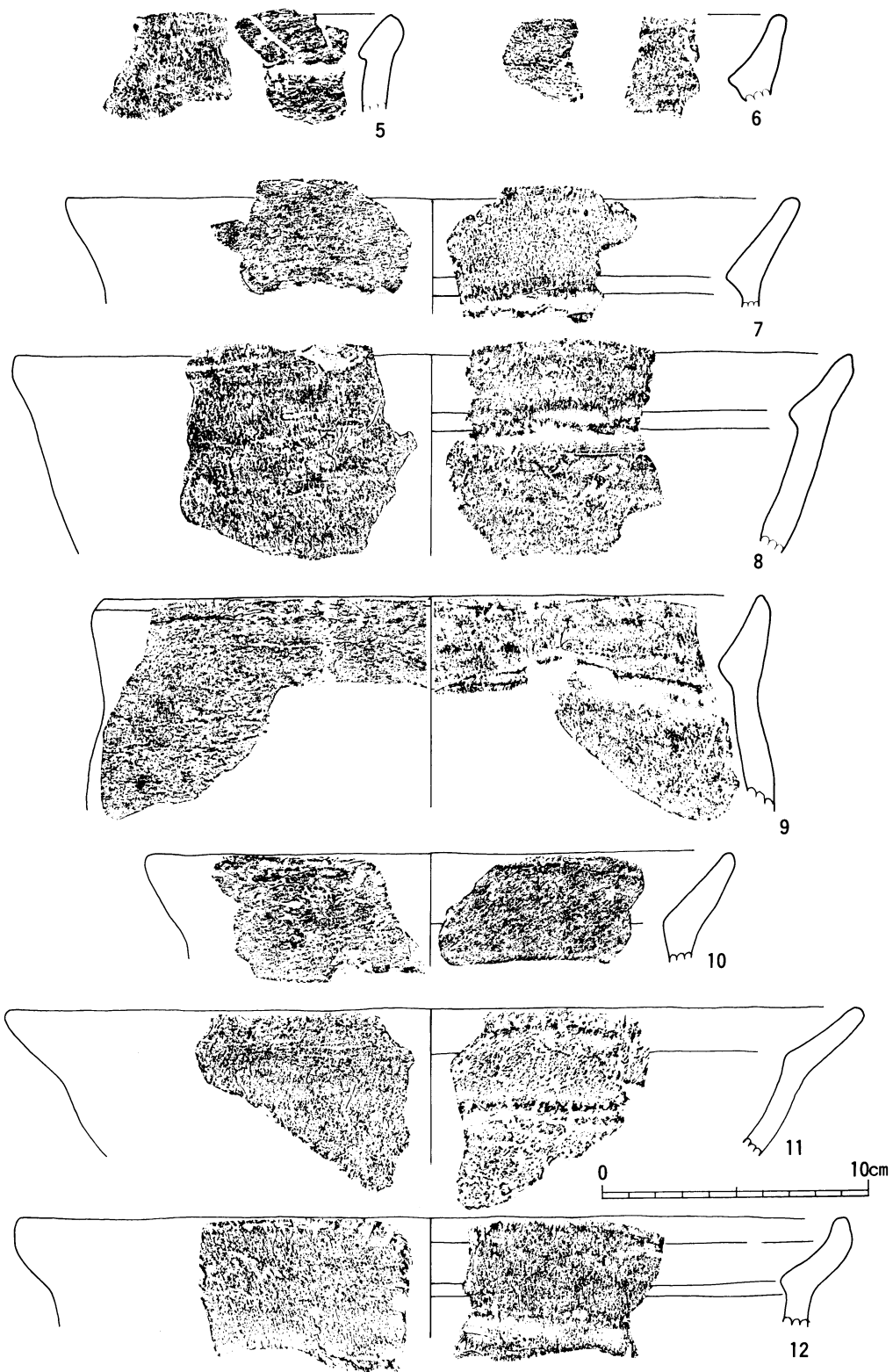
No	区	層	備考	No	区	層	備考
1	J 2	5 上	口縁部	19	K 2	5 上	底部
2	J 2	5 上	〃	20	J 2	5 上	〃
3	I 3	5 上	〃	21	J 2	5 上	〃
4	H 2 H 3	5 上	〃	22	H 3	5 上	〃
5	H 2	5 上	〃	23	B 3	5 上	〃
6	H 3	5 上	〃	24	H 2	5 上	口縁部
7	J 2	5 上	〃	25	H 2 J 2	4 5 上	
8	J 2	5 上	〃	26	J 2	5 上	
9	K 2 I 3	5 上 〃	〃	27	H 2	5 上	
10	J 2	5 上	〃	28	H 2	4	底部
11	I 2	5 上	〃	29	H 2	5 上	
12	H 3	5 上	〃	30	H 2	4	
13	J 2	5 上	〃	31	I 2	表	
14	表採		〃	32	H 2	4	口縁部
15	J 2	5 上	〃	33	H 5	4	底部
16	J 2	5 上		34	H 2	4	〃
17	H 2	5 上	口縁部	35	H 2	4	土製品
18	H 3	5 上	底部				



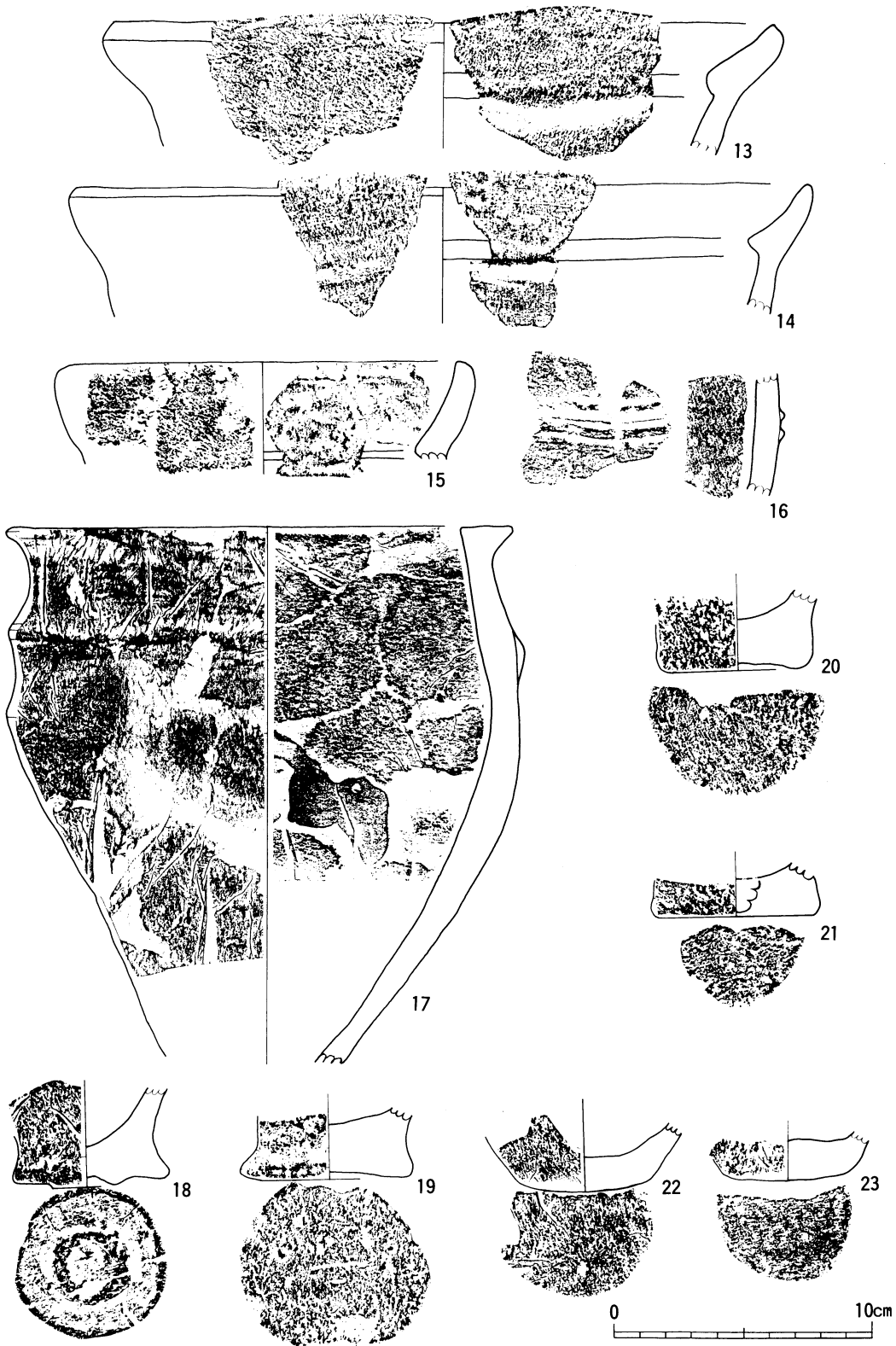
第19図 長浜金久第IV遺跡の出土土器 (1a)



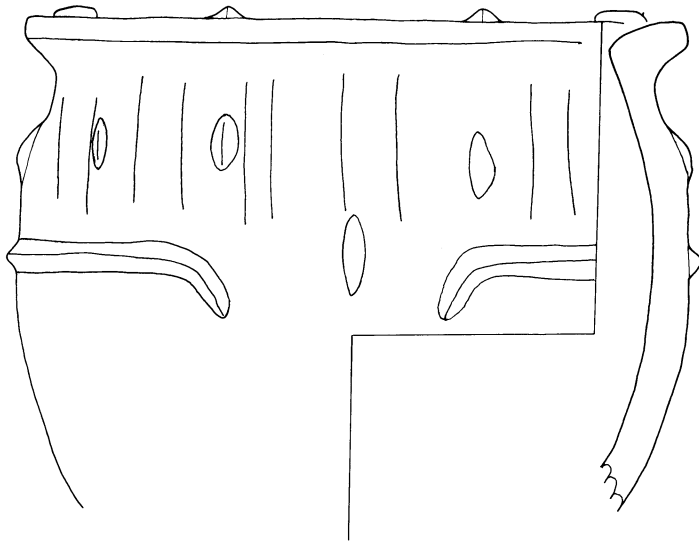
第20図 長浜金久第IV遺跡の出土土器 (1b)



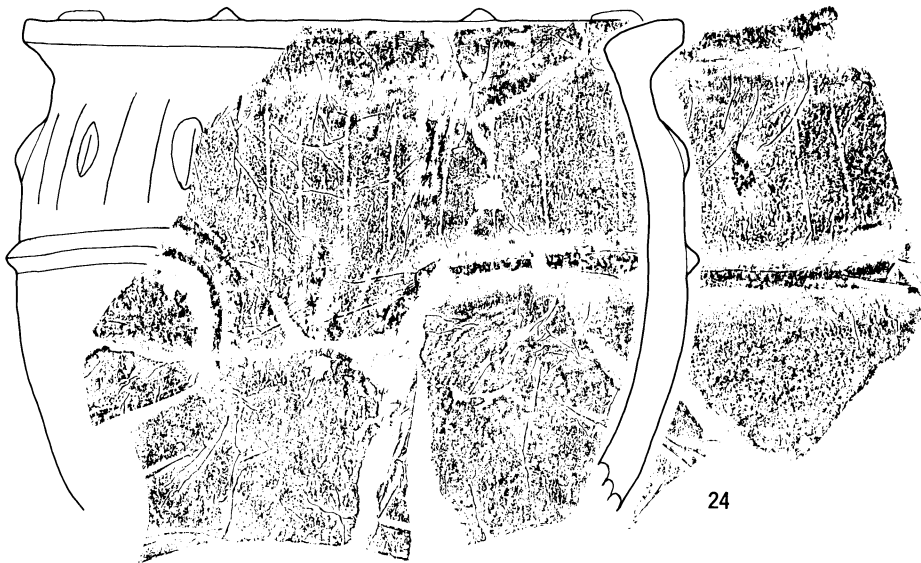
第21図 長浜金久第IV遺跡の出土土器（2）



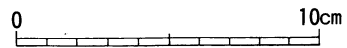
第22図 長浜金久第IV遺跡の出土土器（3）



24



24



第23図 長浜金久第Ⅲ遺跡の出土土器（4）

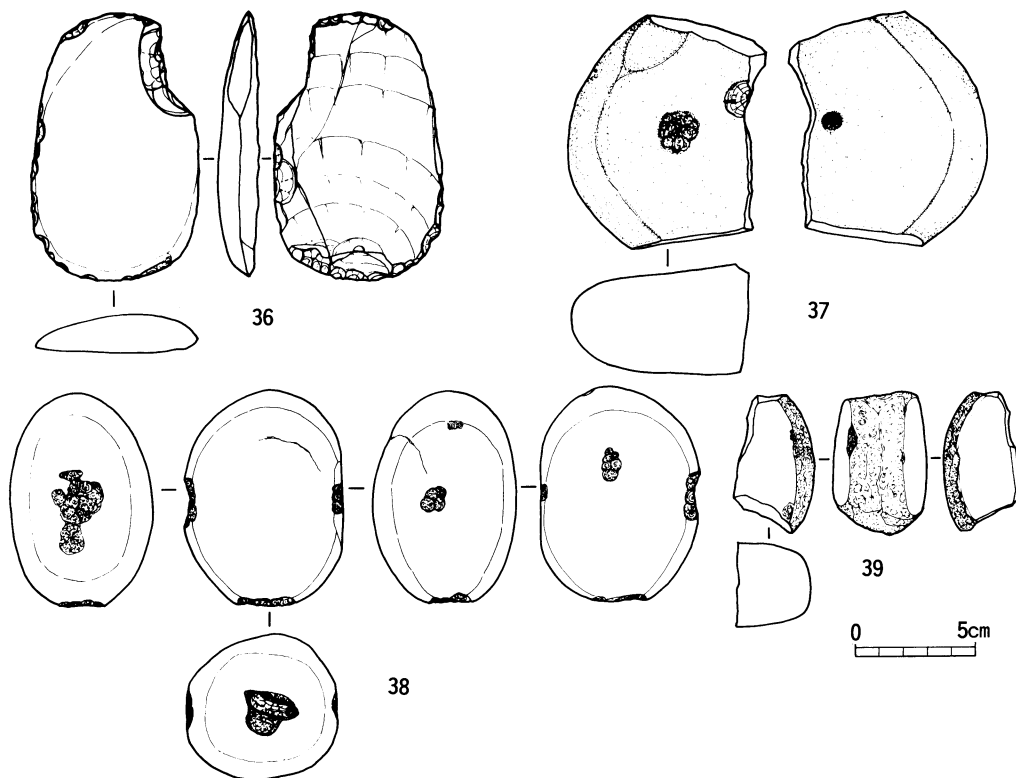


第24図 長浜金久第Ⅳ遺跡の出土土器（5）

(2) 石器 (第25図)

第5層上面から打製石斧と叩石が出土した。36は、自然円礫を打ち欠いで簡単な刃部調整を行っただけの打製石斧で頁岩製である。I-3区出土。長さ11.0cm, 最大巾6.9cm, 最大厚1.7cmを測る。

37~39はいずれも砂岩の円礫を利用した叩石で敲打痕がみられる。39は両面ともに研磨の跡がみられ、磨石としても利用していたものと考えられる。

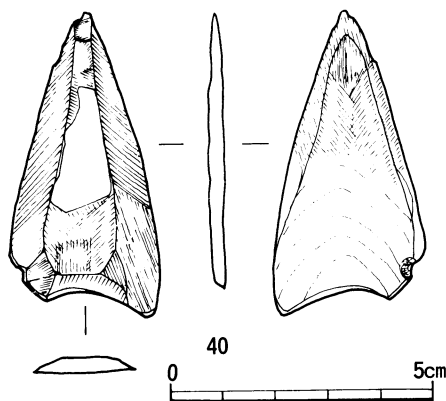


第25図 長浜金久浜IV遺跡の出土石器実測図

3. 貝製品

〈貝 鏃〉 (第26図40)

40は、I-2区第5層上面から出土したもので、ヤコウ貝の体層部を切りとって整形した大型の磨製貝鏃である。扁平無平茎のもので、基部に抉りがみられ、鏃が先端部付近で両方に分かれ基部まで続いている。本土の弥生時代の大型磨製石鏃に類似している。長さ5.8cm, 幅2.8cm, 厚さ0.2cm, 重さ5.7gを測る。



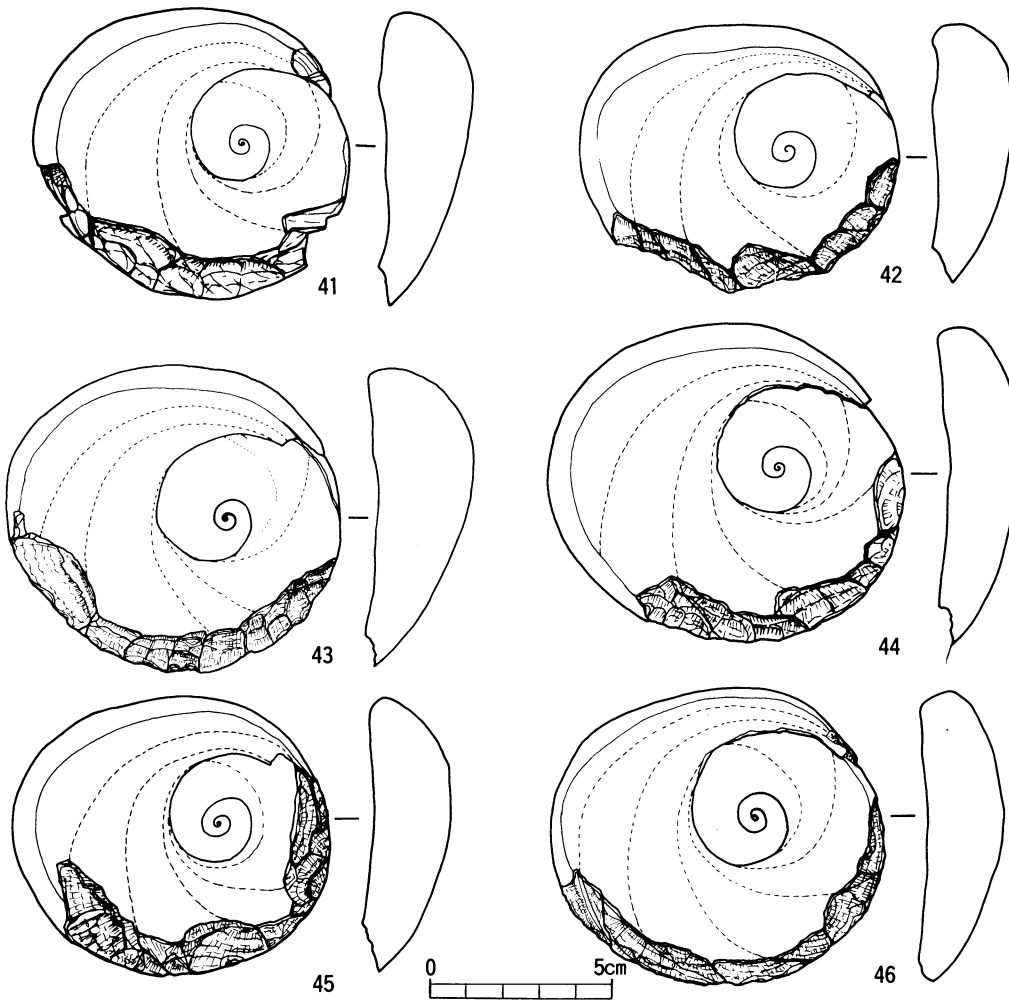
第26図 長浜金久第IV遺跡出土貝製品実測図 (貝鏃)

〈貝 斧〉 (第27図41~52) (螺蓋製貝斧・螺蓋利器等も使用)

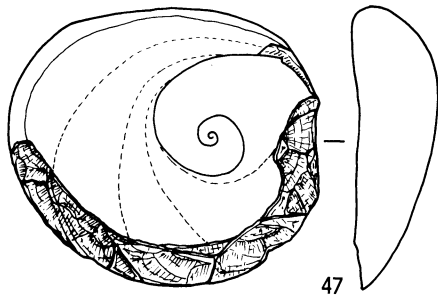
ヤコウガイの蓋を利用し、蓋のうすい部分に剝離痕があるもので、ほとんどのものが縁辺のほぼ半円ぐらいに剝離がみられる。

第8表 長浜金久第IV遺跡の貝斧諸訳一覧

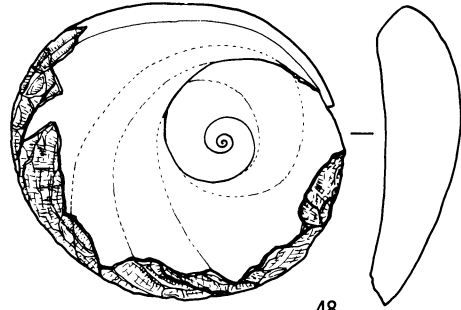
番号	出土区	大きさcm	厚さcm	重量g	番号	出土区	大きさcm	厚さcm	重量g
41	J-3	7.8×8.5	2.6	185.2	42	H-2	7.1×8.6	2.2	184.5
43	J-2	8.3×9.0	2.8	212	44	I-3	8.6×9.6	1.9	249.2
45	J-3	7.5×8.4	2.0	203.4	46	H-3	8.0×9.0	2.0	210.1
47	H-2	7.6×8.4	2.2	170.15	48	J-2	8.0×9.0	2.0	197.5
49	I-2	7.3×8.0	1.9	141.8	50	J-1	7.6×8.4	2.2	193.75
51	H-2	6.8×8.0	2.2	156.7	52	J-2	7.5×8.5	2.3	186.85



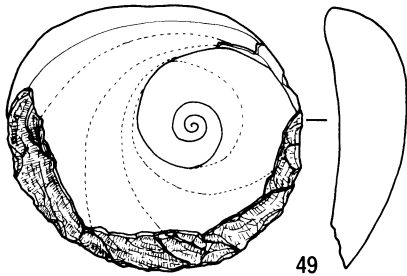
第27図 長浜金久第IV遺跡の貝斧実測図 (1)



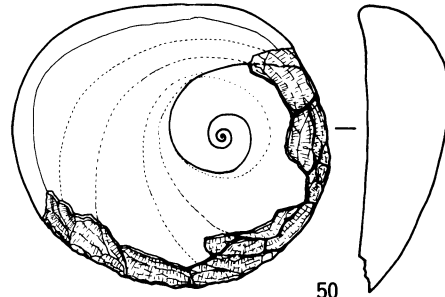
47



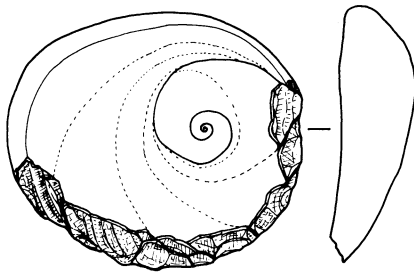
48



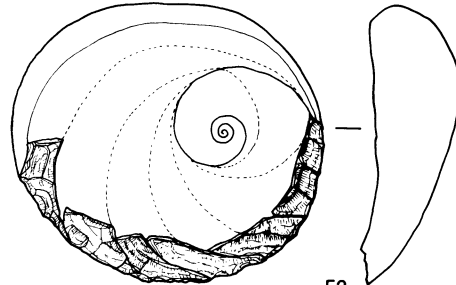
49



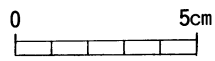
50



51



52



第28図 長浜金久第Ⅳ遺跡の出土の貝斧（2）

4. 小 結

第Ⅳ遺跡は、第Ⅲ遺跡の南にほぼ南北にのびる砂丘の北端に位置し、第Ⅲ遺跡とは小さな谷をはさんで対峙している。本来の遺跡の中心部はさらに南側にのびるものと思われるが、砂採集の為にすでに消滅していた。第5層の上面からマガキガイを主体とする貝類とともに弥生中期の土器片、大型の磨製貝鏃をはじめとする貝製品が出土した。

土器はⅠ～Ⅳ類に分けられた。Ⅰ類は当遺跡の主体をなす遺物である。甕形土器が中心で、山ノ口式土器の影響を受けた2・3等や、24のような中期初頭から引きついで在地化した外耳土器類が出土している。Ⅱ類は外来の移入土器と考えられる。時期的には弥生後期と思われる。Ⅲ類は長浜金久第Ⅲ遺跡の土器と類似しているのでⅠ類より新しいと思われる。Ⅳ類はいわゆる兼久式土器と考えられる。

貝製品として、大型の磨製貝鏃、ヤコウ貝の蓋を利用した貝斧などがあげられる。特にこの中で大型の磨製石鏃は全面に研磨のあとがみられ、本土の弥生時代大型磨製石鏃と酷似している。土器に本土弥生中期山ノ口式系統の土器がみられることから、これらの土器とともに磨製石鏃の製法も伝わり、貝を使って模倣されたものと考えられる。この磨製貝鏃が実用品として使われたのか、あるいは山ノ口遺跡にみられるような祭祀的意味をもつのかは今のところ断定はできない。

土器はⅠ類にみられるような山ノ口式土器の影響を受け、アレンジされた土器があることはこの地方でも弥生時代の性格が侵透していたことを裏づけている。また、山ノ口式土器のアレンジ土器と外耳土器が出土したことは従来の在地の土器もつくりつづけていることが確認された。

注①

なお、山ノ口式土器は宇宿港遺跡で出土していることが発表されている。この土器は山ノ口式土器と同じ器形で外来の移入土器と考えられる。

以上の結果、山ノ口式土器の文化は奄美地方にかなりの影響をおよぼしていると考えられる。

① 白木原和美他「宇宿港遺跡」笠利町教育委員会

第3節 長浜金久第V遺跡の調査

1. 遺跡の概要

長浜金久第V遺跡は長浜金久第II遺跡の東側にあたり、現県道の下と、砂取りの残部に残っていた。大半は長浜金久第I遺跡との間の砂取りでなくなっていた。第2図はその位置を示すものである。

この遺跡の残り面積は約450㎡であった。地層としては表層（現県道造成も含む）の下に貝殻や土器が散布し、第4層の黄褐色砂層上面を中心に遺物が包含され、第3層の黒色砂層にも少量遺物が包含されていた。第29図はその出土状況図である。貝殻の散布状況は南側に集中し、ホラガイ、シャコガイ、マガキガイ、ヤコウガイ等がみられた。

層位は第5図に示しているように表層が、道路の造成でカットされた状況で、長浜金久遺跡全体では第3層・4層に比定される。なおこの第4層は新I砂丘の形成期のものと考えられる。

2. 出土遺物

(1) 土器

I類（1）・II類（2・20）・III類（3～19）・IV類（21～30）に分けられる。

I類（1）

1は暗茶褐色を呈し、焼成は良い。この土器は口縁部がやや外反した器形で、口唇部に斜行の刻目、口縁部に縦位の連点と横位の刻目突帯（断面三角）が施されている。内面の調整は良く研磨気味である。胎土は礫もはいるが雲母・長石・石英・石灰質粒子を含む。この土器は形式不明である。

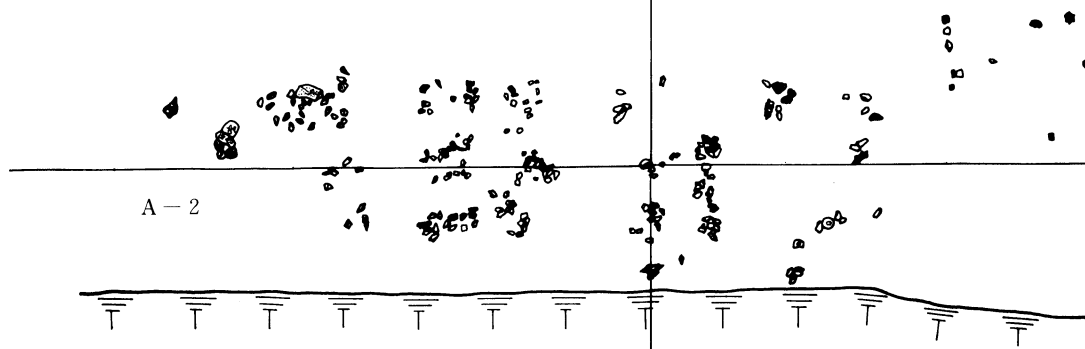
II類（2・20）

2は口唇部が張り出し刻目を付け、口縁部に刻目突帯を施した甕形土器である。暗茶褐色を呈し、器面調整は丁寧なナデ調整で、胎土は石英・長石・石灰質粒が含まれている。この土器はいわゆる亀ノ甲タイプといわれる土器に類似している。20は壺形土器である。肩部の部分で球状になり、半截竹管が施されている。色調は明茶褐色で、雲母・長石・石英が含まれ、細かい粘土を使用している。

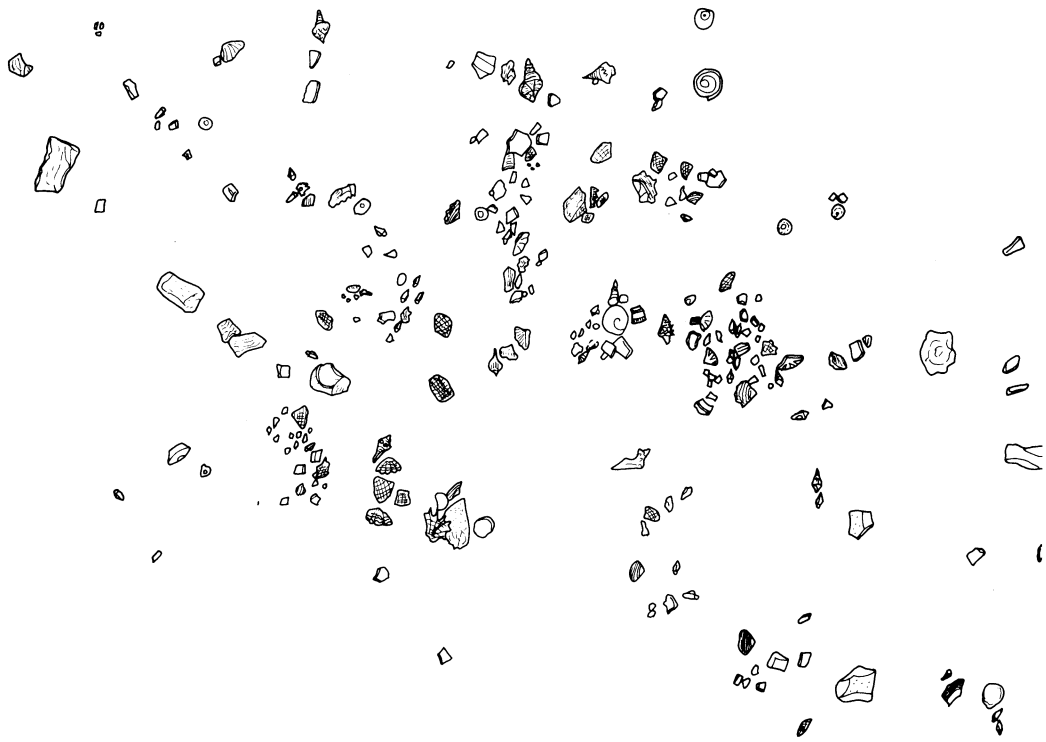
III類（3～19）

この類は当遺跡の主体となる遺物で主に5層上面より出土した。3は暗茶褐色と黒褐色を呈す。胴部に三角断面突帯を貼り付け、上下にはなし、口縁部はわずかに外湾している土器である。胎土は長石・石英・石灰質粒子が含まれ、焼成は良い。器面調整はヘラで丁寧にナデ調整がなされている。なお3と同一個体に近いと考えられる土器は11・13である。4は厚手の土器で、若干外反する口縁部である。突帯が半分みえる。茶褐色を呈し、長石・石英・石灰質粒子を含んだ胎土である。5は外面が黒褐色・内面が茶褐色を呈し、焼成の良い土器である。口縁部近くで一本の突帯がつき、器面調整は良い。6は肩部で一本の突帯がつき、色調は暗茶褐色を呈している。7は頸部で一本の三角突帯がある。色調は茶褐色で器面調整・焼成はともに良い。8は胴部で一本の突帯がついている。色調は暗茶褐色で焼成・器面調整は共に良い。9は8と同

B-2



第29図 長浜金久第V遺跡の出土状況図

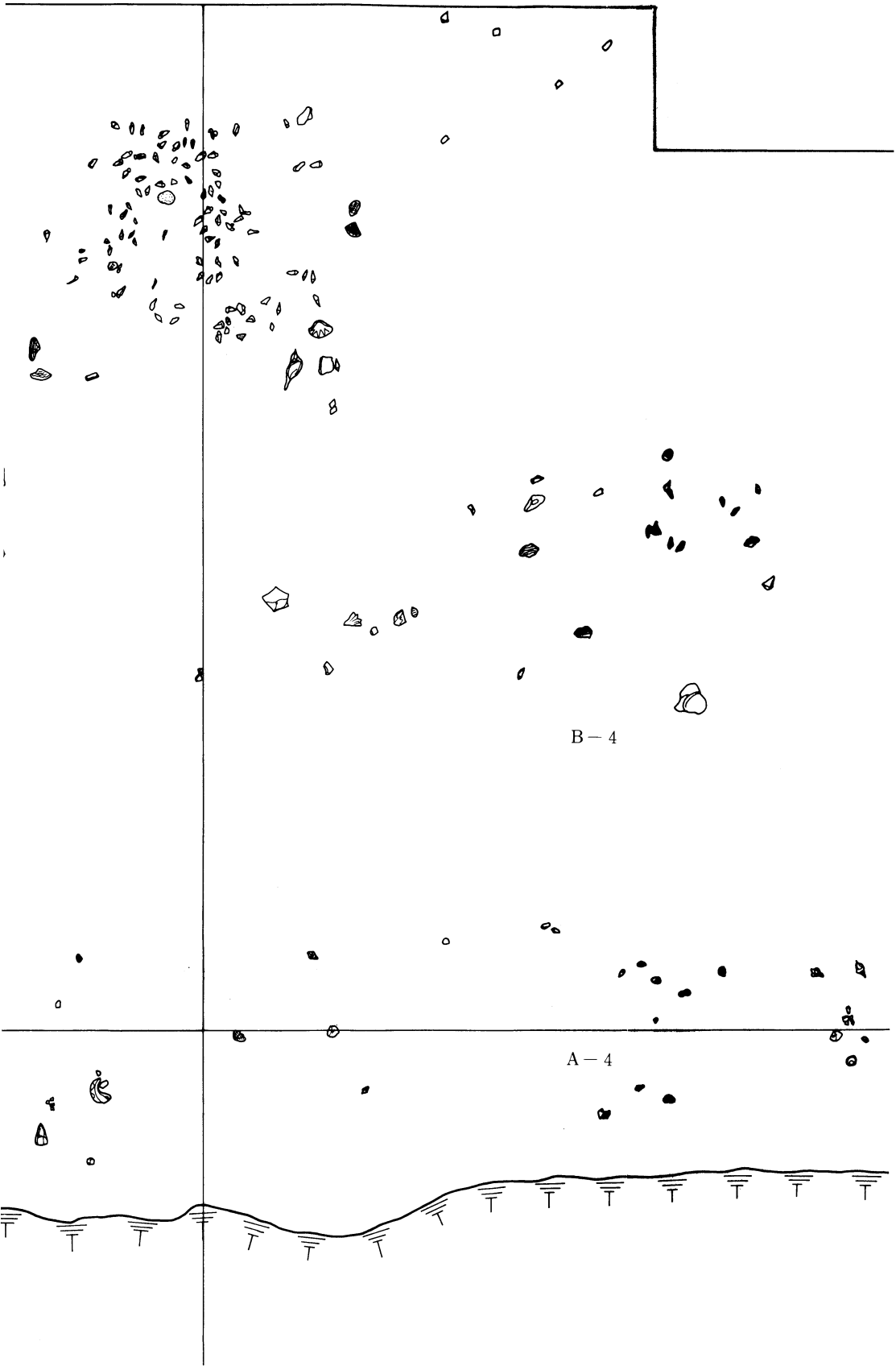


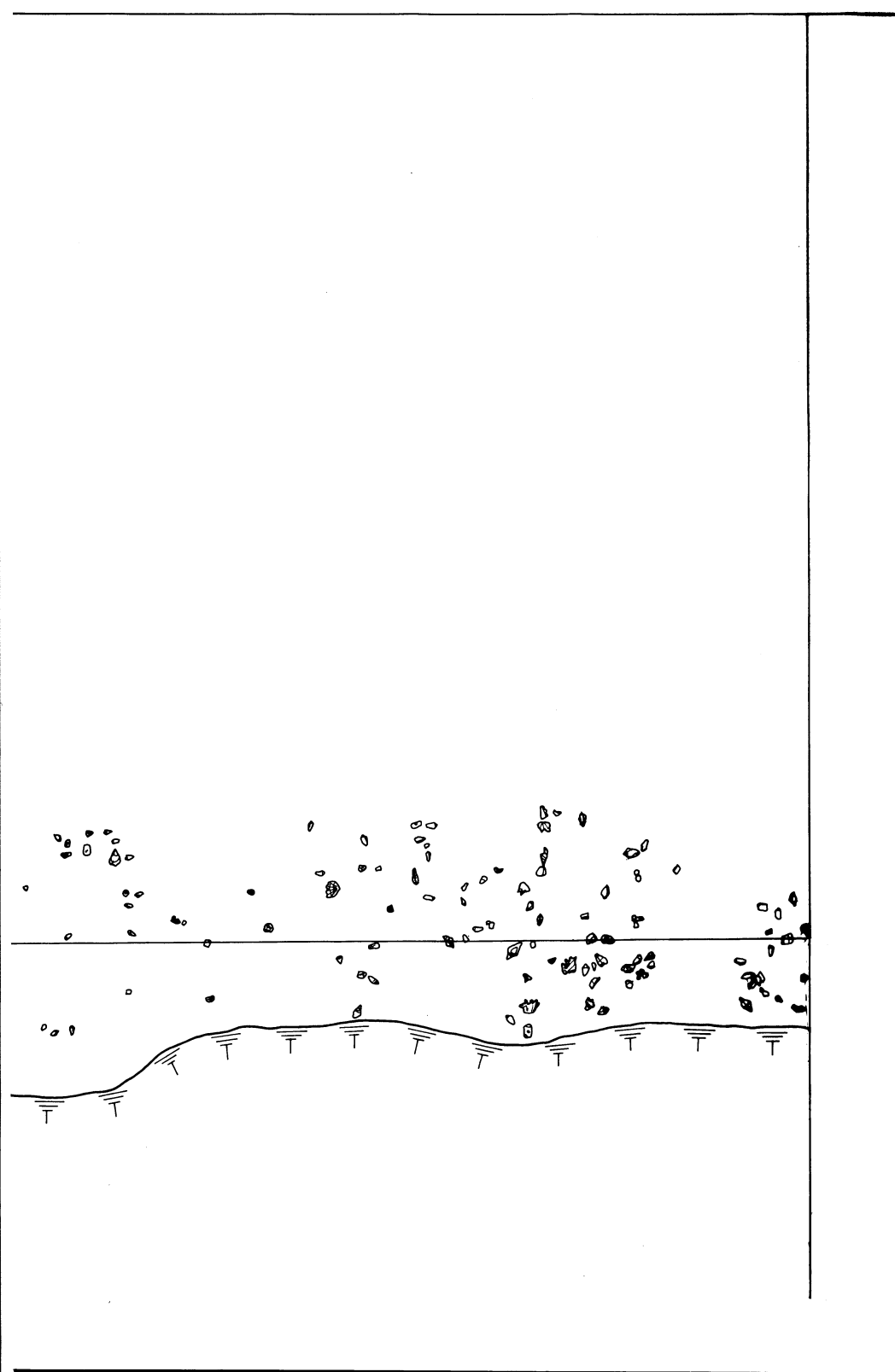
B-3

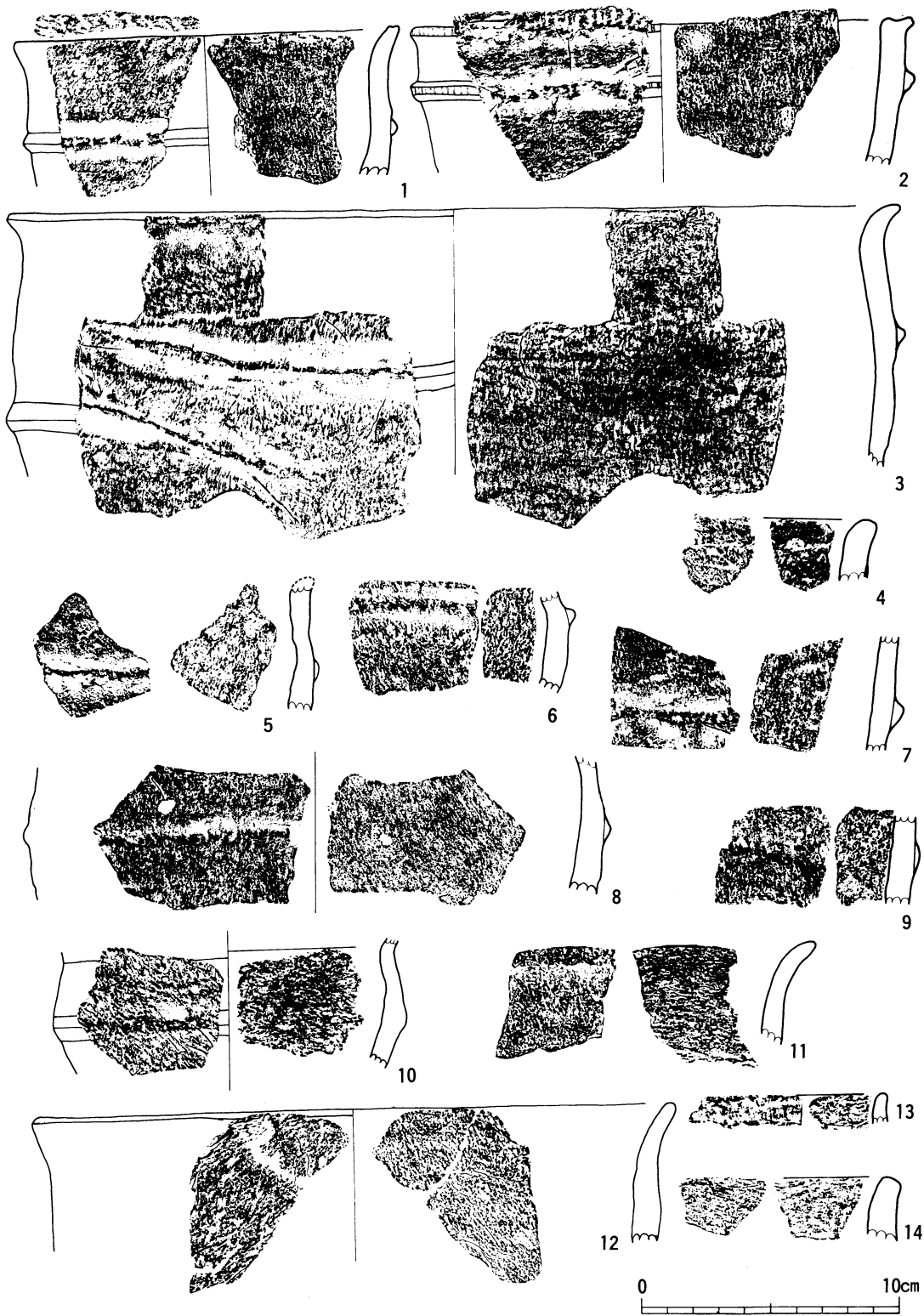


A-3

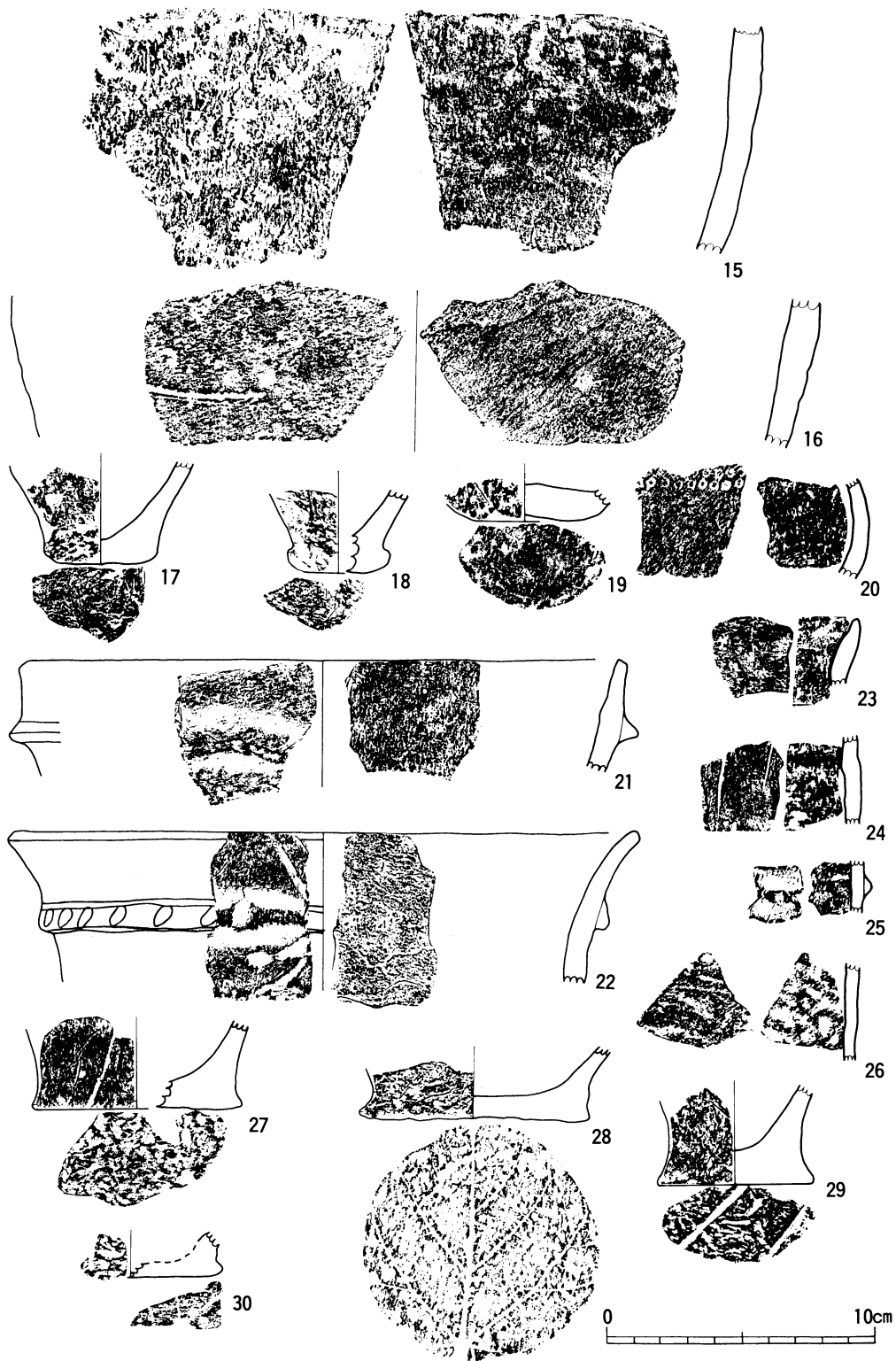








第30図 長浜金久第V遺跡の出土土器 (1)



第31図 長浜金久第V遺跡の出土土器（2）

様であるが茶褐色を呈する10は8と同じであるが頸部まであり、大きさが異なる。頸部で「く」字状にくびれる。以上が突帯をもつ土器群である。胎土は長石・石英・雲母・石灰質粒子が含まれている。12はわずかに外反する口縁部で無文である。色調は茶褐色を呈し、器面調整は内面が良く、外面は荒い。14はわずかに外反する口縁部で色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈す。器面調整・焼成ともに良い。胎土は前項のものと同じである。15・16は胴部である。15は黄茶褐色で器面調整は内側が良い。16は茶褐色で厚手の土器であり焼成は良い。胎土は前と同様である。17・18・19は底部である。17は外面が茶褐色で内面は黒褐色である。この土器は平底で調整が良い。18は暗茶褐色の色調を呈した平底である。この2つは甕形土器の底部と思われる。19は平底の底部であるが、17・18と異なり張り出しがない。黒褐色を呈し調整は良い。壺の底部と思われる。以上がⅢ類である。

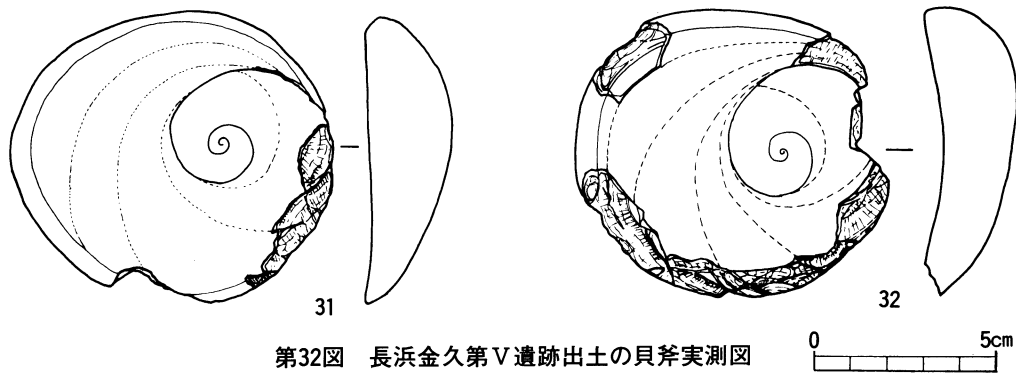
Ⅳ類 (21~30)

21は甕形土器の口縁部である。外面にカーブのある突帯がみられる。色調は茶褐色で焼成は良い。22は赤茶褐色の色調でやや外反する甕形土器の口縁部である。幅の広い突帯と沈線がみられる。胎土は21・22ともに石英・長石・雲母・石灰質粒が含まれている。23~26は灰茶褐色の色調で細い粘土を使用している。23は口縁部で、24は沈線がみられ、25は刻目突帯があり、26は無文である。27~30は底部である。すべて平底で27が暗茶褐色、28~30が茶褐色で木葉痕がある。胎土は細い粘土を使用し、石英・長石・雲母・石灰質粒が含まれている。

以上が土器である。

(2) 貝 斧 (第32図32・33)

貝斧が2点出土した。いずれもヤコウガイの蓋を利用し、蓋のうすい部分に剝離があるもので、32では右寄りの一部分に剝離がみられ、33では縁辺の約三分の二に剝離がみられる。



第32図 長浜金久第V遺跡出土の貝斧実測図

第9表 長浜金久第V遺跡の土器諸訳一覧(1)

No.	区	層	備考	No.	区	層	備考	No.	区	層	備考
1	B 2	5 上	口縁	4		4 上	口縁	7	B 2	5 上	
2	B 3	5 上	〃	5	B 3	5 上		8	A 4	1	
3	B 3	5 上	〃	6		4 上		9		4 上	

第10表 長浜金久第V遺跡の土器諸訳一覧(2)

No.	区	層	備考	No.	区	層	備考	No.	区	層	備考
10		4	胴	17	B 3	5 上	底	24	I	4	
11	B 2	5 上	口縁	18		4 上	〃	25	B 4	4 上	
12	B 3	5 上	〃	19	B 2	5 上	〃	26		4 上	
13		4 上	〃	20		4 上		27		4 上	底
14	B 3	5 上	〃	21	B 2	5 上	口縁	28		4 上	〃
15	B 2	5 上	胴	22		4 上	〃	29		4 上	〃
16	B 3	5 上		23	B 4	5 上	〃	30		4	〃

第11表 長浜金久第V遺跡の貝斧諸訳一覧

番号	出土区	大きさcm	厚さcm	重量g	番号	出土区	大きさcm	厚さcm	重量g
31		9.0×7.0	2.3	180.5	32		8.3×7.8	2.0	170.5

3. 小 結

この遺跡は長浜金久第Ⅱ遺跡のすぐ東側にあたるが、砂丘では別々の砂丘に立地している。調査したところは現在の県道の下で東側は砂取りで消滅していた。

出土遺物は土器と、貝器があり、貝器は貝斧である。土器はⅠ類からⅣ類に分けられる。Ⅰ類は縄文時代の土器に比定され、長浜金久第Ⅱ遺跡と関係が強いと思われる。Ⅱ類はいわゆる亀ノ甲系の土器でこの遺跡の時期を考えられる資料となった。竹管文のある土器は壺形土器で、刻目突帯があるのは甕形土器である。Ⅲ類はこの遺跡で最も多い土器群で在地の土器であろう。Ⅳ類はこの類には2つのタイプが含まれている。粘土の粗い21・22と、細い23～30がある。前者は兼久式土器に近いもので、後者は兼久式土器と思われるが、前者と後者はセット関係であるか、時代が前後するかは判断できない。

この遺跡では亀ノ甲系の土器が影響を与えており本土とのつながりが弥生前期末～中期でも確認された。これは、奄美地方の中期にみられる突帯をもつ外耳土器とつながる一つの資料として上げられる。

第Ⅳ章 自然遺物およびカーボン測定値

1. 貝類

長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡における遺物包含層出土の貝類は次の通りである。

巻貝（腹足類） 第12表長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺物の貝類一覧（1）

番号	和名（科名）	第Ⅲ遺跡	第Ⅳ遺跡	第Ⅴ遺跡	番号	和名（科名）	第Ⅲ遺跡	第Ⅳ遺跡	第Ⅴ遺跡
	※ツタノハ科				24	キイロダカラ		○	
1	オオツタノハ		○		※フジツガイ科				
2	オオベッコウガサ	○	○	○	25	ホラガイ	○	○	○
	※ミミガイ科				26	ミツカドボラ	○	○	○
3	イボアナゴ	○	○	○	※スイショウガイ科				
4	フクトコブシ	○	○	○	27	マキガイ	○	○	○
	※ニシキウズ科				28	マイノソデ	○	○	○
5	オキナワイシダタミ	○	○		29	イボソデ	○	○	
6	ニシキウズ	○	○	○	30	スイジガイ	○	○	○
7	ギンタカハマ	○	○	○	31	クモガイ	○	○	○
8	サラサバテイ	○	○	○	32	ラクダガイ	○	○	
9	ダルマサラバサテイ	○	○		※オキニシ科				
	※リュウテン科				33	オキニシ	○	○	○
10	リュウテン	○	○	○	※アクキガイ科				
11	カンギク	○	○	○	34	ガンゼキボラ	○	○	○
12	コシダカサザエ		○		35	テツボラ	○	○	○
13	チョウセンサザエ	○	○	○	36	ツノレイシ	○	○	○
14	ヤコウガイ	○	○	○	37	テツレイシ	○	○	○
	※アマオブネ科				38	ムラサキイガレイシ		○	○
15	オオマルアマオブネ	○	○	○	39	シラクモガイ	○	○	
16	アマオブネ	○	○	○	40	ウネレイシダマシ	○		
17	イシダタミアマオブネ	○	○	○	※オニコブシ科				
	※オニノツノガイ科				41	コオニコブシ	○	○	○
18	コオニノツノ	○	○		42	オニコブシ	○	○	○
19	オニノツノガイ	○	○	○	※イトマキボラ科				
	※タカラガイ科				43	ツノキガイ	○	○	○
20	ハナビラダカラ	○	○	○	44	リュウキュウツノマタ	○	○	○
21	ハナマルエキ	○	○	○	45	チトセボラ	○	○	○
22	ヤクシマダカラ	○	○	○	46	イトマキボラ	○	○	○
23	ホシダカラ	○	○	○	※イモガイ科				

第13表 長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の貝類一覧(2)

番号	和名(科名)	第Ⅲ遺跡	第Ⅳ遺跡	第Ⅴ遺跡	番号	和名(科名)	第Ⅲ遺跡	第Ⅳ遺跡	第Ⅴ遺跡
47	イボシマイモ		○		※キクザル科				
48	マダライモ	○	○	○	67	キクザル		○	
49	アジロイモ	○	○	○	※カゴガイ科				
50	サラサミナシ	○	○	○	68	カコガイ	○	○	○
51	クロフモドキ		○		※シャコガイ科				
52	ヤナギシボリイモ	○	○		69	シラナミ	○	○	○
※タケノコガイ科					70	ヒレジャコ	○	○	○
53	ベニタケ	○	○		71	ヒメジャコ	○	○	○
※カラマツガイ科					※ザルガイ科				
54	コウダカカラマツ	○	○	○	72	リュウキュウザル	○	○	○
※オウムガイ科(頭足類)					73	カワラガイ	○	○	○
55	オウムガイ	○			※マルスダレガイ科				
※トウガタカワニナ科(淡水産)					74	ホソスジイナミガイ	○	○	○
56	トウガタカワニナ	○	○		75	アラスジケマンガイ	○	○	
※オナジマイマイ科(陸産)					76	アラスノス	○	○	○
57	オキナワウスカワマイマイ	○	○	○	77	ヌノメガイ	○	○	○
※ナンバンマイマイ科(陸産)					※チドリスマオ科				
58	オオシマイマイ	○	○	○	78	イソハマグリ	○	○	○
二枚貝					※バカガイ科				
※フネガイ科					79	リュウキュウバカガイ	○	○	
59	ベニエガイ	○	○		※ニッコウガイ科				
60	エガイ	○	○	○	80	サメザラ	○	○	○
61	リュウキュウサルボウ	○	○	○	81	ヒメニッコウガイ	○	○	○
※イガイ科					※シオサザナミガイ科				
62	ヒバリガイ		○		82	リュウキュウスマオ	○	○	
※マクガイ科					※シジミ科(汽水産)				
63	シロアオリ	○	○		83	マングローブシジミ		○	○
※ウミギク科					以上第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡出土の貝類は、腹足綱20科58種、斧足綱16科25種である。				
64	ミヒカリメンガイ	○	○						
※イタボガキ科									
65	オハグロガキ	○	○	○					
※ツキガイ科									
66	ツキガイ	○	○	○					

2. 動物骨

自然遺物として貝類の他に第Ⅲ遺跡より海ガメの上腕骨1点、B～D-4区の第4層に1点、第Ⅳ遺跡のI-2区5層上部にリュウキュウイノシシの左下の骨が1点出土している。

3. 放射性炭素測定

測定番号	試料名	測定値 (BPY)
KSU-1405	長浜金久Ⅲ遺跡 貝殻	1550 ± 15
KSU-1406	長浜金久Ⅳ遺跡 貝殻	1710 ± 20
KSU-1407	長浜金久Ⅴ遺跡 貝殻	2050 ± 20

註1. BPは、元来はBefore Presentの略であります。(RADIOCARBON誌にもう書かれています。)しかし、Presentが毎年動いては困るので、AD1950年をもってPresentすなわちOBPとすることに国際的な約束で決められています。

註2. Cの半減期は5568年を用いる約束になっていますので、上記の結果も5568年で計算されています。もし5730年で出したいときは、上の結果に1.029 (=5730÷5568)を掛けてください。

註3. 年代の誤差は、1標準偏差(1シグマ)であらわされることに約束されています。数学的には、真の値が含まれる確率は のようになっています。(普通は、真の値を含む範囲が1標準偏差の4倍を越えることは殆どありません。)

1シグマ(1標準偏差)中に68%、2シグマ中に95%、3シグマ中に99.7%

たとえば、5000±100BPとなっているときは、4900ないし5100BPの内にある確率が68%であり、4800ないし5200BP内である確率が95%、4700ないし5300BP内である確率が99.7%であります。

註4. C年代が得られるとそれから年輪年代(絶対年代)が求められます。くわしくは次の文献を御覧ください。

E. K. Ralph et al. MASCA News Letter. 1973

H. N. Michael. E. K. Ralph. RADIO-CARBON. 1984

東村 武信 考古学と物理化学 (学生社)

第V章 ま と め

長浜金久第Ⅲ遺跡の土器については、第Ⅰ類が地元の土器で山ノ口式土器の系統をくむ土器、第Ⅱ類が、兼久式土器、第Ⅲ類が成川式土器と免田式土器である。この遺跡の地元の土器は宇宿港遺跡等を参考にすると弥生後期後半の時期と考えられていたが、免田式土器の時期の問題と成川式土器の出土で、弥生時代終末～古墳時代にずれる可能性がある。

長浜金久第Ⅳ遺跡については第Ⅰ類が弥生期のもので、第Ⅱ類が古墳時代相当のもの（第Ⅰ遺跡より出土したものに焼成・胎土・器形類似）、第Ⅲ類は移入土器、第Ⅳ類は兼久式土器の時期のものである。この遺跡の土器の中心は第Ⅰ類で、山ノ口式土器をアレンジした土器を中心に、弥生後期のものである。なお、外耳土器は弥生中期からこの時期まで続くと考えられる。また第Ⅲ類の移入土器は後期後半の時期で当遺跡の時期を設定する上で良い資料となった。

第Ⅴ遺跡についてはⅠ類が縄文期の土器と考えられるもので、Ⅱ類が当遺跡の主体の土器である時期的には弥生前期後半の亀ノ甲からの影響で、弥生前期末から中期の時期に比定でき、これらの土器は突帯をもつ土器として特徴がある。第Ⅲ類が中心的な土器である。

以上のように今回調査した結果、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡は弥生前期末から古墳時代の遺跡が連続して立地している状況がわかった。

第34図は今回調査した遺跡の時代の前後関係と、土器形態の分類図である。第Ⅴ遺跡の時期は亀ノ甲系の土器の時期で突帯文がみられる。この突帯は胴部に直線的に貼りつけられているが、末端ははなれている。この突帯文が弥生中期頃にみられる外耳土器につながると考えられる。サウチ遺跡の外耳土器や、弥生中期初頭の土器はこの後につづくものと思われる。

第Ⅳ遺跡の山ノ口系アレンジ土器はあきらかに山ノ口式土器文化がはいつてきたことを表わし、貝鏝にしても、その文化のアレンジ現象の一つであろう。これらはそれだけ弥生時代の土器文化が浸透していたことを表わしている。そして弥生末から古墳時代になってこれらの土器が、第Ⅲ遺跡につながる。また、第Ⅳ遺跡では山ノ口系から分かれ、独自の土器をつくり出している。また、亀ノ甲等からの流れの外耳土器は別に存在し、後期には種々の土器を作製していたようである。

次に、奈良・平安時代になると第Ⅰ遺跡で出土したような形態が分類できる（第35図）

なお、長浜金久第Ⅲ遺跡は 1550 ± 15 B. P. Y. 長浜金久第Ⅳ遺跡は 1710 ± 20 B. P. Y. 長浜金久第Ⅴ遺跡は 2050 ± 20 B. P. Y. の炭素年代測定値が出た。

以上が今回調査した結果である。

また、第1次調査からこれまでの調査の結果として、次のような結果も得られた。

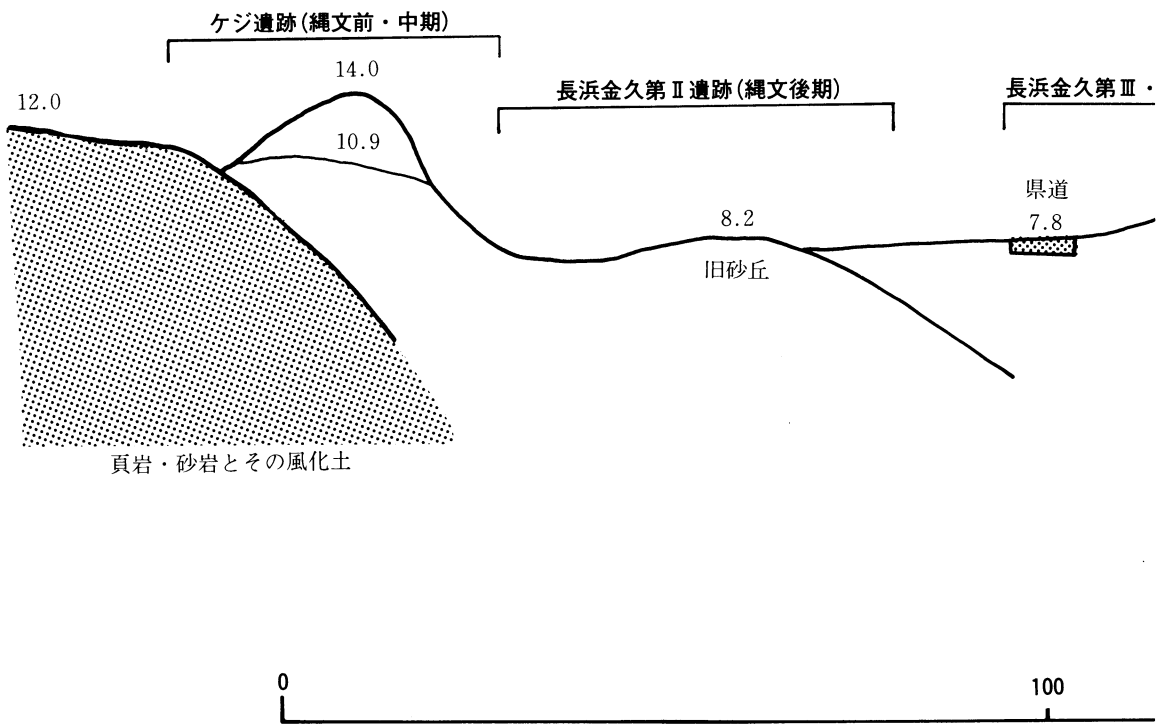
長浜金久遺跡群は第1次調査から始めて今回まで、第Ⅰ遺跡～第Ⅴ遺跡までの発掘調査を行った。これらの遺跡の特徴としては赤土（頁岩、砂岩の風化土）には遺跡がなく、砂丘上に立地する砂丘遺跡であるということである。このことは奄美大島本島の北部、笠利町内の遺跡の立地の踏査や、竜郷町の分布調査を行った結果により共通性が認められた。現在でも海岸の

砂丘地帯に集落が立地している地域が多く、この砂丘集落の立地現象は有史以前から続いていると考えられる。

その砂丘は東海岸が大きく発達し、遺跡の立地も多い。中でも笠利町の和野、万屋地区はその典型的な地域である（第1図参照）。砂丘の幅は300m前後あり、北は宇宿貝塚等が立地する大瀬海岸帯まで延びている。約300mの幅のある砂丘は大きく3ないし4回のうねりの山がみられる。第33図は長浜金久遺跡の砂丘を横断した模式図である。旧砂丘と新砂丘に分けた理由としては第2次調査で長浜金久第Ⅱ遺跡の調査の時に嘉徳式土器を出土する遺跡があり、住居跡や包含層（黒褐色）の上に白黄色の新しい砂丘が被さっており、下の砂丘を旧砂丘、上の砂丘を新砂丘と呼ぶことができるためである。そしてこの、旧砂丘・新砂丘は縄文時代と弥生以降の時代に分けられる。旧砂丘は、長浜金久第Ⅱ遺跡や、ケジ遺跡にあたり、標高は12m～9mあり、現在の県道より山の手の西側にあたる。この砂丘に立地する遺跡は縄文前期から後期までのもので、ケジⅠ・Ⅱ・Ⅲ・長浜金久第Ⅱ遺跡が所在する。新砂丘は3つに分けられ、現在の道路の下が砂丘Ⅰで標高9.0m、砂丘Ⅱは県道より東側の砂丘で海岸側標高13m、砂丘Ⅲは最も東にあり現在の海岸を形成している。この新砂丘のⅠには長浜金久Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡があり新砂丘Ⅱには長浜金久第Ⅰ遺跡が所在する。ちなみに長浜金久Ⅲ・Ⅳ・Ⅴは今回調査した結果、弥生時代・古墳時代のもので、第Ⅰ遺跡は前回調査した結果古墳・奈良・平安時代の遺跡であった。このことは、現在の砂丘形成からみれば、山の手の砂丘に縄文時代の遺跡があり、海岸に近づくにつれて新しい時期の遺跡が所在している。すなわち、砂丘の形成によって生活地域が移って行く現象が確認された次第である。

参考文献

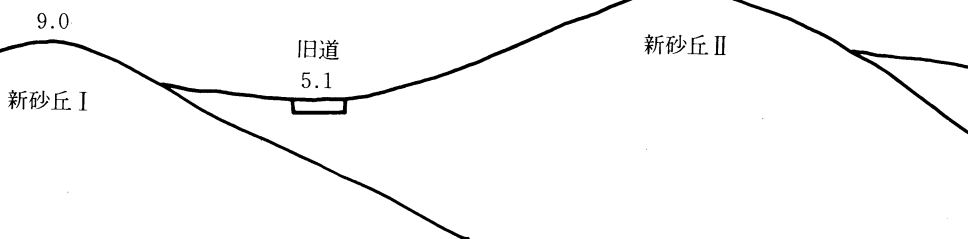
- | | | |
|------------------|----------------------|------------|
| 弥栄久志他「長浜金久遺跡」 | 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（32） | 1985年 |
| 長野真一他「ケジⅠ・Ⅲ」 | 〃 | （38） 1986年 |
| 立神次郎他「泉川遺跡」 | 〃 | （39） 1986年 |
| 繁昌正幸他「ケジⅢ遺跡」 | 笠利町文化財報告書 | （8） 1986年 |
| 立神次郎他「龍郷町の埋蔵文化財」 | 龍郷町文化財報告書 | 1986年 |

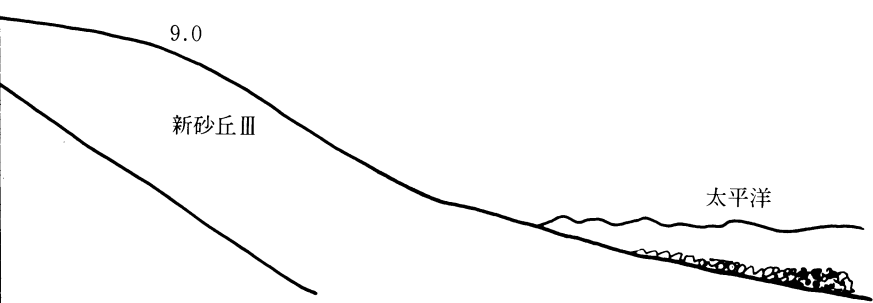


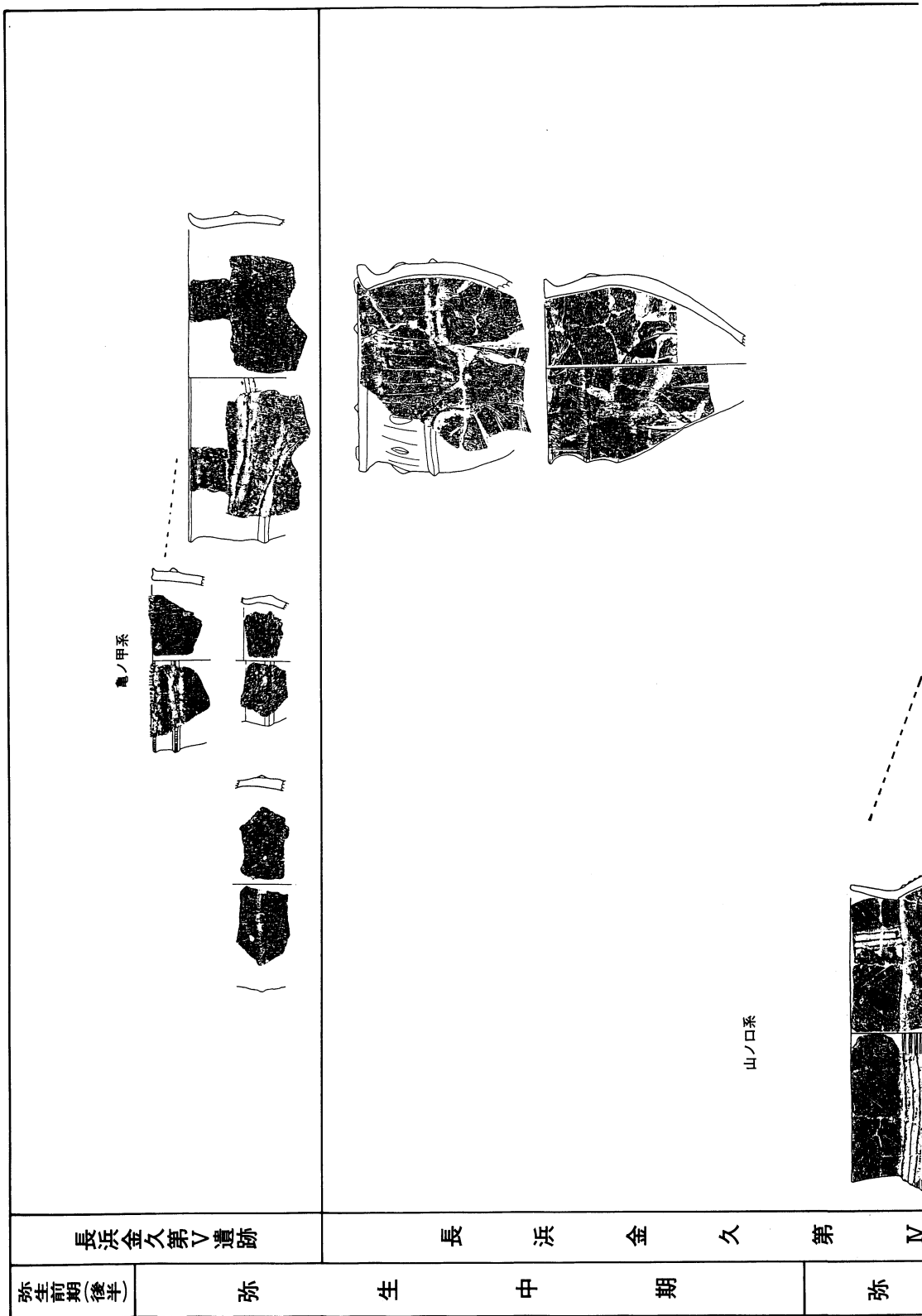
第33図 砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図

IV・V遺跡(弥生・古墳)

長浜金久第I遺跡(古墳・奈良・平安)
泉川遺跡



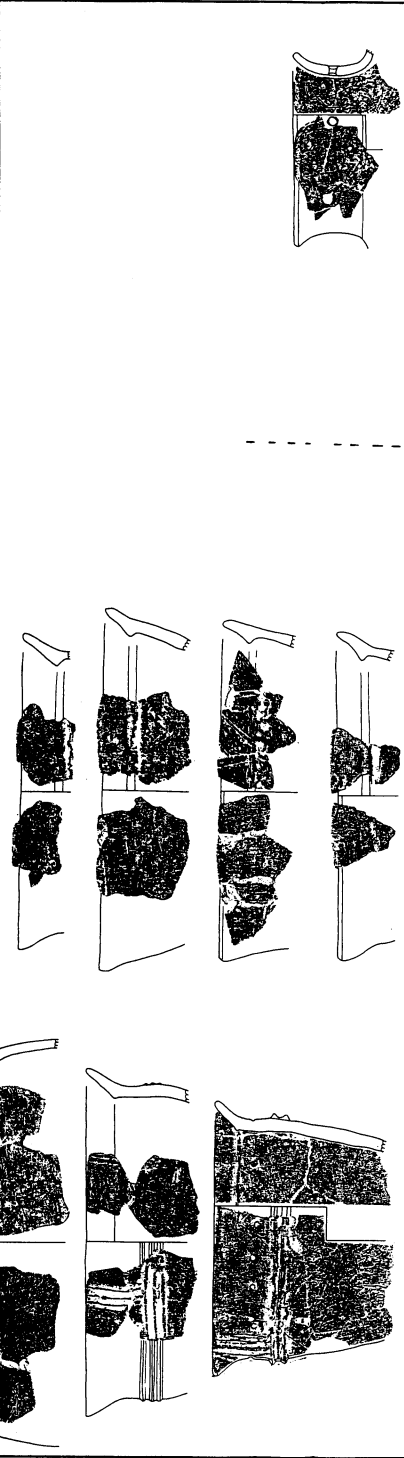




第34図 長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡出土土器の土器分類図

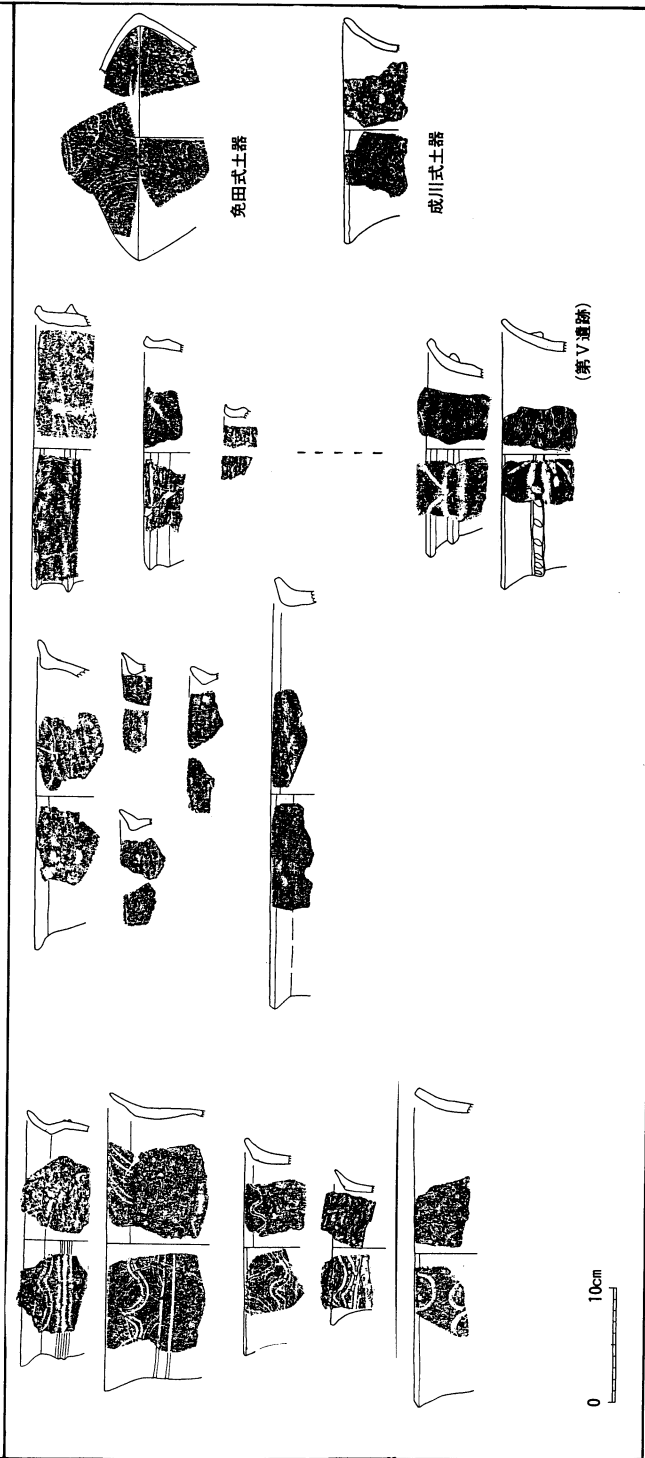
遺跡

後生



長浜金久第Ⅲ遺跡

古墳時代



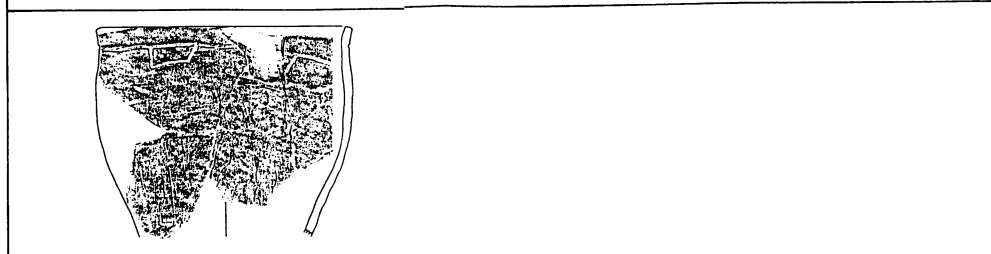
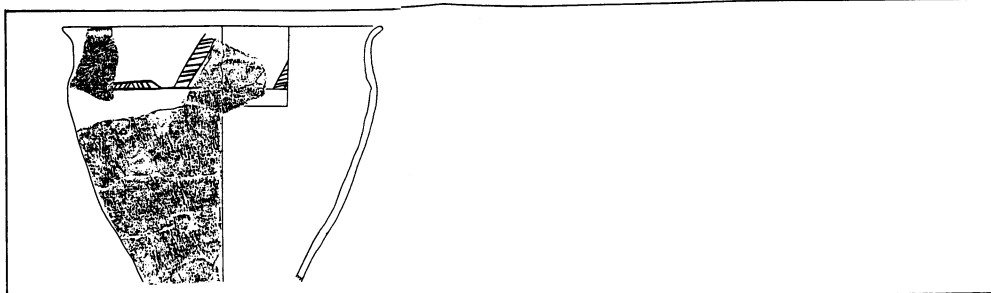
免田式土器

成川式土器

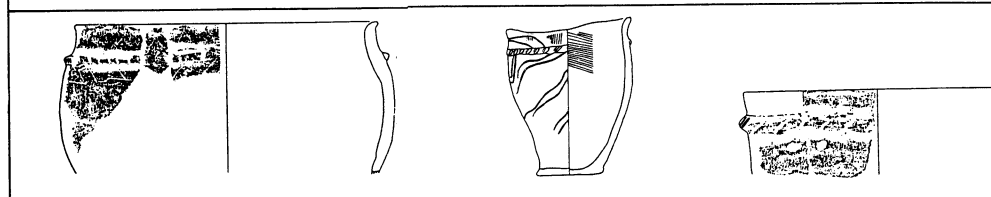
(第Ⅴ遺跡)

0 10cm

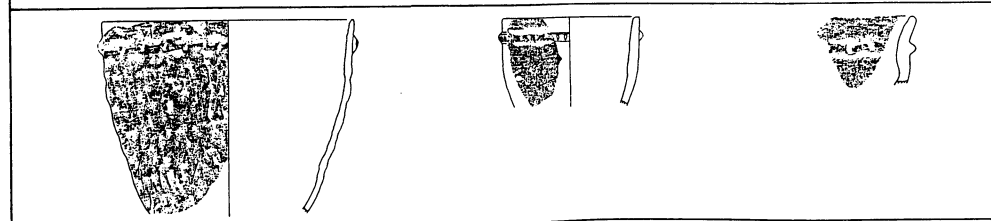
6世紀頃



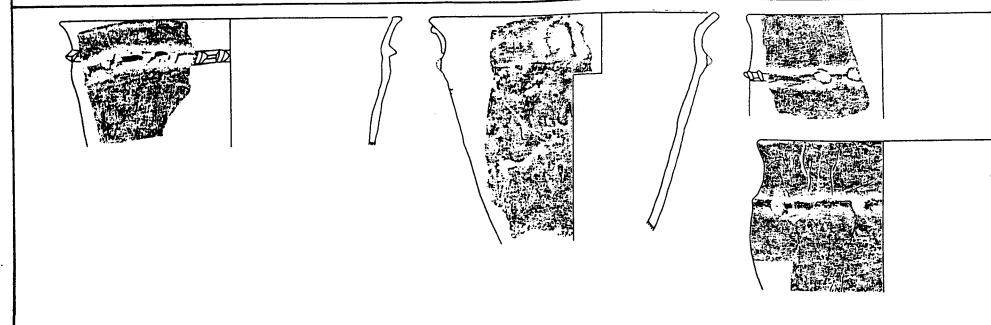
7世紀
面縄第I貝塚IV層
1355±60B.P.Y.
A.D. 650



8世紀頃

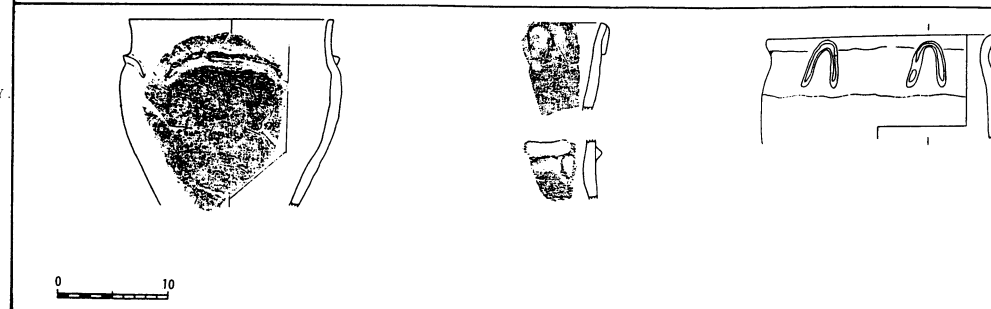


9世紀
長浜金久第I遺跡
第19層
1120±20B.P.Y.
A.D. 830~890

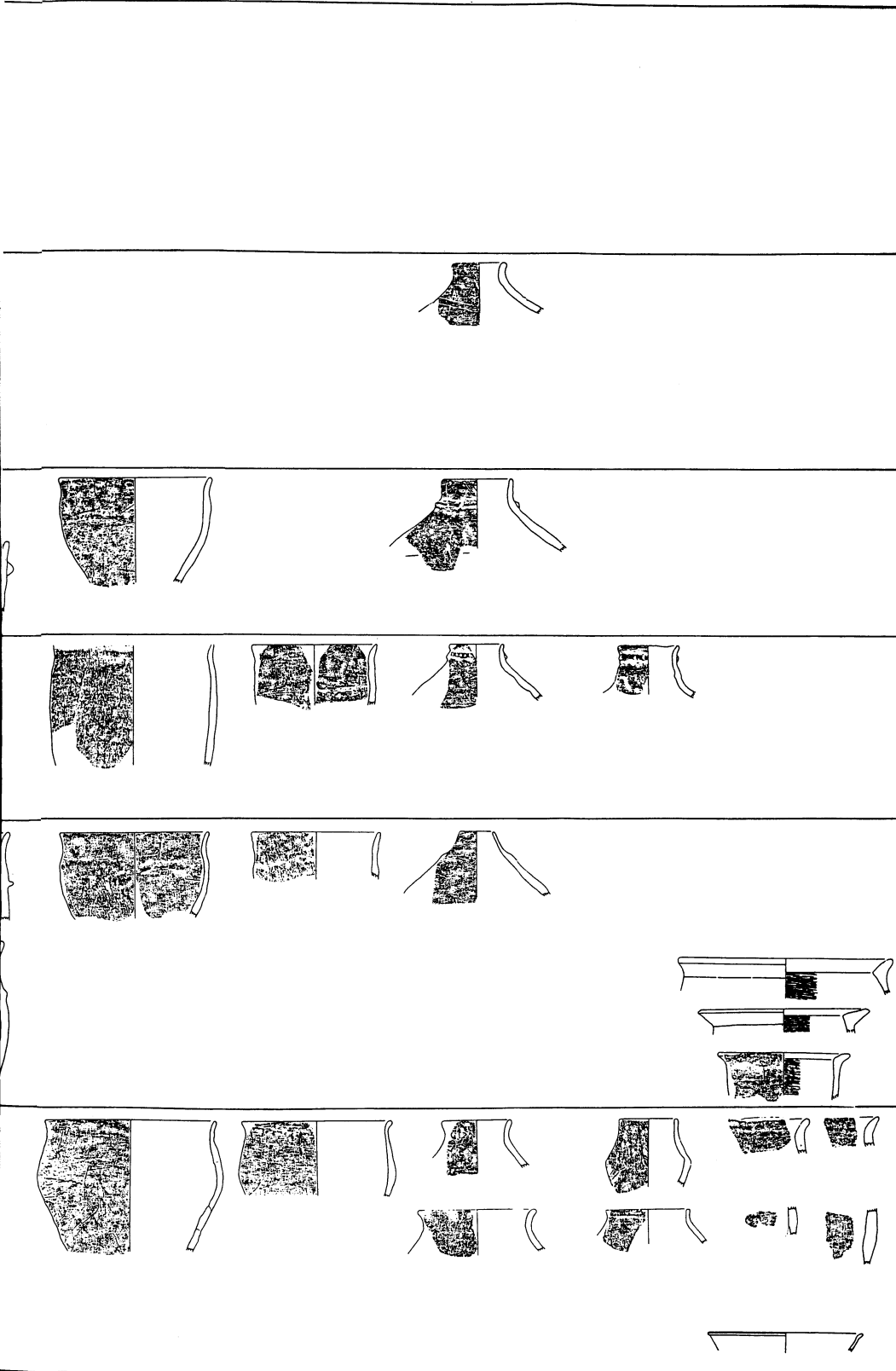


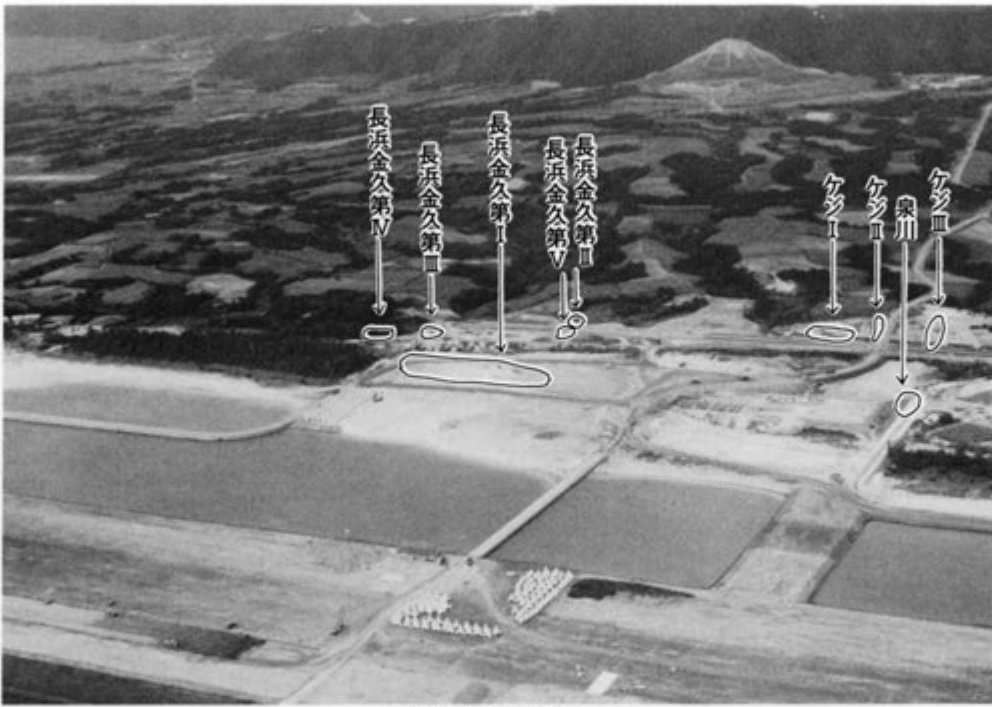
第2あやまる遺跡
第6層
1100±130B.P.Y.
A.D. 910

10世紀



第35図 長浜金久第I遺跡の土器分類図





長浜金久遺跡全景



長浜金久第Ⅲ・Ⅴ遺跡の調査開始



長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土状況



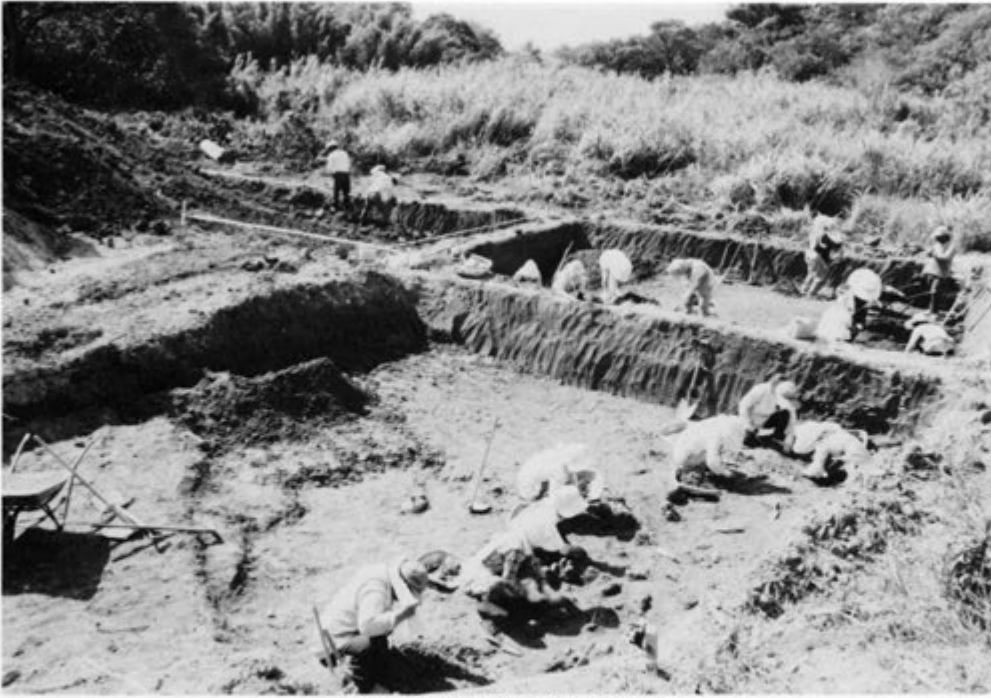
長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の土塚検出状況



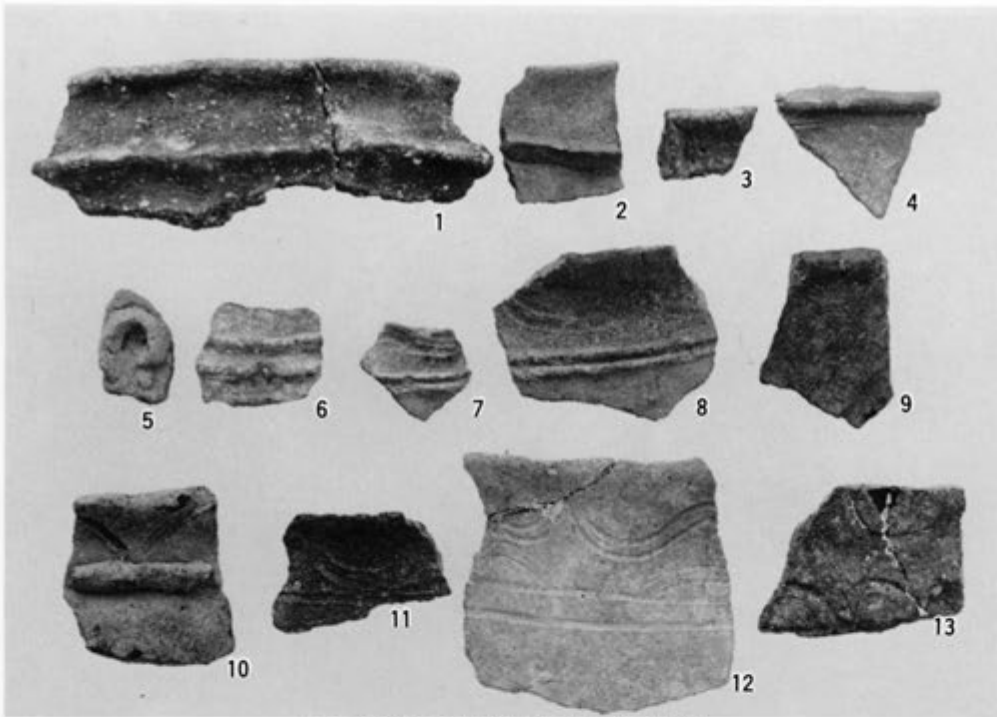
長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点建物検出状況



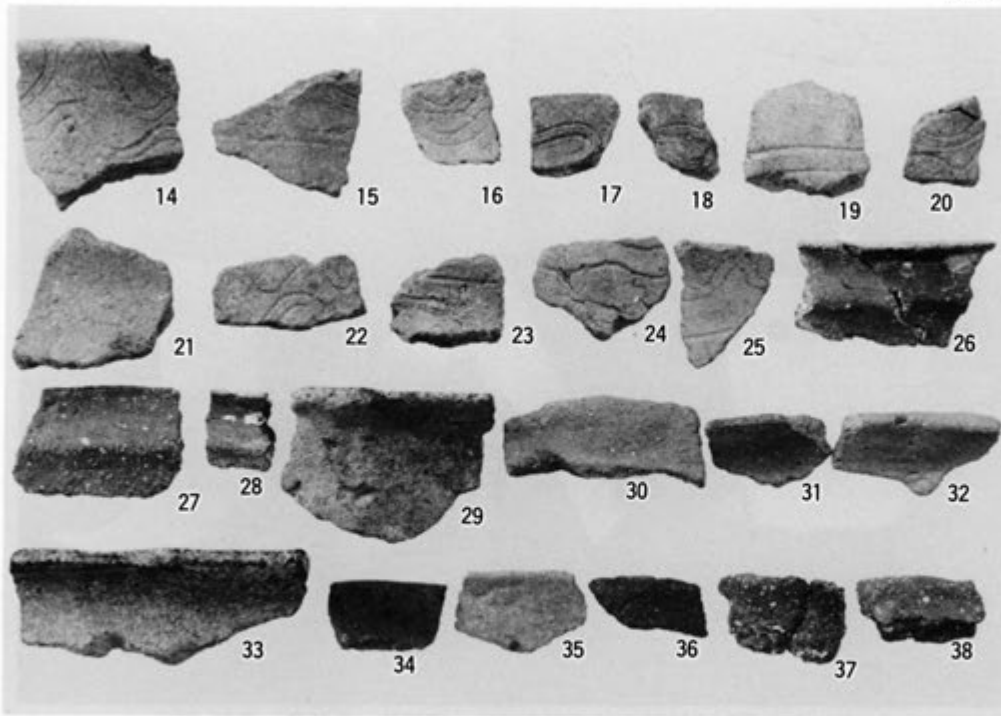
長浜金久第Ⅲ遺跡・免田式土器出土状況



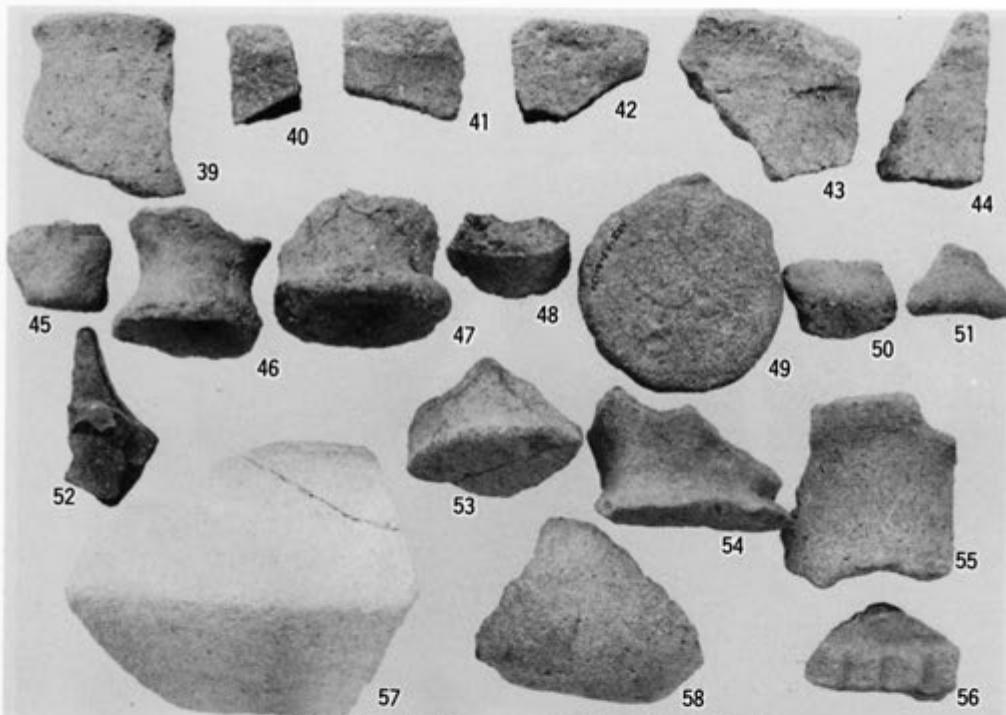
長浜金久第Ⅲ遺跡第2地点の調査風景



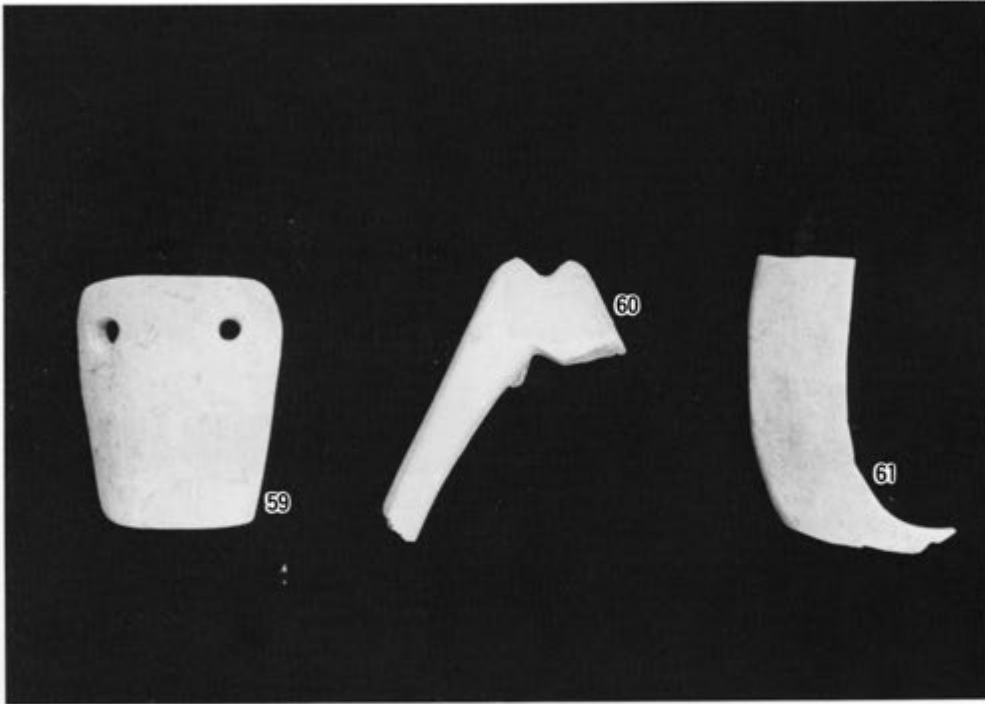
長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物



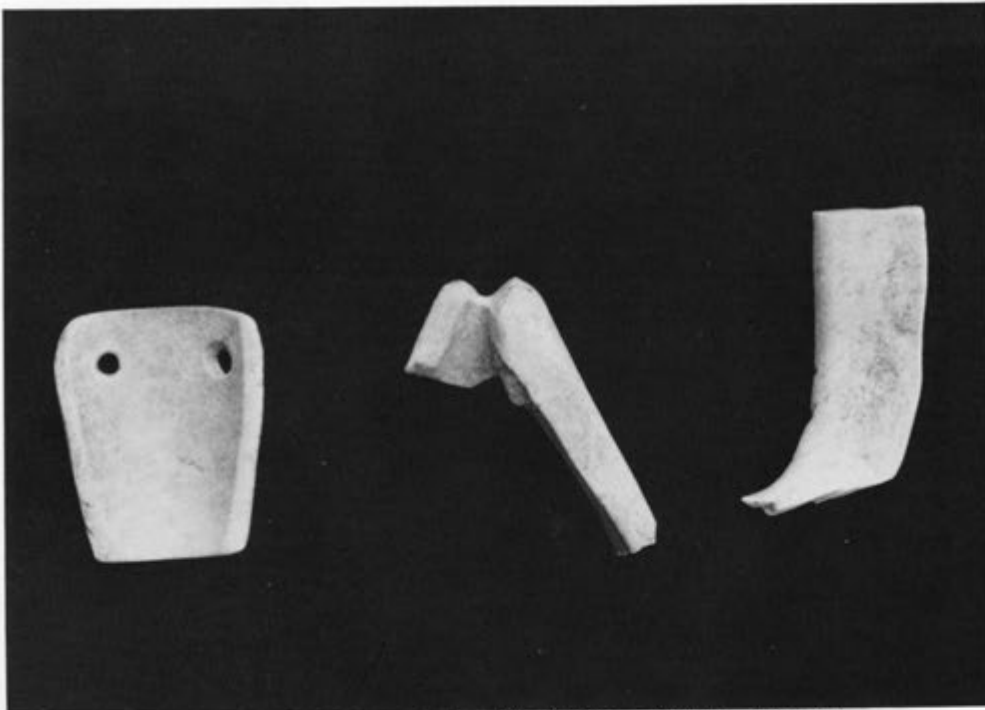
長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点の出土遺物（土器）



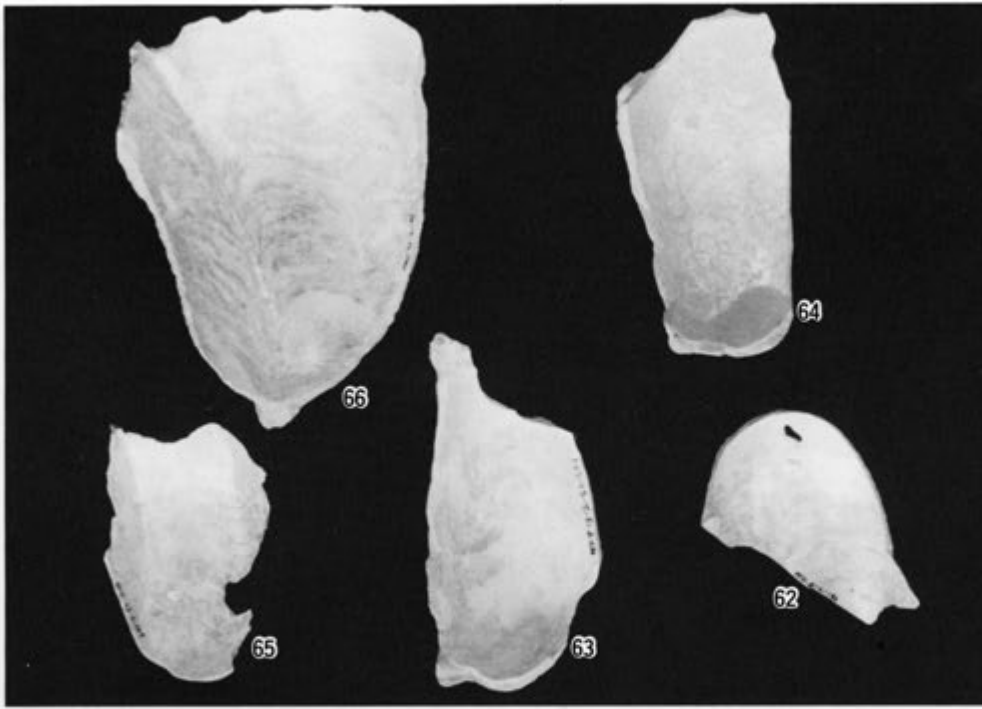
長浜金久第Ⅲ遺跡第1・3地点出土遺物（土器）



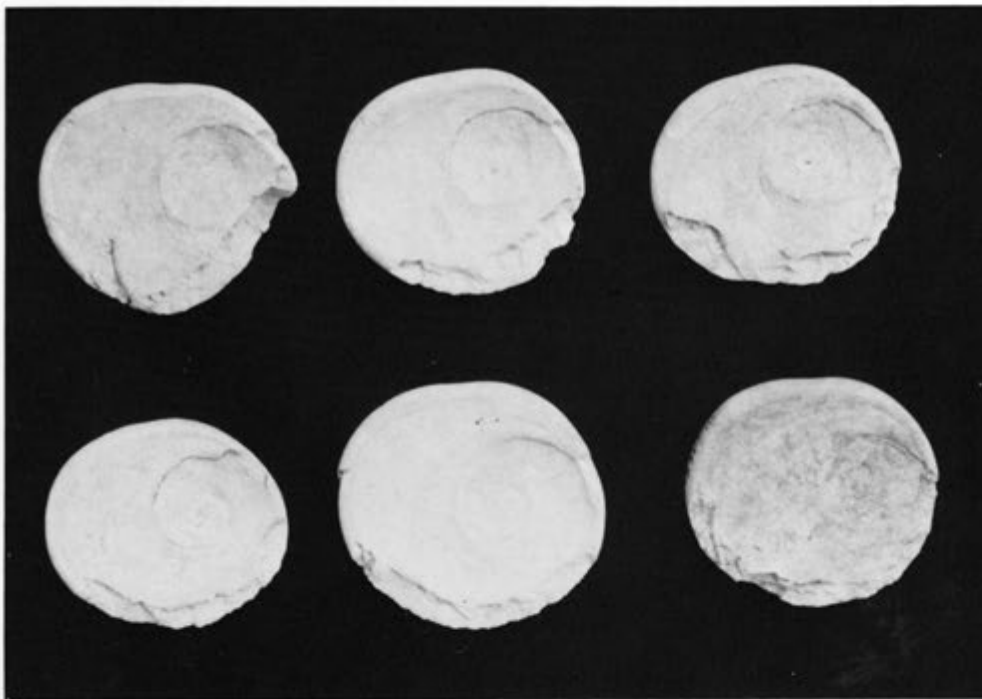
長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点出土遺物（貝製品—有孔貝・貝輪 表）



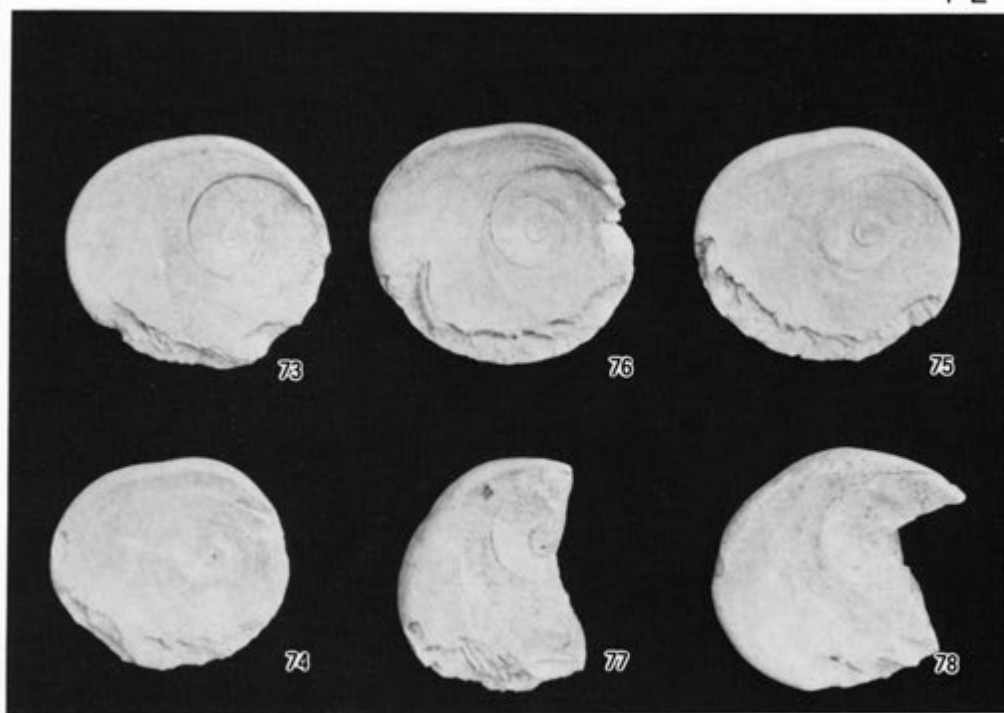
長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点出土遺物（貝製品—有孔貝・貝輪 裏）



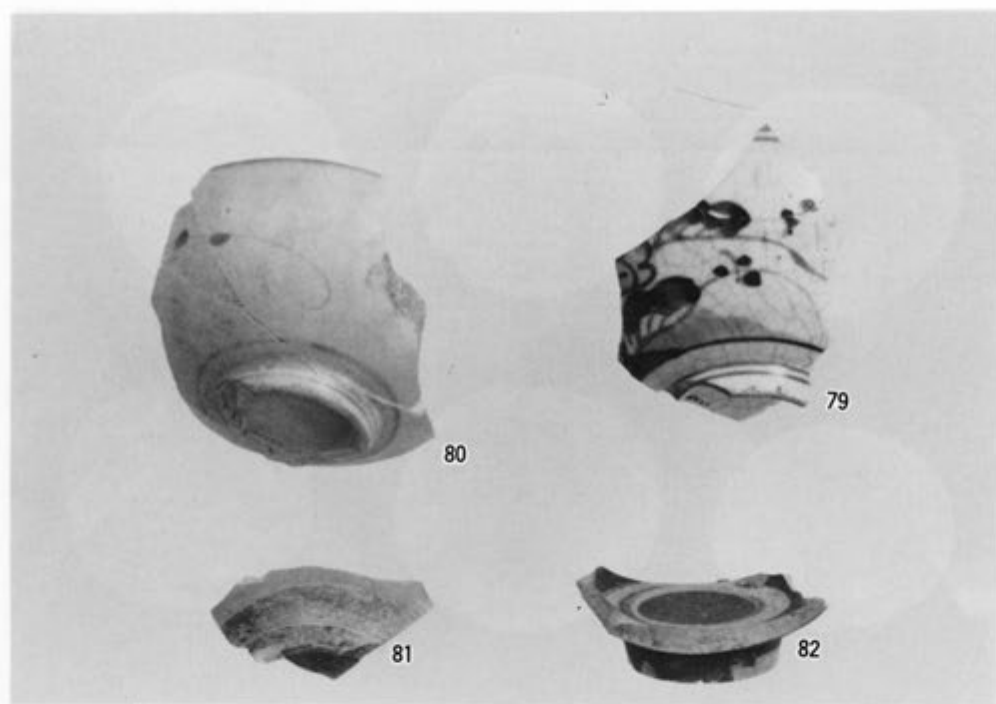
長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点出土遺物 (貝製品一貝製容器)



長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点出土遺物 (貝斧)



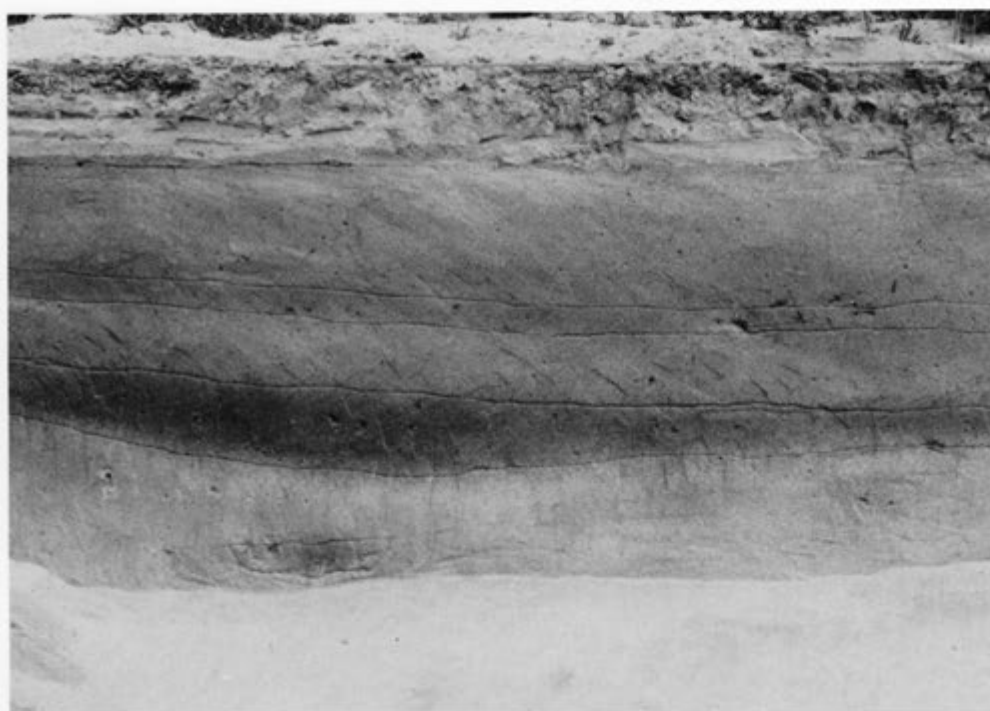
長浜金久第Ⅲ遺跡出土遺物（貝斧）



長浜金久第Ⅲ遺跡第3地点の建物跡の出土遺物



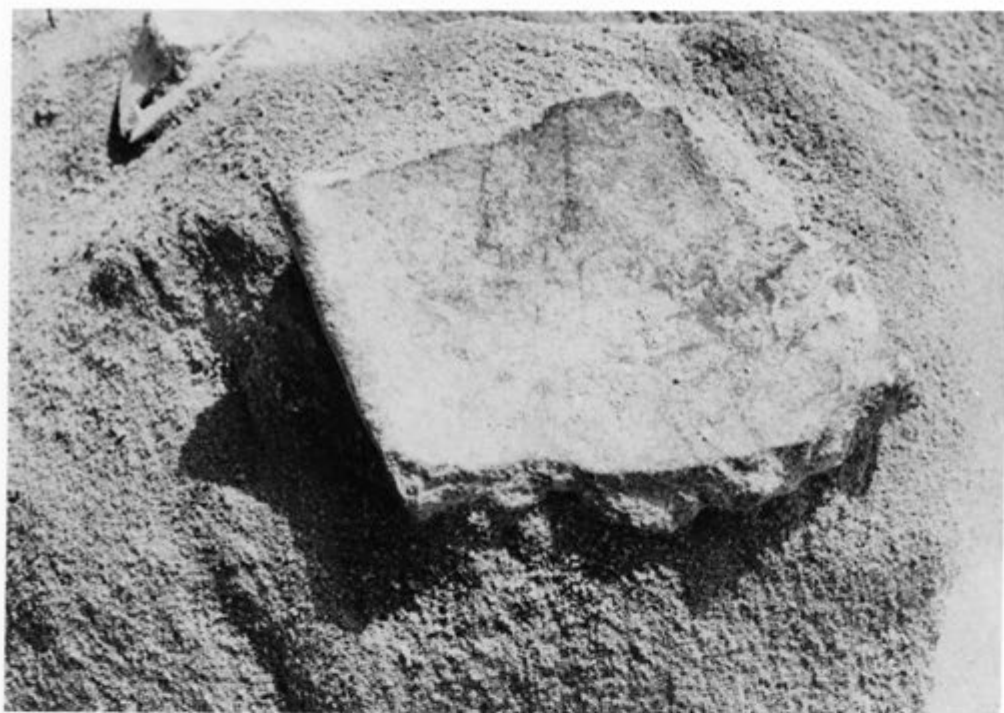
長浜金久第Ⅳ遺跡遺物出土状況



長浜金久第Ⅳ遺跡土層断面



長浜金久第Ⅳ遺跡遺物出土状況



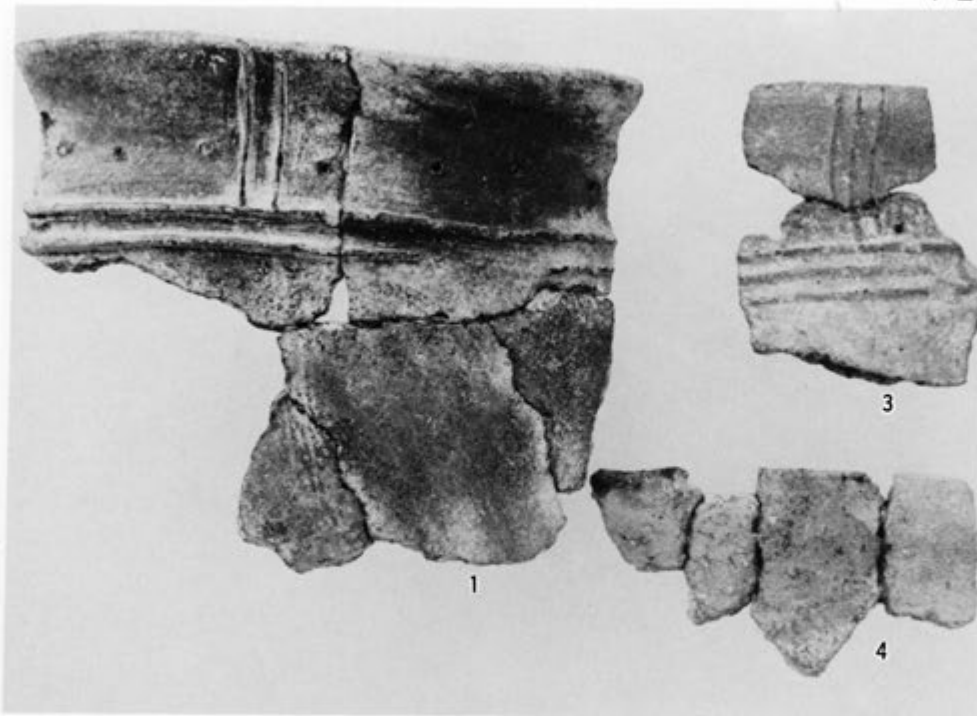
長浜金久第Ⅳ遺跡遺物出土状況



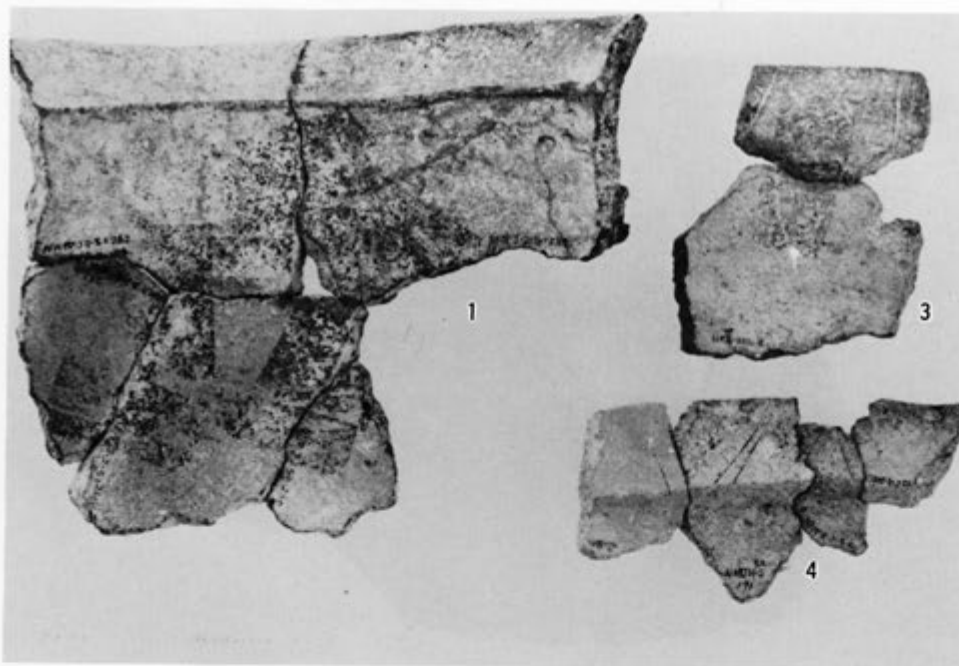
長浜金久第Ⅳ遺跡遺物出土状況



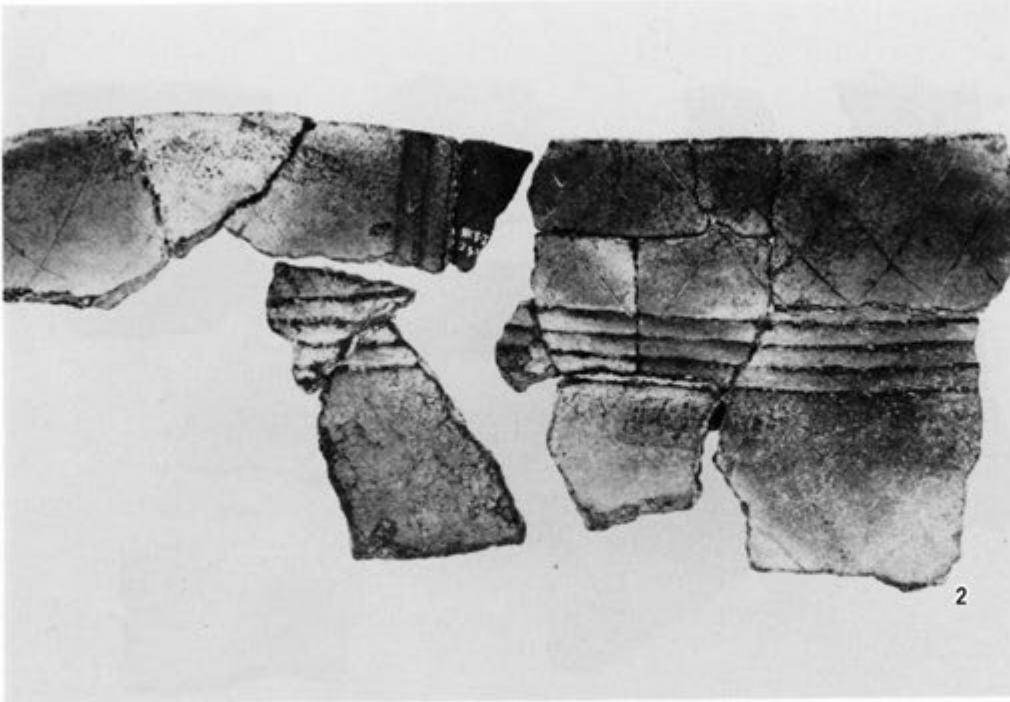
長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物（土器）



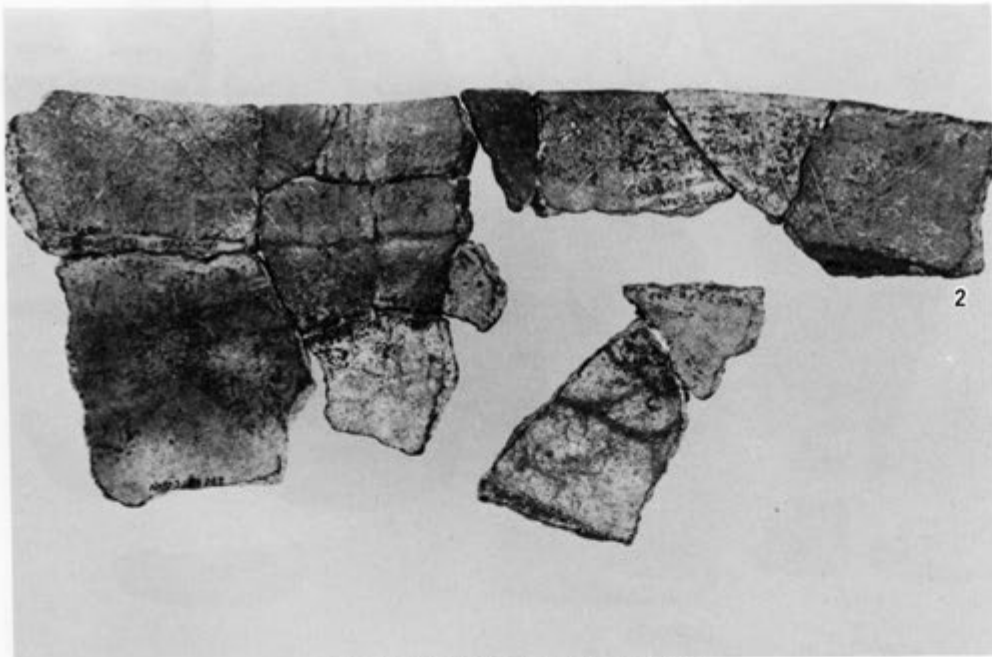
長浜金久第IV遺跡出土遺物 (土器表)



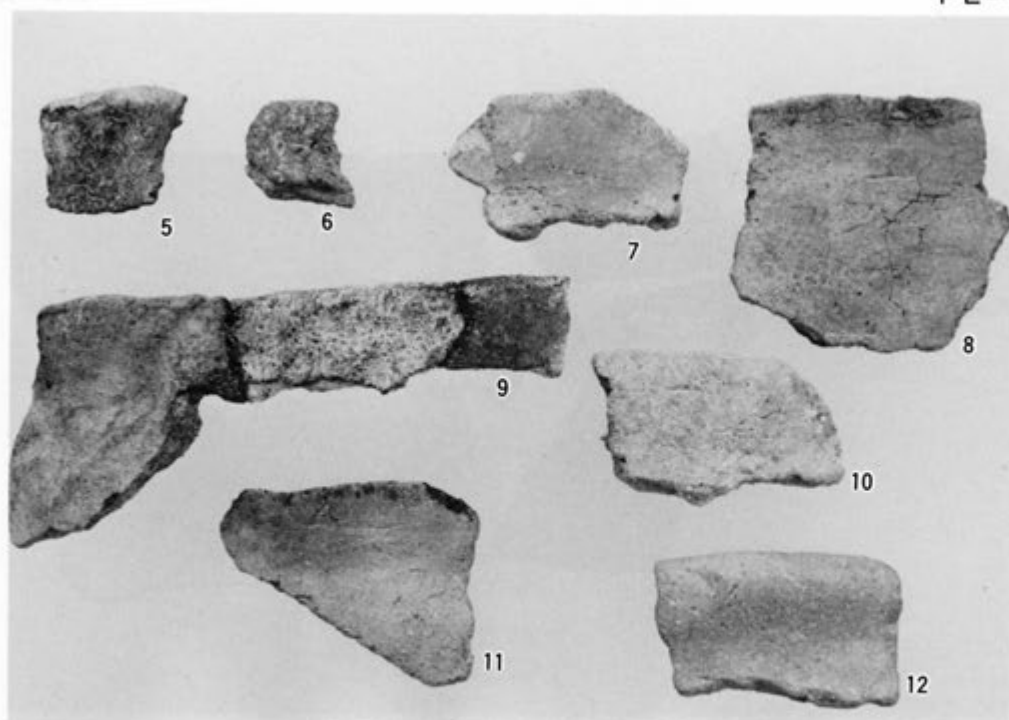
長浜金久第IV遺跡出土遺物 (土器裏)



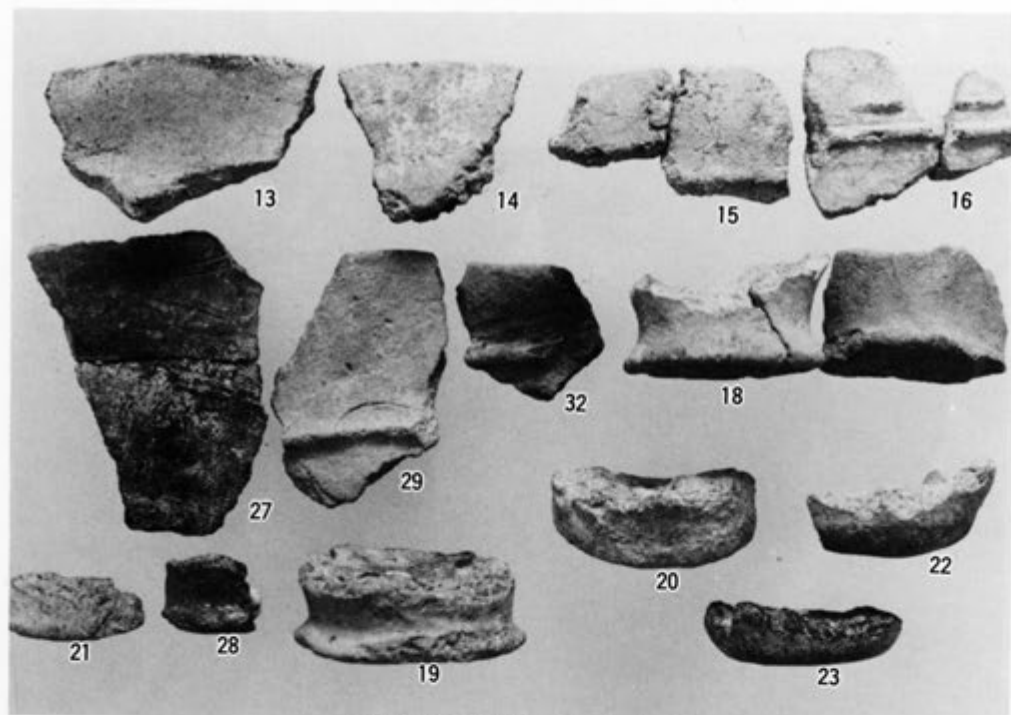
長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物（土器表）



長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物（土器裏）



長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器)

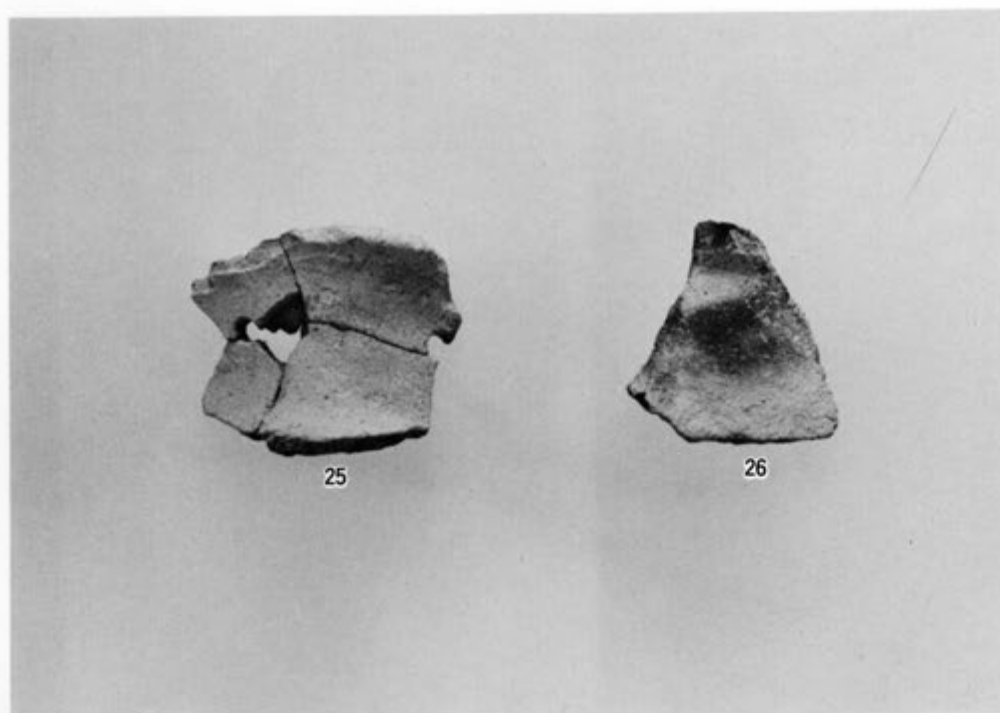


長浜金久第Ⅳ遺跡出土遺物 (土器)

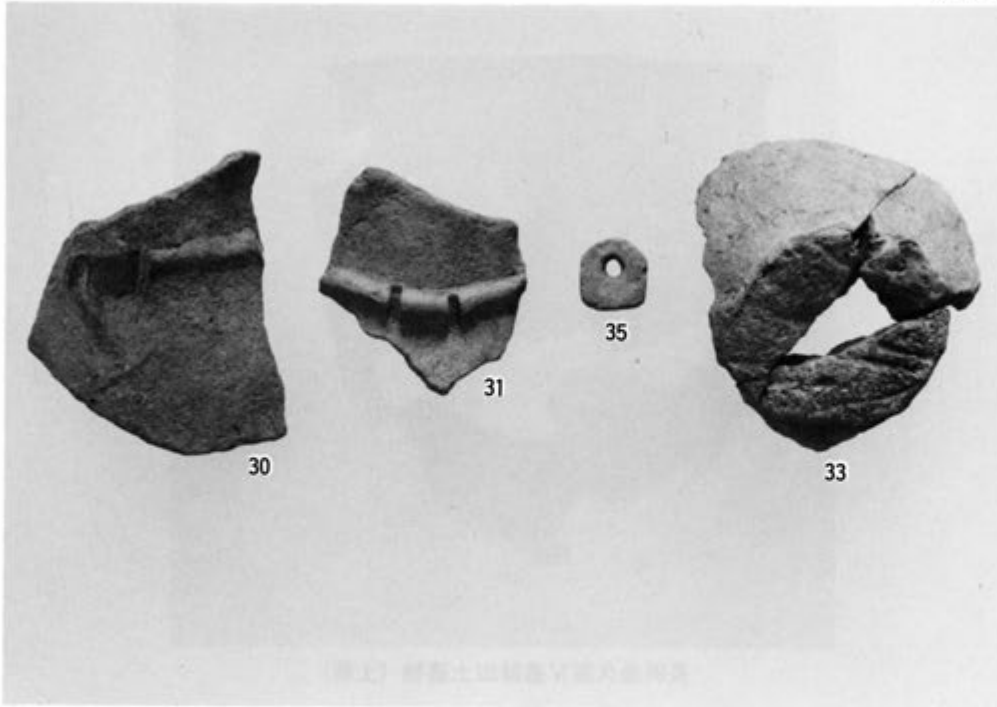


長浜金久第IV遺跡出土遺物（土器）

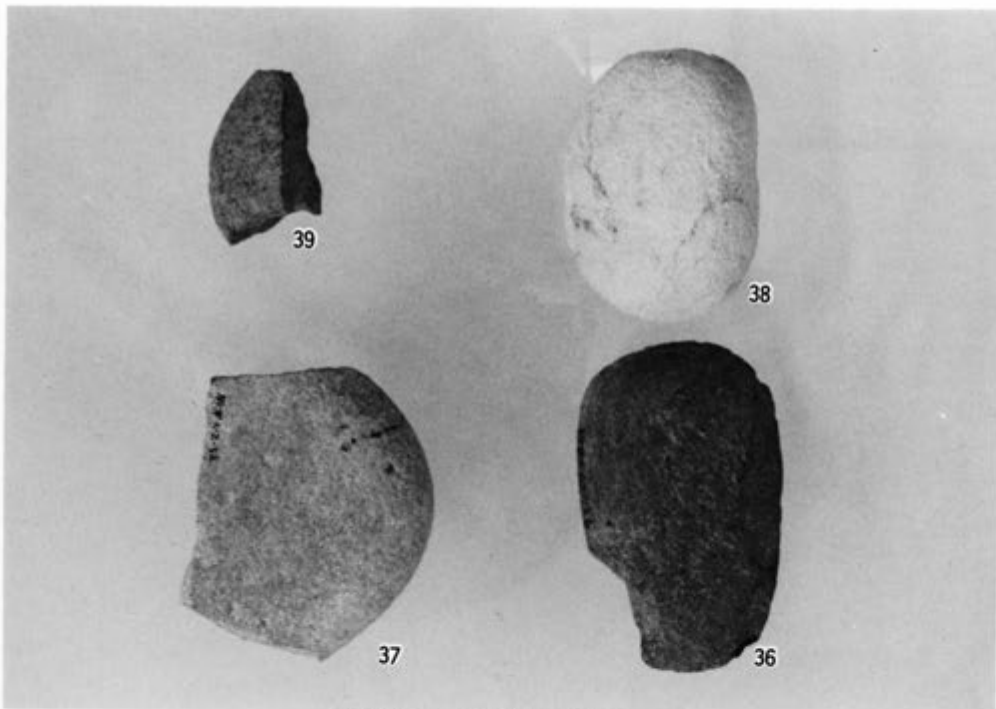
（高麗土・蓋土） 柳屋土器製法研究會刊



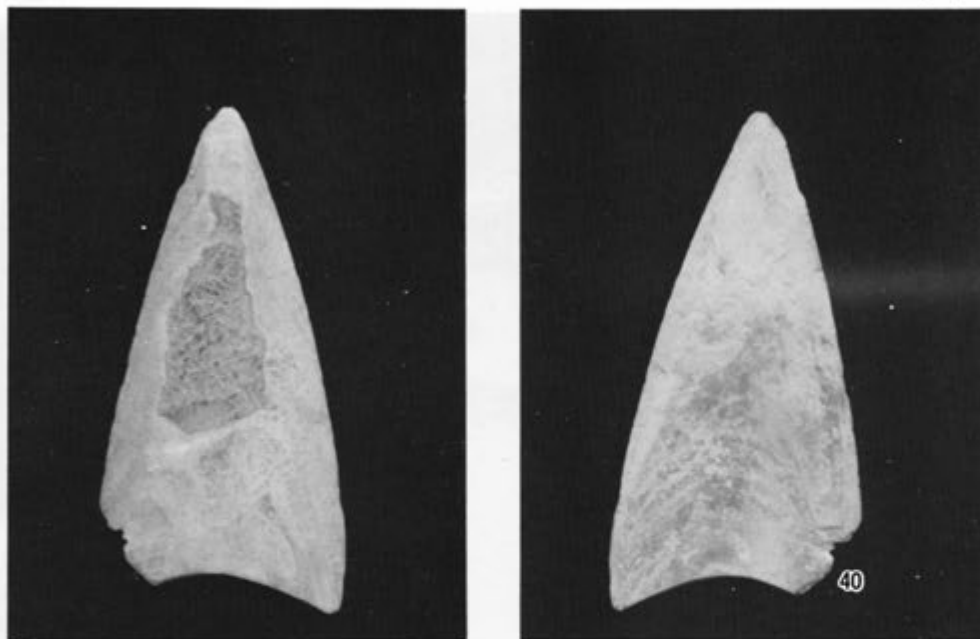
長浜金久第IV遺跡出土遺物（土器）



長浜金久第IV遺跡出土遺物（土器・土製品）

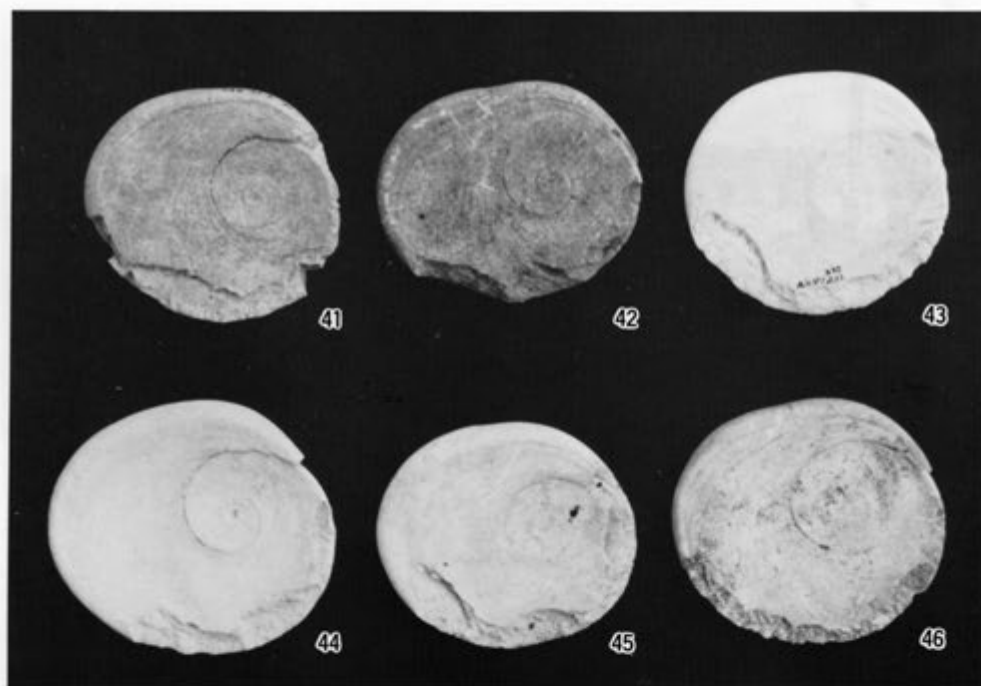


長浜金久第IV遺跡出土遺物（石器）



(表) 長浜金久第IV遺跡出土遺物 (貝鉄) (裏)

〔敬告〕 文部省埋蔵文化財センター長浜金久遺跡



長浜金久第IV遺跡出土遺物 (貝斧)



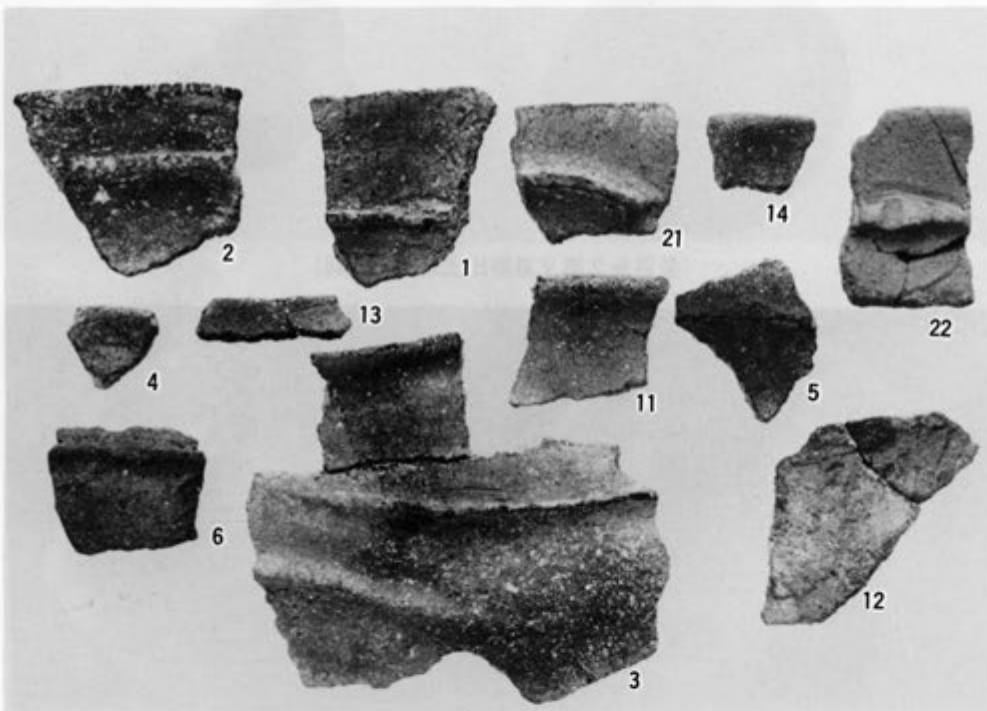
長浜金久第V遺跡遺物出土状況（崖部）



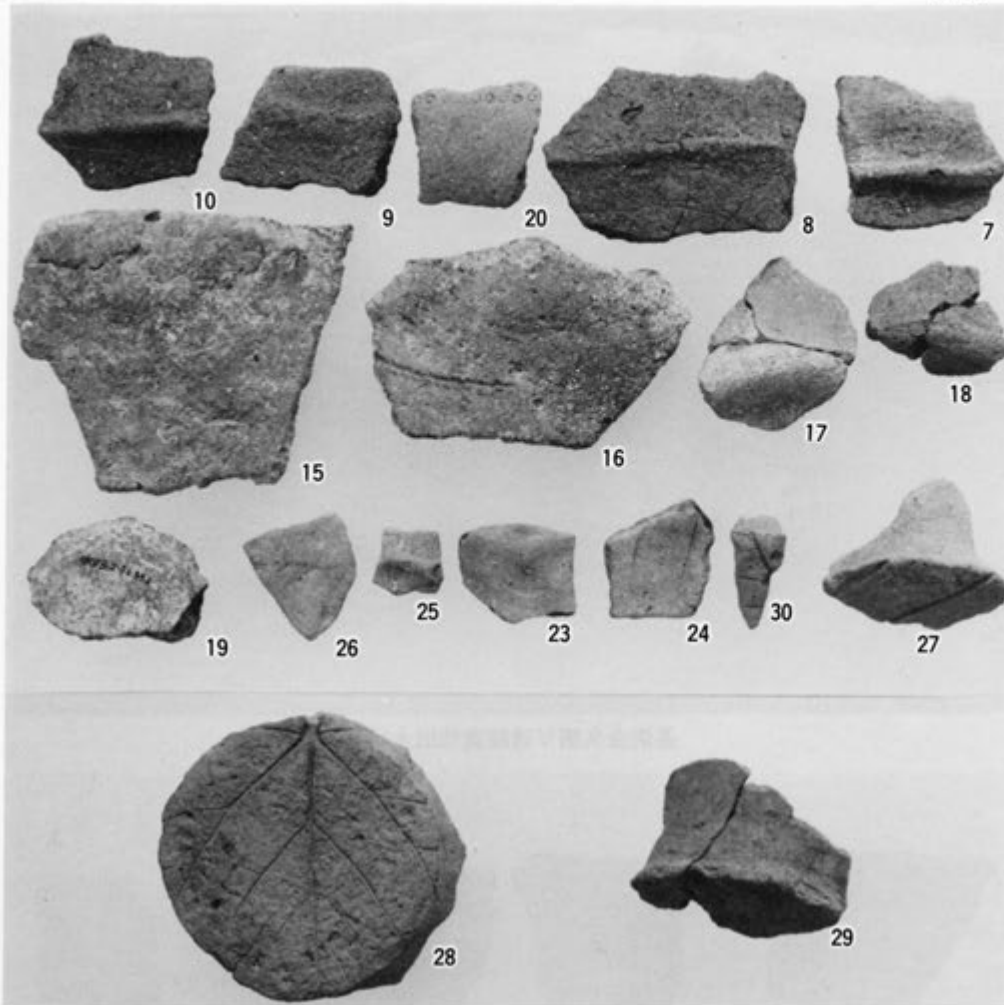
長浜金久第V遺跡全景



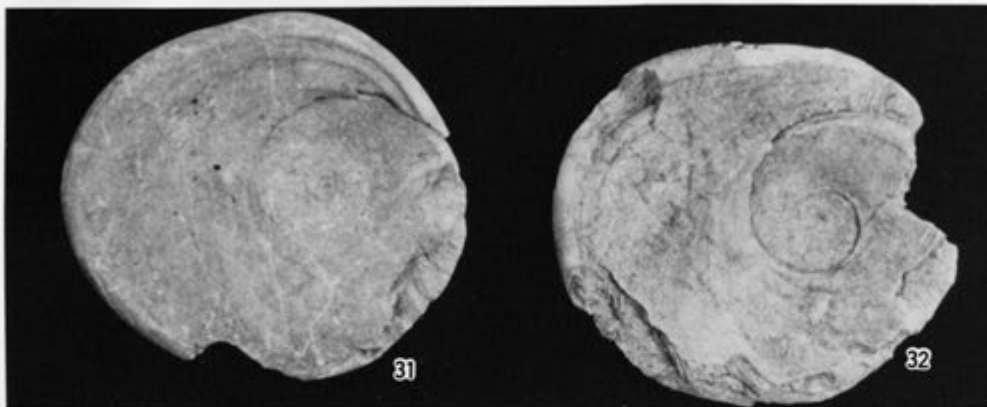
長浜金久第V遺跡遺物出土状況



長浜金久第V遺跡出土遺物（土器）



長浜金久第V遺跡出土遺物 (土器)



長浜金久第V遺跡出土遺物 (貝斧)

鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(42)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

長 浜 金 久 遺 跡

発行日 昭和61年3月

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 合資会社協同印刷 〒891-01 鹿児島市南栄3丁目1番地